

る。それは、それが形容するものの内部までも通俗化せずにはゐないのである。酔ばらつた馬太郎が大鎌を振りまわし、ころせ〜とわめき立ててゐる場面で、隣人の衆八がその鎌をとりあげようとして「こら、はなせ〜と、掛聲かけるみたいにして勢をつけた。はなせ〜手前がはなせと馬太郎はやりかへし、こら、おれがおれの鎌でおれの腹を切るんだ。邪魔するねえ！と吼え、ヤツと聲をかけると馬は両手をかけて鎌の柄を引いたのであつた。だからたまらなかつた。おそろしい勢で衆八の両手から捲ぎとられた大鎌は、その勢でもつてぐさりと馬太郎の腹のなかに飛び込み、長い刃の首つたけ突刺さつてしまつたのである」といふ情景は、もはや眞實とか虚妄といふところではないのである。完全に戯畫であり笑劇である。しかも、このやうな行動そのものの笑劇的な展開が、實際に於ては、人間のもつとも悲しむべき死の場面を蔽つてゐるのである。即ちこの作家は、もつとも悲しむべき事件そのものをさへ、もつとも愚かしい笑ひをもつて飾らうとする。それは人生そのもののもつとも甚だしい畸型化でなくてなんであらうか。このやうな畸型化の場面に於ける笑ひは、諷刺や譏諷のもつて逞しい響ではなく、また内なる力に溢れたものの他を赦すおほらかな哄笑でもない。それは人間を愚かなものと見るものの、他を愚かにする最も輕佻な笑である。

そしてまたこのやうな畸型的な歪曲が、「民事」の後半の物語全體をつらぬいてゐるのではなからうか。馬太郎の息子源三郎は大變な稼ぎ人であつて「野良では地響きをたてることになつた。源の畑の地響きは二三町も先から聽えると言はれ、源は歩くといふことを知らぬと言はれた。歩くといふことをせず、いつも駈けらかしてゐるといふ意味である」このやうながむしやらな源三郎が「まるで運轉をやめない機械のやうにがちやがちややるので」つひに母親が過勞に倒れ、更には源三郎自身も、過激な肉體の酷使に倒れて了ふといふのが、この小説の眼目である。

源三郎といふ貧しい農民が、そのやうな激しい勞苦のために倒れるといふ事情は、生活の重荷に原因するものではなくして、彼自身のがむしやらな性格そのものに原因するのであると作家によつて考へられてゐる。このやうな考へ方のなかにこの作家の畸型的手法の基礎がひそんでゐるのである。かやうにして、この作家は、登場人物の性格を歪め、それを極度に一面的に誇張することによつて、一方では安易な笑ひの感情を呼び起し、他方では現實をきはめて偏倚した形に於て概括し、それによつて人間性の良心的な探求を脇道に外してゐるのである。この作家は笑ひのかかる愚かな創造から身をしりぞけなかつたならば、益々笑話作家の列に墮ちこ

んで行くのではないかと危ぶまれる。

これにくらべれば、徳永直氏のもつ笑ひにはまだしも素直な心のおほどかさが見られる。「東京の片隅」のいたるところで、氏は多くの笑ひの場面を興へてゐる。この中篇小説は、一群のインテリ仲間が「嵐の時代」を通りぬけ、生活の苦澁にもまれ乍ら、いつしか市民としての生活に融けこんで行く推移を物語つたものである。時の流れが、市井の生活にどのやうな響きを興へたか、またそれが、これら一群のインテリの生活をどのやうに變貌させて行つたかが、深い思想的追及をもつてとまでは行かないまでも、すくなくとも、可成り具體的に、またあたたかい樂天性をもつて描いてある。そこには勤勞者のもつ健康な樂天性が、ほとんど、あまりに樂天的すぎるほどにまで表はされて居り、それが却つて氏の樂天性を不安定にする。たとへば老童軍の野球試合の場面で、「應援團長の鍋島は、妻君と二人して、トタン堀の傍に青い顔をしてたつてゐたが、味方のたれかゞ球をうつと、極りわるげに手を叩くほどのつつましやかな應援ぶりであつた」といふ條りに表はれてゐる笑ひは、ほとんど駄洒落である。おのづからなるおほらかな笑ひではなく強ひられた笑ひである。「東京の片隅」の多くの部分がこの種の駄洒落によつて、氏の眞實肉迫への氣勢を削いでゐる。それはやがてこの作品全體に描かれた生活を

も著しく安易なものとし、そのやうな生活把握への作家の努力をも、眞劍味あるものとして讀者に感ぜしめ得てゐないのである。しかしながら、氏の最近作「結婚記」のなかでは、笑ひは生活の深さを背景とし、人生の眞實を隈どる微かなる高笑の趣きを得ることに成功してゐる。この中に出て来る爺が、

「おらはアサヲの大叔父でやすがなイ」

「あの子は親類ぢうで一ばんぶしあはせなやつでう」

「おらはあの子が一ばんめんこいのツしや、ああ、ところがさて、おらは貧乏でがしてのう」  
と言ふところなどは、和田傳氏の小説のどのやうな場面も匹敵し得ない農民の眞のところが溢れてゐるのである。しかも、それを包む笑ひの氣分は、枯れた、靜かな、そしてぬくぬくと人の心を融かさずにはゐない暖かさに満ちたものである。それは人生に善意を感得するもののおほらかな、しかもあらゆる苦澁を味ひつくして尙ほかつ人間をいたはずにはゐられぬものを持つ、微かな笑ひの表情とでも言へるであらうか。彼の笑ひの背後には切實なる生活の苦慘がかくされてゐる。讀者は、そのやうな悲痛を超え得たものもつ高き笑が、その枯瘦せる微かなる表情を透して動いてゐるのを見ないではゐられないであらう。

(十五年十月)

## 愛情の結末

K君、僕はちかごろ考へてゐるある一つの事について君に語らうと思ふ。生理的事實に對する人間の愛情の尊さと、人間の造り出した科學又は技術への確信とを、文學が最近の幾つかの小説のなかで探求しようとしてゐるといふことについてである。

最近の文學が、人間の生活を生理的部面からのみ見ようとしてゐることについては、既に君に語つたことがあると思ふ。それは現實の激しい複雑な動きの中にあつて、據るべき最後のものを自分自らの中に見出さねばならなかつたといふこと、延いてはそれが遂に自分の生理の中にのみ見出されざるを得なかつた、といふことを指摘したいと思つたからの試みであつた。

このことは或る作家が、「人間の中に獸だけを見ようとする小説の努力」と自ら告白してゐる通り、生理のみが人間の最高の支配者であつて、良識とか、善意とか、冷靜なる認識等とい

ふ人間の思想的或ひは倫理的側面を、ともすれば忘れるといふ結果のなかに、小説を陥しいれかねなかつたのである。しかし、小説は生活のデテイルに喰ひ込めば喰ひ込む程、益々事實そのものの眞理に接近し、そのやうな人間生活の眞理そのものがちかちかに吾々に物語られることとなるのだ。

僕は此の點に於て、最近讀んだ小説のなかで、壺井榮氏の幾つかの作品に、深い興味を感じた。彼女の小説のなかには、人間の生理のまぬかれがたいきづな、昔の人ならば宿業とでも云つたであらうやうな生理の法則を、全く新しい光のもとに照らし出さうとする態度が見られると思ふのだ。

例へば、君は「赤いステッキ」といふ小説を讀んだことと思ふが、このなかでは、生れつき視力の弱い女の子に對する母親の深い愛情の濃淡が、その子供の、それこそまごまごとした一舉一動を中心として動いてゆく姿が描かれてあつた。このやうな不具者に對する肉親の愛情といふものが、どのやうにひそやかな怖れと悲しみのなかに息づいてゐるかを、泌々と告げてくれるといふことだけでも、僕たちの生活の内容は深くされたと思はないだらうか。だが、この小説を今ここでくわしく分析するわけにはゆかない。

親は深い絶望から立上ることが出来たのだ。母親は遺傳の宿業的な力にひとたびは打ちひしがれた。しかし、その子を、科學即ち醫學の進歩と、愛情の支へによつて不具から救ひ出すことが出来なくはない、といふ希望が微かなものではあるが、母親の歎きを鎮めることが出来たのだ。生理的事實に對する人間の愛情の戦ひが、ここでは科學の進歩に對する信頼に必死となつてしまつてゐる姿に君は胸を打たれるであらう。たとへ科學が、このやうな信頼にそのまゝ應へることが出来ないとしても、それでもこのやうな必死な念願から何ものかが科學の上に加へられないとは云へないであらう。人間の能力に對する信頼といふよりも、そのやうな能力を信するより他には生きる途が無いほどの切實なる態度、このことのなかに、あるべきものとしての人間性の姿が示されてゐるのだと僕は思ふ。

かやうにしてこの作家は、人間の愛情の強さと、知識、技術、科學への信頼とによつて、人間の裡なる獸の支配から幾らかでも逃れることの出来るといふことを讀者に確信させるといふ意味で、われわれに希望を持たせ、生活を明るく考へさせる作家であると云へるであらう。人間の最も不幸なる事實、即ち遺傳や血統による不具の宿命について考へながら、このやうに明るい希望を抱き得るといふことは、生活に練られた人の持つ深い樂天性を示してゐる。

君は彼女の最近書いた「窓」といふ小説も讀んでゐるだらう。「赤いステッキ」のなかで、ただ語られただけで、即ち報告されただけで、その解決を單に母親の深い愛情の中にゆだねられてあつたにすぎないものが、ここでは一步を進めて、人間の積極的な努力によつて生理の宿業的な支配を乗り越えてゆく事が出来る、といふ人間の力への信頼にまで高められてゐるのを感じることができると思ふ。「窓」の中では、白内障の子供が、東京の或る眼科醫の手術を受けて、次第に薄ぼんやりとはあるが視力を恢復してゆく推移や、その間に於ける子供の生々とした動作を中心にして、肉親の者の心がどのやうに、或ひは悦び、或ひは思ひわづらふかが描かれてゐる。

そして漸くこの子とこの母親が、新しい生活に馴れ、その馴れによつて新しい生活の信念が固められようとははじめた時に、第二の不幸が母親を襲ふのだ。新しく生れた子供の眼が、光に對して何一つ反應を示すことが出来なかつたときの母親の深い心の慟哭——この場面ほど感動的な描寫を君は最近の小説のなから幾つ數へることが出来るだらうか。

僕はこのやうな文章だけを書きとつて、何處かに永遠に保存して置きたいといふ空想を押へることが出来ない位だ。だが、その最後の結末は更に人間的に見事なものではなからうか。母

しかし、この樂天性は、一面に於て、愛情或ひは知識に盲目的に信賴するもの持つ、一脈の弱さを含んで居ることも見逃せないであらう。科學とは、一面において可能の確信によつて導かれるものではあるけれども、又他面に於て、絶えざる疑惑と吟味の精神から生れ出るものであることも確かである。例へば、肉親の子の不幸に對する解決は、かやうな仕方によつても得られることは確かであらうが、しかし、多くの不具なる人々の全體的な救ひについては又別個な考へ方が必要であり、そこには單なる母親の愛情をもつてしてだけでは解決されない多くの問題、單なる科學の發達のみをもつてしても、如何ともしがたい現實があるといふことを、この作家はともすれば讀者に忘れさせ兼ねないのである。

この點について同様に興味があるのは、橋本英吉氏の「富士」といふ小説である。この主人公は、異狀な藝術的才能に恵まれた塗繪師であるが、一種の生理上の缺陷から白内障に悩み日失明に近づいてゆくのである。繪を描かうとする強い藝術上の願望は、凡ゆる風景と光線とをさへぎつてしまふ失明の近づきを前にして、失望と、懊惱に陥るのである。苦惱は生活上の自暴自棄に變る。そのやうな時に惡魔がしのび込む。彼は街の女の肉慾のなかに自分を投入することによつて、一瞬の救ひを刹那の耽溺のなかに求めようとする。しかし、そのやうな耽溺

は、滅びを益々力強いものとして感じさせるばかりである。彼にはも早や死の中に自らの凡ゆる藝術の悩み、生活上の苦痛、自らのけがれからの脱出を求めることの外はない。彼はある冬の日家を出て、死地を富士山麓の深い雪のなかに求めようとするのである。その時彼の精神の滅び、肉體の滅亡の危險がさしせまつたことを直觀した彼の妻は、夫を求めて同じく山麓の雪の中をさまよひ出る。彼女は雪中に倒れてゐる彼を見出す。

この次に來る彼等の次のやうな會話を君は記憶してゐるであらう。  
 「どうしても歸るのはいやですか？ 立直る力がないと自分で見限つてしまつたんですか？」  
 「ほんとにさうなら、わたしもこゝで凍え死んでしまふ。あなたが絶望してしまつたのなら……」

この女は何物だらう？ 本當に心中するかも知れないぞ——さう思ふと彼は女の底ぬけの寛大さに打ちまかされたのを感じた。——  
 といふのである。妻のこのやうな深い愛情によつて、白内障の苦しみもつひに克服されるといふのがこの小説の結末であつた。この解決はさきに述べた壺井榮氏の「窓」の思想と殆ど同じである。ただこの作家は、藝術と生理との矛盾からの解脱を藝術と愛情とのみ求めはしな

かつた。彼は、「この家を壊して建て直しをしよう。……今度は百姓家にしようと思ふ。屋敷まわりを耕すくらゐなら俺にも出来るさ。」と云つてゐる。

彼は勤勞の生活それ自らのなかに、藝術と生理との争ひからの解脱を求めてゐるのである。この二人の作家の解決には多くの疑問が存する。このやうな解決が果して眞の人生的矛盾からの脱出を與へ得るか否かは大なる問題であり、このことこそ論争の中心とすべき焦點であらう。だがこのことについては又別にのべよう。何れにしても彼等が人間の能力、人間の生活の豊かな力に信頼し、それに強くすがりつかうとする態度を示してゐることは、人間性のなかに獸性のみを見出さうと努めてきたある種の小説の流れに對して、確かに新しい人間性の發見と創造との途を切りひらかうとしてゐることの證據であると思はれる。

K君、僕はまだ言ふべきことを澤山残してゐると思ふ。しかしそれは君の聰明にゆだねることとして今日は一先づこれで擱筆することをゆるしてくれたまへ。

(十五年十一月)

## 生活の深さ

——「いとなみ」について——

U君

先日は誠にお世話さまでした。君にお目にかかれたことは豫期せぬ悦びでした。本當のところ、心の底ではきつと君にも會へるかも知れない、とそんな豫感もしなかつた譯ではなかつたのです。K市に行かう。と心を決めた瞬間に、できたら君にも會つて見よう、と思はないでもなかつたからです。

それでも、K市に着いて、列車から降りた人混みにまじつて出口に近づき、知り合ひのY君の背の高い姿を認めた時、まさかそのすぐ傍にY君と並んで、君が僕を待ちうけてゐられたとは知りませんでした。僕はうすうす期待してゐたものが、こんなにも素早く僕の前に現はれて

きたことを、怪しむよりむしろ悦ぶ心で受けとらうとしたことは事實です。

それから、君達の案内でS峽の山路を歩いたあの日の記憶は、いつまでも僕の内部に残つて行くであらうと思ひます。K市の街を出はづれた所から、僕はバスの窓に倚つてずうつと麥畑を見つめてゐました。あをあをとした麥。暖かい日光の下でほかほかとふくれ上つてゐる畦の黒土。バスが次第に這ひのぼつて行く傾斜地からK市を超えた向ふの山脈の一點に、頂きを白く輝かしてゐる富士の滑らかな肌が、しだいに高くせり上つて来るのを見ました。またバスの行手の右方に、黝い冬のくすみを沈めた連山のすぐ後から、あの長くのび切つた雪白の南アルプスの峰々を見ました。

S峽はまだ冬の眠りから醒め切つてはゐなかつたと言はねばなりません。それでも深い谷底で淡紅の一叢の山つつじを見つけることはできました。さるすべりもまだ枯葉を落し切つてはゐませんでした。谷ぞひの小徑には落葉が層をなしてふくらんでゐました。午後の太陽のなかで、やうやく芽ぐんだばかりのくろもじの木の香ぐはしい匂ひが、いろいろな枯れたものの匂ひに混つてながれてゐたのもはつきりと思ひ出されます。

そればかりではなく、その道々君と話したことがどれだけ僕達をあたためたか知れないので

す。君は歴史文學について話しましたね。さうです。君は今度の芥川賞に當つた櫻田常久といふ人の「平賀源内」といふ作品について、

「あの作品は歴史小説ではないと思ひます。あれの中で描かれたものは歴史上のある時代の心理ではなくて、現代人の心理だと思ひますが、どうでせう」

と訊ねましたね。僕は直ちに答へたのでした。

「さうです。あの作品は歴史小説ではないと思ひます。あの作家は、作家の抱く現代的な思想や感情を、平賀源内といふ歴史上の人物や行爲に假託してゐるのだと思ひます。つまり作家のテーマのために歴史的素材を借りたものなのです。だから、あれは歴史小説ではなくて、寓意小説ではないでせうか」

「さうですね。たしかにあれは歴史小説ではないと思ひます。そして歴史小説をあつちやうなものだと考へることは非常に有害なことではないでせうか。もつとも、もしあれが寓意小説だとするなら、その寓意、つまりその作品の主題が、もつと問題にされねばならぬと思ひます。」

「たしかに、そのテーマが問題にされねばなりません。櫻田といふ作家は、あの作品のなか

で、科學や知識のおそろしい壓力に撥ねとばされたインテリが、農村に歸り土に歸るといふことによつて、知識人としての自己破滅から自らを救出しようとした、現代のある時期の人生の姿を描かうとしたのだと思ふのです。『耕さざるものは食ふべからず』といふモットーは、平賀源内のモットーであるばかりでなく、實に作家自身にとつてももつとも重要な人生の信條であつたらうと思ひます。そればかりではありません。土に歸り農村に歸るといふこと、歸るばかりでなく、身をもつて土を耕し勞働に従ふといふこと、それは實にある時期の良心的な知識人の、全體的な時代的傾向であつたと思ひます。

これを、たとへば島木健作氏は、その『生活の探求』のなかで、駿介といふ形象に於てある程度典型化しようと思ひます。『平賀源内』は、袴をきた駿介なのです。駿介は知識と科學に絶望して（何故絶望しなければならぬかは作家によつて充分には描きつくされてゐませんが）農村に歸り開墾に熱中します。平賀源内も、ふしぎな衝動的行爲のために、知識と科學の世界に望みを絶つて、農村に赴き開墾に従事いたします。駿介は託兒所を作つたり共同施設を作つたりして農民の生活を改善しようと努力します。源内は醫學の知識によつて農民を疫病の患ひから救出します。——駿介と源内はほとんど同一の心理と行動とに立つてゐる

のです。この作家は源内を通じて駿介を描かうと試みてゐるのです。否、駿介ではなくて、駿介を通じて表現されてゐる作家の生活信條を、人生態度を、表現しようと思つてゐるのです。

それ故、ここで問題となるのは、『平賀源内』といふ作品と作家の立場ばかりでなく、それと結びついた、作家の藝術的意圖、いはば、作家のかかる生活信條や人生態度そのものが問題とならねばならぬのです。つまり『耕さざるものは食ふべからず』といふ作品の主題そのものを、現實そのものの課題との聯關に於て、もつと深く考へて見なければ、批評にはならないと思ふのです。

凡そこのやうなことを、あまり話上手でもない僕は、話したと思ひます。僕達の中には激しい文學上の問題がぎりぎり浮び上つてくるのでした。冬が去つてまだ遠くはない、そして刺激する強烈な春はまだ醒めてはゐない、枯れた、けれどもほかほかと温かい山峽の日溜りや、涼々たる水音の清らかなこの温藉たる風光の中に、僕達の文學的熱情が互ひに浸み透りながら昂つて來たのを、僕はまだはつきりと憶えてゐるのです。

其夜君達は僕の宿舍まで遊びに來てくれましたね。いろいろな文學談は、平生あまり談話したり人に會つたりしない僕にとつても、随分、懐かしい學生時代の思ひ出を僕の胸に甦らせず



僕はこの小旅行に、著者から贈つていただいた「いとなみ」といふ小説を携へて出ました。僕はこの小説を君達が歸つたあとから読み始めました。其の夜は読み切れないので、翌日、K市からの汽車に乗るや否や読みついで、たうとう、窓外の風景など一顧もせず、東京に歸り着く前に読み終へました。僕はここでも、君達と知り合つたと同じ位に、強い感動を與へられたことを告白せずにはゐられません。僕は、君達については、君達が地方の生活そのものから生れ出したものであつて、その地方のいはば精神的文化の基礎を築いてゐるといふ、生活地盤の堅固性そのものに感動させられたのです。君達の存在は、「生活の探求」に於ける駿介のやうな精神的歸來者ではないのです。東京から地方に歸るのでもなく、知識から勞働に歸つて行くのでもなく、實にその生活の第一歩から既に農村の生活であり、勤勞と刻苦と精神の生活そのものだつたのです。

この同じ理由が「いとなみ」に於て僕を撃つのです。「いとなみ」の主人公は、駿介や源内のやうな精神的歸來者ではありません。彼は最初から農村に生れ、農民として育ち、農民として生活を切りひらき、しかもその生活意識は、君達と同じ程に高い全日本文化の水準に立ち得てゐるのです。

にはゐませんでした。僕は君達の考へてゐられることが、部分的には一致せぬところはあるにせよ、ふしぎなまでに僕の思考と同じ水準に立つてゐるものであることを知りました。しかもそれが、僕とは何等の交渉もないこの地方の一隅で、永い年月の間、その地方生活そのものに密着しながら、獨立的に育ち上つて來たその成果に於てさうであることを知りました。君は東京に出て文壇に出ることなど夢にも考へてはゐないやうですね。そればかりではなく、君はこの山國にどつかと根を下ろし、びくともしない生活の地盤をきづいてゐるのです。君の評論の仕事はもう十年近くも以前からS毎日を地盤にしつづけられてゐるといふ話でしたね。

僕は、君達の姿にふれることによつて、君達の築いて行かうとする地方文化が、中央文壇とは本質的に異つた生活性をもつてゐることを確信することができました。君達は都會から歸つた知識人ではなくして、農村の中で育つて農村そのものに結びついて成長して來た本質的な農村人であり、地方を一步も棄てずにその地方での生活に結びついて成長して來た本質的な農村的知識水準にまで到達した若い世代なのです。僕はこのやうな意味で、地方文化の將來に、

「いとなみ」は藤島まきといふ女流作家の最初の長篇小説です。君は多分「文學界」の昭和十五年六月號にのつた「次男」といふ作品を記憶してゐられるでせう。それから同じく今年の四月號「文學界」にのつた「あめつち」といふ作品も讀まれたことと思ひます。これらの作品は、最近の農民文學を見る上には見落すことのできない立派な仕事です。試みに最近の農民文學作品の目錄を作つてごらん下さい。君は、それがどんなに憐れむべき衰退の中に沈んでゐるかに愕かされるでせう。和田傳氏の農村物が、農民文學などとはまさか君も言はれはしないでせう。伊藤永之介氏の「朝市」や「炭焼き」等がいくらか農民を描かうとつとめてはゐますが、その他にどんな作品があつたと言へるでせうか。

農民小説は實に尠いのです。尠いばかりでなくその作品の内容も低下しつつあります。岩倉政治といふ人の農村を舞臺にとつた小説もいくつか出てゐますが、しかしあれは農民文學と言ひ得られるものではありません。このやうな農民小説の衰退のなかで、藤島氏の終始かはらぬ一貫した農民小説の仕事だけは、ひとり群を抜いてゐるのです。それは深く深く土に根を下ろして行かうとする若い樹木のやうに、時潮の風雲を凌いで、いつしか不動の地位を築き上げようとしてゐると言つてもいいでせう。

この作家の對象はあくまで農民の生活に集注せられてゐます。農民、しかも貧しく苦しみあがく小作人達の生活です。そしてそれが若い新しい現代の中に生きてゐる農民の中選ばれます。この若々しい農民を作品の中心人物に持つて來たといふことが、氏の小説を成功させてゐる主要な藝術的方法だと言ふことはここで特に指摘しておかねばなりません。何故なら農村を老人の眼から見てしまつては、農民生活に押しよせてくる現代的な諸條件が決して正當には把握され得ないからです。もつとも敏感に反應し得る若い農民の姿を捉へることは、今後の農民文學の發展にとつて極めて重要なことであると思ひます。

藤島氏は「いとなみ」のなかで、このやうな若い農民を登場させました。守次といふのが主人公です。早く父を喪つた守次は二十四で「祖父の死以來、がらくたのやうな立花の家を渡され、一切合財自分の手に握つてみて、始めて彼は自分の重さと家の重たさを、ひしひしと身に感じた。」のです。自分の重さと家の重たさとはいかなることとせうか。それは若い一家の主人として彼の肩の上に落ちかかつた農村生活の全體的な重壓と言つてもいいでせう。

若いこの農民の肩にめり込む重荷の第一は祖父から背負はされてゐる家の負債であります。それはつもりもつて千圓を超えようとしてゐます。一年の農業労働からの収益の過半を負債

の利子に廻さねばならないのが祖父達の遣り方でした。つまり従來の農村風俗だったので。若い守次は、このやうな舊い觀念や束縛から解放されようと努めて止みません。「家を暗く取りまいてゐた借金の問題から、早く一應の整理をつけ、若い世代の立花家の營み方をしたいと利子に追はれながら、彼はいつも考へ續けた」のです。その結果、彼は體面を考へる母親の反對と歎願とを押し切つて海沿ひの小麥畑を手離さうと決心します。

「守次は祖父の代からの支拂を胸の中で計算し、正當を越えた利子の額に、清瀬へのひげ目がすーとこけてゆく氣だつた。守次は守次なりにもう一度温くてえ關係の中で、いつの間にか竈の灰までこつきりさらひ取られる道は選ぶまい、と決心をつけてゐた」のです。守次は田畑を賣つた現金六百五十圓をもつて、千圓の借金を決済しようと交渉しますが、金貸しの手代は仲應じません。守次は相手の老けた術をみると、自分で金貸のところへ出掛けてゆき、しづかに坐り直します。「お前様がそのつもりなら、一應この金は俺納ふべ。その代り今度この六百圓出す時ア今までの俺だねえかね、裁判所でも何んでも行くから」

このやうな若い守次の一徹な態度に、金貸は一應敗北します。しかしそれだけに一層の警戒が加はります。守次にはまだ別口の負債が残つてゐるのです。そして、そのやうな負債の重荷

は單に守次ばかりでなく村の貧しい農民の大部分が背負はされてゐる共通の現實です。ところで、この農村の重苦しい現實の中に生きてゐるのは、長塚節がその「土」の中で描いた盲目的な運命服従の農民ではありません。若い守次を中心に「辯がら奴」と言はれてゐる強氣な竹三郎といふ三十五で六人の子供を持つた世帯主や、元氣者の佐七郎、一平と云ふ老人や長作といふ貧農同情者などが、農耕生活の利害關係そのものに依つて次第に結ばれて來ます。その最初の動機は水害といふ自然的な條件に對する防衛であります。

水害や或ひは旱害に對する農民の苦痛は従來の農民文學の中でも幾度かとりあげられてゐますが、多くはそれを抗ひがたい自然の暴力であり天災であると諦める態度に於て捕へるか、さうでなければ強暴な絶望的な發作に於て描くか、又は夢のやうな救ひの出現によつて描くかよりの外的態度を知らないのです。

たとへば岩倉政治氏の「村長日記」に現はれる旱害は、いよいよ切端つまつた瞬間に於ける豪雨の襲來によつて救はれて居りますし、加賀秋二氏の「立札」などに於ける大洪水の場面は何とも批評のできぬ不自然な虚構を露出してゐたと思ひます。要するに従來の農民文學は、自然的條件に對する農民の防衛を消極的な受身な無氣力な諦觀と、そこからの虚構な空想的な逃

れ道とに導くより外を知らなかつたのです。

しかるに藤島氏の「いとなみ」に於ける農民は、そのやうな舊い諦觀的空想的な態度を脱し切つて、積極的に自然の暴力に對抗することを考へてゐる、新しいタイプの農民です。彼等は貧農ばかりです。低い水害の甚だしい田畑を耕さねばならないといふ共通の事情が、彼等をして水に對するもつとも眞剣な積極的な防衛策を考へさせます。彼等はモーターの共同購入といふ一つの解決方法をつかみます。もちろん二百五十圓のモーター代金の調達には農事組合を動かし組合の金を借りる他はありませんが、組合長は容易には動きません。けれども彼等は一步と目的を貫徹して行きます。彼等の行方に立ちふさがるいろいろな妨害は、彼等の突進の手によつて事毎にその正體を露はにさせられます。

モーター組合が出来ると、その次は借金の整理に進まうとする氣組みとなります。彼等はこゝでも舊い農民のやうにいつまでも消極的に引つこんで、益々重たい締木をつみ重ねる遣り方には止つてゐられません。彼等は負債整理組合より外には逃れ道のないことを自覺し得るだけの現代人です。

「まあいよいよとなれば、俺ア整理組合より他に方法はあんめと思ふだがね」

「ふむ、負債整理な。」

竹三郎は眞剣に首を傾けた。

「實はねえ、俺も此頃でア夜寝つと胸にきんのが、丸屋さんの前だが、借金の事さ。千圓に割五分の利子、利子つてえと軀中、利息に這ひづられるやうでおへねえもんだぞ。十年経つ中には二倍もその餘にもなんべ。十年つちアまあづ俺が竹やん程の年頃かや。それでアいかな俺が可愛想だつてねえのけ。」

「ふむ。さうだな勘定だな。」

「高い利子で肩代りばししても解決はねえだ。整理組合こせえてやれば、十四五年後にア利子拂ひ元利共に皆済だ。それうまく成就せんのもさせねえもてんでんの考へやうだが……」

「十年後の二倍の借金と皆済でア大違ひも違え大けえ違うだ。」

「うん。兎も角お先まつくらでア俺なんぼにも正直の所恐つかねえのさ。」

竹三郎はすいと膝を寄せると低聲になり、

「お前俺家のこの暮しみて、俺の子澤山見て、一體なんぼの借金あつと思ふ。いや、この様でも錢借して呉れる人があつと思ふかや。事實俺ア自慢でアねえが、俺の手からはこゝ十年借金

一銭しなかつたぞ。

處が借金ア二千あんだぞ。このやせ百姓に元々三百足らずの元金だ。俺が代で拂へねえけ、俺が杉雄の代に又引き継ぎだア。」

「人間事でアねえわな。」

「十五年賦、皆済、やつべ。俺、ゐても立つてもゐらんねえだ。」

——このやうにして、生活そのものの苦しさが彼等を解決にまで馳り立てずにはゐないので。彼等はずつひに「組合員數七人、要負債整理額九五〇〇圓」の整理組合を結成いたします。彼等の積極性は直ちに農村の各階層に動搖を與へないではゐません。それは一方では金貸や肥料商達の締め出し策となつて彼等貧農を苦しめるといふ形勢となります。しかし農會の若い鈴木技術員の援助によつて、この農村の土地と自然とに結びついた、農業生産増進の研究が開始され、二毛作のため「青年試験場」が守次の田に設けられます。彼等は大雨の害に對抗するために早稲を蒔付けたり、次第に自然的に共同植付や共同耕作の經營形態にまで進んで行かうと努力します。

ところで、ここでも亦農村の現實は容易なものではありません。彼等は土地所有の根本的な

問題に當面せずにはゐられません。そして戦争が始まります。これから農村の本當の苦しさと立派さが現はれるであらうといふ大きな生活展開の豫想の中にこの作品は終つてゐます。

僕は、守次や竹三郎たちのなかに、現代の農民の生き苦しみ切り開かうとする、眞實の新しい農民の姿を見ずにはゐられません。彼等は親代々の農民です。島木氏の作品に現はれるやうな知識人と農民の混合物では決してありません。眞底の、生れるからの農民です。このやうな農民らしい農民の姿を捕へただけでも、この作品は既に最近の農民文學中のもつとも傑れた仕事の一つなのです。しかもその農民が和田傳的な物慾の權化としてではなく、伊藤永之介的な鈍重と暗愚の形象としてではなく、既に一定の現代的な思考に立ち得る農民として、自己の置かれた條件を冷靜に認識することのできる、眞に自覺せる若い世代として捉へられてゐることは更に、この小説を立派なものとなしとげてゐるのです。彼等は自己をとりまく自然や農村機構の網目を、生活そのものの叡智によつて認識することができればかりでなく、その認識に立つて、じつくりと生活そのものに即した解決策に進んで行くのです。

このやうな生活展開の積極的な自覺ある農民の形象は、従來の農民文學には未だ曾つて見られなかつた新しい形象です。否それは單に新しいばかりでなく、おそらく現代農村に於けるも

つとも本質的な且つ擡頭的な農民層の形象です。僕達はこのやうな積極性と生活性とを備へた農民の形象を、もつとも注意ぶかく理解し、その行爲を解明し、その思考を判断して行かねばならないと思ひます。なぜなら、かかる積極的生活打開の意志ある農民形象の追及と創造と認識によつてのみ、農村を支配する眞の苦痛や暗黒や絶望を知ることができ、またかかる痛苦と絶望の底から立ち上るための眞の道程を發見し認識することが出来るからです。

最後に、「いとなみ」の自然描寫について僕は大きな疑問を感じさせられたことを否みません。なるほどこの作家の自然描寫や會話は、農民そのものの眼で見、口で語つた通りが描かれてゐるかも知れません。しかしそのためにこの作品の農村に於ける地方的特質が、よりよく表現されたとは思はれません。描かれた自然は、作家の眼で見られたものではなく、農民、しかも守次達新しい世代の農民ではない、もつと舊くさい感覺をもつた農民の感覺に於て捕へられてゐると思ひます。僕は、守次達のやうな自覺と叡智ある農民ならば、もつと自然そのものの新しい感覺を持ち得てゐると思ひます。そればかりでなく農村生活の特殊性は、言葉の地方的特徴ばかりでなく、生活の具體的・デテイルに於ける特殊性として捕へらるべきであると思ひます。言葉そのものは、言語藝術に於ては、もつと全日本的な普遍性をもつて表現することが、

その言葉の内容たる生活の具體性を、よりよく表現し得るのではないかと思ひます。つまり、もつと普遍的に理解され得る言葉によつてこそ、生活の具體的傳達がより深く行はれ得るのではないかと思ふのです。

いづれにしても、僕は、「いとなみ」の姿に強く惹かれます。そのびくともしない生活地盤の深さは眞實にみちたものだと思ひます。君も是非一讀される價值のある作品だと信じて、ここに僕の愚かな考へを羅列してみました。

(十六年五月)

## 文學の郷土性

私はここで、現代小説に於ける郷土性追及の問題について考へてみたいと思ふ。いつたい現代小説には果して眞實の郷土性に到らうとする意識的努力があつたであらうか。またたとへそのやうな努力があつたとして、それは果して眞實の郷土性を得てゐるだらうか。遺憾ながら、私は否と答へざるを得ない。文學、殊に小説に於ける郷土性の問題は、從來正しい方向に沿つて提起されたことがなかつたし、したがつて、それが意識的な自覺に於て探求され表現されたこともなかつたことは確かである。それは小説に於てさうであるばかりか、文學評論の分野に於ても、いままでほとんど黙過され棄却されて來た問題であつた。

たとへば、長塚節の名作「土」の郷土性について、われわれはいまだ結論的な見解にまで到達するほどの研究や評論を見てはゐない。ところで、名作「土」の價値の過半はその郷土性に

存在するのである。もちろんそれが農民、特に貧農の生活をその苦惱と心情と外的條件とに於て把へようとした最初のものであつたこと、即ち現代の農民文學の第一の礎石を置いたものであつたことの價値については言ふまでもない。この作品の、農民文學に於ける位置や影響については、又別に論じなければならぬ。

けれども、こんなすぐれた作品に於ても、まだ、眞の郷土性に到り得てゐるかどうかには疑問があると思ふ。といふよりも、この作品は作品として郷土性の問題を正面から提出した最初のものであるだけに、その中に把へられ定着された郷土性の内容には、未討論の問題が澤山含まれてゐると思ふのだ。なるほど「土」の中に登場する諸人物は鬼怒川べりの貧寒たる農村に於ける生活の様相を傳へることに一應成功してはゐる。讀者は、農村とはかくのごときものであり、農民とはかくのごときものであつたか、といふことを實に生々と想ひ描くことができるとは相違ない。けれども、同時にこのやうな農村が、全く世界と隔離され、この一村が、他の町村ばかりでなく、廣く言つて當時の日本全體の情勢と、どのやうなつながりに於て生活してゐたかを、殆んど知ることができないであらうと思ふ。いつて見れば、ここに描かれた郷土は武陵桃源的郷土なのだ。つまり當時の全國的な状態から完全に遮斷された、あまりにも孤立的

すぎる郷土だ。このことを、言ひかへれば、長塚節はこの作品に於て、一定の地方や農村を、ただひたすらその個性別に於てのみ追及して、その追及を、もつと廣汎な全體的關聯に於ける普遍性にまで擴大することができなかつたといふことである。そして、彼が、かかる全體的關聯に於ける普遍性を意識することができなかつたといふことが、逆に、彼のとらへた農村の郷土的特殊性を眞實のものから遠ざけずにはゐなかつたのだ。

なるほどこの作品の中には、貧しいこの農村を圍繞する自然と風物が極めて細密に描かれてゐる。四季の推移につれて、田起し、種蒔、田植、收穫等の農業生産の様式が描寫されるばかりでなく、早苗振とか「まち」とか「おで念佛」といふ風な農村娛樂の姿が、その地方に個々の習慣や風俗として描寫されてゐる。一見これらのものは、この農村に於ける郷土性を形成してゐるやうに思はれる。けれども仔細に考へてみれば、これらのものが果して眞の郷土性の内容をなしてゐるか否かは疑はしい。勘次達の生活してゐた自然は、單なる自然ではなくして、その自然そのものが、深く彼等の生活を左右するところの生活對象であらねばならない。川は徒らなる川ではなくして、農村の生活を深く支配する灌漑の水路なのだ。竹藪や森や野原のいづれをとつてみても、その農村に生活する人々にとつて、もつとも深い生活の對象となるの

だ。したがつて、これらの地理的自然的特殊性でさへも、人間生活との相互關聯なしに把握されたのでは、その眞實にまで到り得ぬことは自明であらう。そして、人間生活は、それがどのやうな僻遠に於て營まれてゐるにせよ、完全に社會や國家から孤立し得るものは一つもない。勘次やきよをとりかこむ農村の人々は、一方に於て、この農村に個有な、自然的、地理的、風俗的形式に於て生活してゐるものであると同時に、他方に於て、當時の日本の全體的な政治的經濟的狀態の中で、生きてゐるのである。

即ち、彼等の中には、日清、日露の戦争の昂奮も記憶されてゐたにちがひない。税金の問題、物價殊に米價の問題、上毛地方に特有な産業の問題、地主と小作との關係等、凡そこれらは、その特有の關係に於て、勘次達の生活してゐた農村を動かしてゐたに相違ないのである。郷土性なるものは、かかる全體的關聯のもとに、特殊な條件に於て發展しつつある地方の特殊性なのであるから、かかる全體性を無視した單なる個有性が、その地方の郷土性を形成してゐるものでないことも明白である。名作「土」の郷土性は、かかる一面的郷土性であり、さらに突込んで言へば、それは眞の郷土性にまで到達してはゐないといふことになる。

そのことは、「土」の中に表はれた「地方語」の問題を考へれば、一層明白となるのではない



だらうか。「土」のなかに使用されてゐる地方語は、正直に言つて私達には、何らかの註釋なしには殆んど理解され得ない。恐らく日本の大多數の他地方の讀者にとつても理解しがたいことであらうと思ふ。そのやうな特殊な地方語は、たしかにある一定地域の人々の、生活表現であるから、いはば郷土性の一要素を形成してゐることは確かである。そしてこのやうな郷土性の一要素としての地方語を、意識的に小説の上にとらへたことは、一面からは、郷土性への深い肉迫であると言へよう。

けれども、言葉はその地方地方の生活表現であると同時に、また他面に於て人と人との交通の手段であり、感情や心理や思考の傳達の媒介體である。そのやうな媒介としては、言葉は可能な限り普遍性に到らうとする努力をもたねばならない。言葉の媒介としての普遍性が高まれば高まるほど、一國語の現實的な生き方は強まつてくると言はねばならない。また言葉の持つ普遍性の背後には、生活そのものの普遍化が進行しつつあるのである。教育の普及による地方語の淘汰については言ふまでもない。交通、通信、農業生産の諸形式、日常必需品の自給經濟の崩壊、町村行政の諸形式を通じて、いかなる山村僻地と雖も文化の餘波にゆすぶられないところは無いのだ。舊いその地方に獨りな生活形態は、かやうにして、その地方の特殊な自然的

歴史的な條件のもとに制約されながら、同時に、一般的國家的文化の諸條件によつて制約され、生活そのものが文化の普遍性に浸潤されてゆく。したがつて、地方語それ自身も、かかる普遍性を裏づける新しい言葉によつて浸潤されざるを得ない。つまり、言葉そのものにも、特殊性と普遍性とが混在しつつあると言はねばならない。それゆゑ言葉の郷土性なるものは、單なる地方語ではなく、むしろ全國語化しつつある地方語として把握されねばならぬ。

のみならず、かかる浸潤されつつある地方語を小説の中に捕捉し定着する際には、小説そのものが感情や心理の傳達に於ける媒介であるといふ規定にしたがつて、出來得る限り、あらゆる讀者に明瞭に理解される、映像的な生活の具體性に伴はねばいけないといふこととなる。生活の具體的行動の描寫から浮き離れた單なる會話に於て、地方語をそのまま提出することとは、その地方語が特殊的であればあるだけ、眞の郷土性から遠ざかつて了ひ、郷土性のなかから歴史に沿ふ發展の面を除外することとなる。「土」のなかで會話の場面だけが殊更に強く郷土的であるかの如く見え乍ら、實はその内容がはつきり理解できず、したがつてそこに表現されてゐる筈の郷土性も、その實體は案外に漠然たるものであるといふことは、ここから説明されるであらう。

ところで、郷土性の問題は、長塚節以後もしばしばとりあげられて來てはゐる。たとへば、最近の農民文學は、かなり正しく郷土性なるものを理解しようと努めてはゐる。私はここに新進女流作家藤島まき氏の書下し長篇小説「いとなみ」をあげよう。著者はこの小説の後書のかで次のやうに書いてゐる。

「新しい風が、古い風にとつて代らうとしてゐるこの未曾有の秋にあたつて、農村も亦、かつてない決意と重さの中に、自分自身の新しさを打ち建てようとしてゐます。昭和の「土」は昭和に生き、昭和の中にある農民作家の手で描かれねばならない。むろん、それは三十餘年前の「土」でありながら、しかもはつきり昭和の「土」であらねばならない」

この作家の決意は、「いとなみ」のなかに良く生かされてゐる。ここに描かれてゐる農民は、勘次のやうに閉塞され遮断された無理強ひな孤立的世界に生きてゐるのではなくて、草深い茨城縣の僻地にありながら、生活の根本から、昭和の、しかも戦争切迫せる時代の中に生きてゐる農民である。彼等の生活は、その地方の自然的條件や、それに基づく農村社會機構の郷土的特色に深く彩られ乍ら、同時に、全國民生活につながる普遍的な生活法則に強く支配されてゐる姿に於て把へられてゐる。その限りに於て、この「いとなみ」は「土」よりも遙かに眞實な

郷土性の把握に近づいてゐるのだと言はねばならない。

けれども、それでゐながら、この作品に於ける地方語の使用は、郷土性の特殊面を誤つて誇張してゐることによつて、却つて眞の郷土性から遠ざかつてゐるのではないかと思はれる。たとへば「近在では一升まけ、二升まけとまけ、勘定で田圃を數へ、まけは凡そ三畝三步の見當に當つて、その數量から小作料も割り出されてゐた。改めて人々はその習慣をもう一度吟味しようとはせず、竹藪がすり出ようが、昔神様が祭つてあつた場所だといつて田圃の眞中のぼやぼやの空地をひつくるめて四升まけ五升まけにも一向平氣なものであつた」といふ地の文章にとり上げられたまけといふ言葉は、甚だ地方的特殊性をもつた言葉であるが、このやうな言葉が、その意味する眞の内容の具體的性質の描寫なしに説明文のなかに混在してゐるために、非常に明瞭な姿で「まけ」といふ意味を理解するといふ譯にはゆかないのである。つまりここでは、單なる「まけ」といふ言葉に依る郷土性ではなしに、「まけ」といふ言葉によつて表現されてゐるところの、小作條件そのものの郷土的特質の把握が問題だつたのである。單に地方語の提出によつて、農民生活の漠然たる雰圍氣を想像させるのではなく、その地方語に潜められてゐる生活の事相を、あらゆる讀者に理解され得る明確な映像によつて表現することが、より深く郷

土性に到る道であることを知るのである。

われわれは農村や郷土を、單なる農村の限られた舊い眼鏡で見ただけでは、決して眞の郷土性に到達し得ない。われわれは現代社會の、もつとも高い認識水準の精緻な深到なレンズによつて郷土を見る時にこそ、今まで郷土の人自身にも意識され得なかつた程、郷土の眞の姿を認識し得ることを知らねばならない。

(十六年五月)

## 眺望

——「耕す人々の群」について——

私は、深い感動を以て新人青木洪氏の長篇處女作「耕す人々の群」を読み終つたところである。この半島作家の出現は、さきに李光珠氏を知りまた金史良氏を読んだ時よりも遙かに強く私を撃つた。李光珠氏の「愛」は半島に於ける知識層の或る側面を描いたものとして、私には一脈の否定とともに強く記憶に残るものを持つてゐると思はれた。金史良氏の出現は、半島出身作家の活動に、一つの方向を與へた。それは内鮮融和の途上に於ける困難と苦痛と疑惑とを描くことによつて、それを超えようとする努力を導き出したのである。氏の主要な主題は凡そ二つの民族の融和統一に於ける内的眞實の追及に向けられてゐたと言つて差支へない。私はそのやうな作家的主題が今日にとつて極めて重要な本質的課題に沿つてゐるものであることを否

いのだ。その教養、その理性、その知識、その感情の動きに於て、完全に内地化され、云はば文化に於て融和統一されて了つてゐるのだ。

とは言へ我々はこのやうな知的地盤の共通性に強い感動を受けることを否定し得ない。それは現代文化の普遍性、その世界的な相互浸潤性の力強い證左を示すものだからである。我々は文化そのものの世界的普遍性の一面に即して、世界のあらゆる人間と人間、國民と國民との間に、理解と同胞感とを設け得る地盤を發見するからである。今日まで、半島作家の諸作品はかかる文化の普遍性の上に立つことによつてのみその存在を築き上げて來たのだ。

しかし正にそのことが、彼等の作品から（一つの民衆としての）個性を喪失させてしまつたのだ。我々は半島の人々の、その眞に祕密な心の閃めきを知りたいのだ。それを知ることによつて我々は眞に彼等の内部を知ることができるのだ。そして、内部を知ることによつてのみ、眞に心からなる同胞となり得るのだ。我々は半島作家に半島人の眞實を語らんことを求める。しかるに彼等の語るところは、我々と同じ人間、同じ生活、同じ考へ方である。我々の不満はいまだ癒されはしなかつた。我々は半島に於ける民衆の生活、いはばその國民生活の眞の姿を知らんことを求めてゐるのだ。

定しない。金史良氏のごとき作家を登場せしめ得た日本文學の幸福は深いものだと考へる。

にもかかはらず私は金史良氏にさへも満たされぬあるものを感じる。氏に次いで最近紹介された「福德房」の作家李泰俊氏、またその特異な練り上げられた技巧の驅使によつて我々を注目させる「惠蓮物語」の作家宮原惣一氏等の文學も、我々を驚かすと同時に我々の不満をかき立てずには措かぬ。これらの半島作家達に對する私の不満はそもそもどこに根據するものであるのか。

それは彼等が半島の眞の現實を示してくれないからである。彼等の文學は内地における半島人の生活を語つてくれはするが、決してその故郷に於る彼等自身のもつとも内密な心の仄めきを示してはくれないからである。「愛」や「惠蓮物語」や「福德房」の主人公達はなるほど彼等の郷土たる半島に生活してゐる。にもかかはらず、彼等の生活は我々の生活とどこが異つてゐるであらうか。生活、風俗、習慣、制度、文物——その何處に彼等だけに特殊な全體的個性が描かれてゐるであらうか。生活のデテイルに於て生きてゐる、歴史的な思考と感情の型、微妙な、けれども明確な、彼等に特殊なその動き、實にそれらのものが一切隠されてしまつてゐるのだ。「愛」の主人公石荀玉も、「惠蓮物語」の李奎澤も、我々内地の人間と殆ど異つてはゐる

それが今はじめて青木洪氏の「耕す人々の群」で答へられてゐるのを私は發見する。ここに民衆の眞實がある。朝鮮の民衆、その現實がこれなのだ。その苦難に満ちた生活の内部に、いかばかり人間の光輝が輝いてゐることであらう。

私は斷言する。この作品こそ國民文學としての基本的條件を考へるために最上の典據となり得べき偉大な文學の第一歩である。それは第一にその國土に密着した國民生活の廣汎な且つ具體的な把握の上に立つてゐるからである。それは何よりも一つの國土の特殊性と、そこに築かれてゐる生活形態そのものの特殊性の基礎の上に立つてゐる。我々は朝鮮北部のある地方の土地と自然と風物の諸條件が全く具體的に、形象的に、まざまざと手に取るごとくプラスチックに描かれてゐるのを見る。

それは單に土地と自然ばかりではない。その土地に結びついてゐる民衆生活の複雑な構造とその構成分子のあらゆるものを、その特殊性に於て包括してゐるといふ意味で國民的であるのだ。主人公用民が八年間作男として働いた農主の家庭をとつただけでも、我々は半島に於ける地主的家族制度に關して、百の報文より精確な認識を持つことができる。家屋の構造、それと結びついた生活様式、その様式に包まれてゐる歴史の意味、その具體的事實の豐溢さは我々を

壓倒する。農主、その祖母、その正妻、その妾、その作男、それぞれの位置と關係の正確さ、その毎日の生活の進行、それらすべては人間關係において生きてゐる。作男の生活、八年間で二百二十圓を貰つて自分も満足しなければならぬその外的條件も理解できるのだ。

單に農主の家族の内的構造が描かれてゐるばかりではない。そこにはまた、自由なからだになつて歸つた故郷の村における貧農としての用民自身の家族、その生活のデテイルの適確な把握がある。行商人の母親、盲目の妹、健氣ですばしこい働き手の弟、それらが營む貧しい生活の困難、それは全く言ひ表はしがたい苦惱に充ちてゐながら、しかも作家の透徹せる眼光は眞實を語つて些かの陰翳をとどめぬのである。否、貧農としての彼用民の家族の生活の具體性はかりではない。それを取りかこむ一部落、没落しつつある中農、庄屋、區長、村奴、それらは一つの村落共同體として、生きた人間相互の有機的關係のなかに把へられてゐる。

各々の家族、各々の人間が、歴史と個性をもちながら一つの社會を構成し、葛藤し矛盾しつつ其處に生きてゐる。否、一村落の組織と構造が人間とその營みを通じて描かれてゐるばかりではない。その地方に於ける多くの村落そのものの發生と生長と結びついた一つの社會的制約、即ち兩班、それに隸屬する賤民ジェニ、それらの身分的制約が産業の發展に伴ふ雜種階級

の發生によつて漸次浸蝕され崩壊されるプロセス、それら一切の歴史的生活的諸條件が、實に具體的に且つ明瞭な形象に於て描き上げられてゐるのだ。

即ち我々は、これによつて一つの地方の自然と風物を知るのみならず、それと結合した生活體を、その歴史と内的構造と、その現實的進行の様相と本質において認識することができるのだ。我々はこれによつて半島に於ける一部知識人の生活の内容を知るのではなく、實にその全體的な生活層の眞實を知り得るのだ。それは全民衆の生活をその複雑性とその歴史的特殊性に於て包括した。その内部に生きつつある人間の思考感情氣分意識は全く個性的であり民衆的である。しかもそれが個性的民衆的特殊性に輝けば輝くほど、それは我々に理解し易い同胞感を呼び覺すことによつて一つの普遍性に到達してゐるのだ。これこそが國民文學の諸條件の實現でなくて何であらうか。

さらにこの作品は我々に一つの問題を提示する。それは言葉の問題である。ここに用ゐられた言葉そのものは、いまだ完全に咀嚼された日本語とは言へないにしても、少くともそれが日本語であることが、その内容の半島的現實の描寫をいささかも妨げないといふことである。我は國民文學の概念において、言葉の問題を第一條件とする考へ方を改めて反省しなければならぬのだ。

私は新人青木洪氏の「耕す人々の群」を基礎としつつ、國民文學の本質的諸條件がいかなるものでなければならぬかについて、若干の端緒を提示し得たと考へる。それは何よりも第一に國民生活の全階層を包括しなければならぬ。第二にそれは國民諸層が歴史的生活的特殊性に於て包括されてゐなければならぬ。第三にその包括は歴史に沿ひつつ今日における生活の進行方向を呈示しなければならぬ。第四にそこに生活しつつある人間はこれらの諸條件の具體的統一者として生きた形象でなければならぬ。——要するに、一時代の國民生活の全體的構造とその進行の把握こそが、眞の國民文學建設の本質的基礎條件であらねばならぬといふことだ。

(十六年九月)

## 批評の古典

——「ベリンスキー選集」について——

一年ばかり前に、私は、ロシア古典文學の研究が新しい領域を切りひらかうとしてゐる、といふことをのべた。私の不満は、從來のロシア文學者達が、プーシキンやゴーゴリやツルゲネフやドストイェフスキーやトルストイやチエホフを語つてくれはするが、それ以外のロシア古典については殆んど語るところもなく、語つたとしても極めて誤つた形でしか傳へてくれないところにあつた。たとへば私たちはレールモンツフについて知ることを望んでゐる。しかるにわが國のロシア文學者達は、彼の業績をどんな形で傳へてくれたか。有名な批評家でさへ、レールモンツフには「悪魔」の詩以外には澤山ないと言つてゐる。しかし、レールモンツフには「悪魔」以外に澤山の詩がある。詩だけでも分厚い二冊をなしてゐる位だ。彼の天才に

ついでには、もつともつと説明されることが必要ではないだらうか。すくなくとも私には、彼のペチョーリンを解くのが重要であると同様に、彼のマキシム・マキシムヴィチを解くことも必要であらうと思はれる。

また私たちにゴゴリが面白いのだ。ゴゴリについて、彼の作品の本質について、知りたいと思ふのだ。ノズドリヨフやチコフは、いつたいロシア舊社會の何であつたのか。タラス・ブーリバは單なるお伽噺ではなく、ロシア歴史小説の一つの段階を劃してゐるにちがひない。凡そこれらについて知りたいし又考へて見たいのだ。そして、それについて書かれた本を探してみる。すると私たちは、所謂ロシア文學者ではない一人の人即ち宇野浩二氏の「ゴゴリ」を發見する。これは又何といふ興味ある光景であらうか。

更に私たちは、ドストイェフスキーについても同様に、彼の文學の眞の姿を知りたいと思ふ。それについて我國のロシア文學者の研究を知りたいと思ふ。そして、そこで私たちの發見したものは、所謂ロシア文學者では決してないところの、小林秀雄氏の「ドストイェフスキーの生活」であつた。これまたはなほだ興味深い風景ではないだらうか。

要するにこれらの風景は、わが國に於けるロシア文學研究の未熟性、その全く毒された商業

的翻譯性を物語つてゐる。もつとも、この種の商業的翻譯性については、單にロシア文學の領域に限られはしない。フランス文學や英米文學についても、今こそ私達は、もつとも批判的に即ちもつとも文學的に読みとらねばならない時に當つてゐるにも不拘、もつとも無批判的に、もつとも商業的に翻譯されつつある現實を見せつけられてゐる。私たちは、今日單なる翻譯ではなく、その原典そのものの批判にまで突き進まねばならない時期にまで來てゐるのだ。

しかし、このやうな商業性については、從來のロシア文學研究は特に甚だしく悩まされて來てゐる。從來のロシア文學者のもつとも不十分な缺陷は、ロシア文學をその全體性に於て研究しなかつたこと、又それをロシア文學の歴史に沿つて研究し得るところまで來てゐなかつたところにあらう。すくなくともプーシキン以後のロシア文學に於て、もつとも重要な且つ本質的な文學的活動を爲し來つた文學批評の諸權威、即ちベリンスキーやドロリユーボフ、チエルヌイシエフスキー、ピーサレフ、ミハイロフスキー等の文學評論に於ける活動を見落しては、ロシア文學のあのやうな深さや獨特さが、如何にして可能となり得たかを理解することはできなかつたであらう。何故ならば、ロシア文學の最大の特徴の一つは、評論と創作の相互影響の強さと深さにあるのだから。ロシアの月刊雑誌の眞髓はその藝術批評家であつた。批評家の論

文は、同一雑誌に掲載される人氣作家の小説よりも大事件であつた。有力評論雑誌の批評家は大部分の若い世代の知的指導者であつた。そこで過去半世紀を通じてロシアには相次いで藝術批評家が出現し、小説家やその他の著作家よりも、はるかに大きな、はるかに廣汎な影響を當時の知識階級に及ぼしたのであつた」とロシア文學講義のなかでクロボトキンは説いてゐる。

して見ればロシア文學の最大の特徴は、その創作の發展と相結んで、その最初の國民文學的登場から、文藝評論家をもつとも力強く根深く成長して來つたといふことにあるであらう。プーシキンの出現はロシア讀書界を驚喜させたと言はれる。彼の天才が、はじめてロシア文學をロモノソフやカラムズインの啓蒙的な運動に於ける西歐の模倣から切離し、文學をロシアの土地に密着させ、ロシアの國民のものにしたことを、讀者大層は、漠然たる、けれども否定しがたい「民衆の智慧」によつて知つてゐたからだ。その時、民衆がまだ漠然としか評價し得なかつたプーシキンの天才を、他の何人よりも深く精確に認識し得たのはベリンスキーであつた。ベリンスキーによつてはじめて、プーシキンのロシア國民文學に於ける偉大な達成と、その高い水準とが認識され解明され得たのであつた。ベリンスキーはこのことを繰りかへし繰りかへしのべてゐる。



「カラムズインは究極的にロシア文學をロモノソフの影響から自由にしたが、しかしこのことからして、彼がロシア文學を修辭學から解放し、民族的なものにしたといふことにはならない。彼はこのことのために多くをなしたが、しかしこのことはなさなかつた。何故ならこのことまではまだ距離が遠かつたからである。最初の民族的なロシア詩人だつたのはプーシキンである。彼からしてロシア文學の新しい時代がはじまるのであつて……」

と「一八四六年のロシア文學觀」のなかで彼は書いてゐる。彼はこの思想をもつと精緻に包括的に展開するために「プーシキン論」を書いた。「プーシキン論」はロシア文藝批評史上の古典的記念碑的作品である。この批評家が、同時にまたゴーゴリの天才の眞の理解者であり得たことも當然であらう。彼の「ロシアの中篇小説とゴーゴリの中篇小説」は、ゴーゴリ研究家にとつて、今でも古典的な意味をもつてゐるゴーゴリ論であると言つていい。彼はいろいろな論文のなかで繰りかへしゴーゴリに就いて語つてゐる。

「——プーシキンの側に多數者がついた如く、ゴーゴリの側についたのは多數者であつた。多數者は最初は斷然とゴーゴリに反對したのであつた。そしてそれは極めて自然である。といふのは、ゴーゴリの詩の世界は極めて獨創的、獨自的であり、大なる程度に於て彼の才能のみに

屬してゐたので、偏愛によつて曇らせられず、美學的感覺を失つてゐない人人の間にさへも、ゴーゴリをどう考へてよいかわからないやうな人があつたからである。そして彼等はロシア詩人のうち最も國民的な、そして或は最も偉大であるかも知れないこの詩人の作品と半分だけ和解したのである」

「一般にわが文學はプーシキン及びゴーゴリに於てその發達の最も困難な、そして最も光輝ある過程を経た。彼等のお蔭で、わが文學はまだその成年に達しないにしても、既に子供時代及び子供時代に隣接する青年時代の状態を脱した。この事情がわが文學に於ける新しい才能者出現の運命を全く變化せしめた。今では各各の新しい才能者は直ちにその價值通りに評價される。レールモントフが現はれた。——そして最初のいくつかの自己の試みによつて凡ての人人をして何か偉大なものに對する感動的な期待を以つて彼の才能を眺めしめた」

ペリンスキーの「現代の英雄論」や「エム・レールモントフの詩」はレールモントフのロシア文學に於ける位置を確定したものだと言はれてゐる。私は、この論文のなかではじめて、マキシム・マキシムヴィチの性格の納得のゆく説明を讀んだと思ふ。

かくのごとく、プーシキン、ゴーゴリ、レールモントフの眞の認識者であり、彼等こそが國

民詩人であつたことを、「落ちついて酔はざる状態で」語ることでできた唯一の批評家であつたベリンスキー。彼を読み彼を知ることなしには、私達はロシア文學の偉大な天才群がいかなる點でつながり、いかなる點で獨立し、いかなる點で貢獻し得たかを、眞實には理解することができないと思ふ。そして、それが今日特に必要とされるのは、彼が生きてゐる時代の條件と私達の生きてゐる今日の條件とが、その内容に於て親近であることに限られてはならないのだ。もつとも深く教へられるところは、彼の國民文學論であらう。彼はいくたびも繰りかへしてブーシキンが國民詩人であると言つてゐる。そのブーシキン論のなかで「詩人にとつては國民的心理の謎を解くといふことは、低い階級や中間の階級やまた高い階級を描寫するに際して、その何れもの現實に忠實であり得るといふことを意味する。粗野な民衆生活のニュアンスならば犀利に把握し得るけれども、もつと教養ある生活の繊細複雑なニュアンスはもはや把握し得ない人、そのやうな人は決して偉大なる詩人となり得ないであらうし、況んや國民的詩人といふ高い稱呼に價し得るものとはなり得ないであらう。偉大なる國民的詩人といふからには、地主をも百姓をも、そのどちらをも、それぞれ自らの言葉をもつて語らしめることができなければならぬのである」とのべてゐる所は、實に示唆にとんでゐるものと思はれる。

かくの如く彼は國民文學について、その言葉のもつとも原始的な意味に於て、もつとも深く考へて來た批評家であつた。そのことは所謂スラブ派と西歐派の思想的葛藤に於ける彼の理論的立場に於て、もつとも良く表はれてゐるところである。彼は「一八四六年のロシア文學觀」のなかで「個性の人間といふイデーに對する關係と同じなのが、國民性の人類といふイデーに對する關係である。別言すれば國民性は人類の個性である。國民性がなければ人類は死せる論理的抽象、内容のない言葉、意味のない音響であるだらう」と言つてゐる。民族性を人類に關係して普遍性に於ける個別性の見地から把握してゐる點は、その理解の原始性は別のこととして、今日から見ても、その思考方法そのものは採つてもつて参考になし得るところをもつてゐる。そしてこのことが今日のわが國に於ける國民文學論にとつてもまたすくなく暗示を與へ得るのである。何故なら彼に於ける國民性とは、空虚な理論的抽象ではなく、國民としての生活形態、生活の意識と思考そのものであり、現代の自覺であり、生活の意味に關する思索に満たされた、もつとも、直接的な現實そのものを意味してゐるからである。

したがつて彼が、ブーシキンやゴーゴリを國民詩人と呼ぶのは、彼等がその時代の現實のもつとも廣汎な、もつとも本質的な表現者であつたからさう言ふのである。ブーシキンが念じて

ゐたのは、バイロンに似るといふことではなく自分自らであるといふことであつた。そして彼が出るまではいまだ何人にも觸れられることのなかつたところの、そして、彼のベンの下にあらんことを願つてゐたところの、そのやうな（ロシアの）現實に對して誠實であるといふことであつた。そしてそのことによつて彼の『オネーギン』はもつとも高い程度において獨自な、國民的ロシア的作品となり得たのであつた」と彼はその「オネーギン論」のなかでのべてゐる。

かくの如く彼は國民性を尋ねて、遂にロシアの生活そのものの現實にまで到達しないでは止まなかつた。彼の最大の關心は、つねに文學が、どの程度にまでロシア的現實の眞の表現者となり得たか、といふことにあつたといつていいであらう。そのやうな立場に於ては、決して文學の形式だけの批評に止まることはできなかつた。彼は何よりも文學の表現する國民生活の内容に注目し、文學のみならず、かかる國民生活の現實そのものに對する肉迫を不可缺のことと考へてゐたのだ。いふならば彼は、文學批評の中に人生と生活そのものに對する批判を織りこみ、批評をして、文學を含めてもつと廣汎な生活批評にまで高めることを、最初より批評の本領と信じてゐたのである。

ペリンスキー選集第一巻は、私達の久しい饑渴を充分に癒やしてくれる。私達は、この本のなかで、はじめて、プーシキン、ゴーゴリ、レールモントフ、ドストイエフスキー等の登場し活動し達成してゐた偉大なロシア古典文學の三十年——四十年代の息吹に、まつたく直接に觸れることができる。そして、創作と並び、且つそれと結びついて、ロシア古典文學批評がどのやうな理論的基礎をペリンスキーの活動に依て布置し得たかを知ることができる。その基本的態度が、リアリズムに置かれてゐたこと、その批評方法が、文學史と哲學とのもつとも高き意味に於ける結合であつたことを知り得られるだらう。ロシア古典文學研究が、全く新しい一歩を踏み出して來たことを、もつとも確實に感じることができにちがひない。

讀者は、選集に附録されてゐる除村氏の註のなかに、永い咀嚼と研鑽の奥深い含蓄を讀みとることができたらう。それは商業主義の墮落から、強く翻譯の本質を守らうとする、譯者の決意から出てゐるばかりでなく、ロシア古典文學の研究を、單なる印象主義から、脱せしめようとする、新しい科學的傾向から出てゐるものでもある。そして、この科學的、學問的な態度こそが、今後のロシア古典研究にとつて、もつとも必要な基本的性格であらねばならないことを讀者ははつきりと讀みとることができたらうと思ふ。

（十六年六月）

4  
文  
藝  
評  
論

## 女性群の映像

中山義秀氏の「美しき囃」は、最近に於けるリアリズムの新しき發展を示す作品と言はれてゐる。私には、後に指摘するやうな理由から、それが、果して眞のリアリズムに到達してゐるか否かが疑はしく思はれる。とは言へ、それは、最近書かれたものの中で、女性を對象とした、もつとも興味深い作品の一つであることは確かである。

現代の女性が、そもそもいかなる生活意識、いかなる思考のなかに自らを支へてゐるか、いかなる態度をもつて自己を築かうとしてゐるか、このことを知ることなしに、現代の眞實を認識することは、恐らく不可能と言へる。装はれざる現實の追及を使命とする文學が、現代女性の心理、性格、倫理の觀照や綜合や把握に、もつとも深い熱情を注がないではゐられぬのは當然である。

「美しき囀」の作家が、その執拗な文學的熱情を傾けて、現代のある女性の型を、徹底的に描き上げようと努力してゐることは、それ故充分注目し價することだと思はれる。この作家は、この作品のなかに於て、いかなる女性の相貌を映出しようと試みたのであるか。そこに描き出された女性の像は、現實に於ける女性群の本質を、どの程度正しく傳へてゐるのであらうか。また、いつたい、ここに映出されてゐる女性の生き方は、現實に於ける女性一般の生活感情や意志の立場から見て、いかに評價されねばならぬのか。——凡そこれらの問題を考へて見るとなくして、文學作品を讀むことは無益であらう。

「美しき囀」が、強い母親と、美しい娘の形象を通じて、現代女性のある側面に對する批判を行つたものであることは今更言ふまでもない。そこに登場する強い母親は、いはば物慾の權化である。彼女は、その前半生に於て、半ば戀愛、半ば打算から關係した醫學生に棄てられる。娘とともに世の荒浪に投げ出された彼女は、女手一人で看護婦會を設立し、奮闘努力、一かどの地位と収入とを得るやうになつたのである。そして今では「もう穩しく人妻を勤めてゐられるやうな柄の女では」なくなつてしまふ。そのやうな彼女は、家庭に於ては暴君となり「今は一家の采配をとり、看護婦會長として社會的に活躍してゐるといふ自信も加つて、彼女の我意

がつのり何事も自分の思ひ通り始末しなければをさまらなくなつた」のだ。しかし、一步家庭から出て社會的なことでは、彼女の打算からくる聰明さは、むしろ見事である。「彼女は敷島看護婦會あつての自分達の生活だといふことを、そしてその心得によつて萬事自身を處して行くことを誰よりも明瞭に承知して實行してゐた。だから乃武子は會の名をあげてその名譽を維持するためには、自分の心を欺き感情を殺すことも平氣だつた。」と作家は書いてゐる。讀者は、かかる女性を心のうちに描き出すのに、些ほど困難を感じはしないであらう。要するに、彼女は、女ひとりが獨立して生きてゆかねばならぬ逆境に於て、抵抗の中に築きあげられた獨自な性格の、畸形的發展の典型であつたのだ。いふならば、「女傑」と呼ばれる中老の女性の姿を、この作家は、一人の乃武子のなかに具象化しようと試みたのだ。

これに對して、その娘の彩子は、さながら傀儡である。彼女は、凡そ自己の獨自的な意志と行爲とを持ち得ない。作家は、それを母親の教育に歸せしめた。「封建的な父に育てられた乃武子は、時代の新しい教育を何等うけることがなかつたからして、娘の教育にはひどく古風な考へを抱いてゐた。彼女は自分の性格や缺點を考へて、彩子をできるだけ女らしく育てあげようと心がけた。」女らしく育てあげようとする母親の強い意志の下で、娘は「すつかり母の言ふ

ままになる蠟人形みたいな人間にできあがつた。彼女が最初にえた智慧といへば、何事も母の吩咐にしたがつて無邪氣に母に甘えてゐさへすれば、母はいつも機嫌がよく自分を可愛がつてくれるといふことだつた。彩子は母に許されなければ、たやすく人の愛に狎れもせず人に近づきもしなかつた。かうして母の教へと母の懐の世界以外については何も知らぬ、すべて母の力に頼りきつて母の命するままに動きその愛に甘えてゐさへすれば無事な、まったく獨りだちの思慮と力を缺いた、素直で純潔で涙もろく言語動作のひどく子供らしい、一口に言つて今の世にはめづらしい傀儡のやうに可憐な彩子の人柄が形づくられた。」と作家は書いてゐる。

このやうな物慾と打算と無智とにとざされた野性的に強烈な性格の母親の下で、ほとんどあり得ると思はれぬ無意志的なその娘が、同じく無氣力な輕薄才子である眞輔といふ醫學生と結婚する。しかしこの結婚は娘にも婿にも自發的獨立的人格間の交渉ではなくて、ひとへに娘の母親と婿の父親との打算に基づく結合であつたから破綻せざるを得なかつた。母と娘は生活の地盤を棄てて上京し、娘の父親であり母親の愛人であつた下枝博士、今では「東京の中心の一つである帝都ビルの三階に四室を占める程の診療所を盛大に開業してゐて、著名な女優や男優をはじめ名流婦人達の美容手術を行つてゐるほかに、諸新聞や各種の婦人雑誌への執筆また

はラジオの講演放送などで、斯界の權威者たる名聲をほしいままにしてゐる」著名な下枝博士を頼つて上京するが體よく突つばねられて了ふところでの小説はひとまづ終つてゐる。

これだけでも、この小説に設定された文學的テーマがいかなるものであるかは明瞭である。作家は一昔前の古いがしかし強烈な生活意慾に満ちた女性と、現在の美しいがしかし無性格的な若い女性とが、世の荒浪に抵抗しつつ遂にいかなる破滅に沈まねばならなかつたかを追及しようとした。母親がその物慾と打算の故に、その欲する最大の生活地盤を喪失しなければならなかつたこと、またその娘が、その無意志の故に、最愛の夫と離れなければならなかつたこと、この二人の運命の姿を凝視するものは、そこに作家が何を考へ何を言ひ表はさんと欲してゐるかを讀みとり得るのだ。いふならば、この作家は、現代女性の中に、眞の愛情ある知性と意志との缺落を見てとり、それが彼女達の不幸の最大原因であることを指摘しようとして試みたのだ。これをもつと深く考へ見れば、作家は、現代の女性が何故に眞實の愛情を持ち得なかつたか、何故に眞實の叡智にまで到達することができなかつたか、何故に斯くまでも積極的な意志を喪失しなければならなかつたかを、この母娘の險しき人生行路を辿ることによつて尋ね究めようとしてゐるのだ。いはば作家は、現代女性の不幸なる現實的運命を、この母娘の姿に假託し表

象してゐるのである。

かくして、この作品は確かに現代女性のある一面を、きはめて肉太な輪廓のなかに描出することに成功してゐると言へる。母親乃武子の姿は、今日に於けるある生活層の女性のもつとも鮮明な特殊的性格の具體化された形象として生きて居る。娘の無意志な傀儡性も、現代の若い世代のある一面として、確實な急所を突いてゐる。彼女達の破滅を通じて行つてゐる作家の女性批判も、徒らな外れ矢として地に落ちてはゐない。

しかしながら、ここに一つの疑問がある。いつたい「美しき囃」にあらはれてくるやうな性格は、果して眞實に現在の女性の全的本質を、内部的にとらへてゐるであらうか。あのやうにも無氣力な女性が、今日の若い女性の本體であらうか。またあのやうにも醜怪無耻な母親が、今日の活動的な母性の、眞の相貌であり得るであらうか。およそあのやうな母娘の關係が、現代生活のもつとも普遍的な母子の關係となり得てゐるであらうか。——答は明白だ。彩子のごとき女性は、今日の若い世代の眞の性格では決してあり得ない。また、世の母達は、決して乃武子の如く無耻、我執、貪慾、虚飾の巢窟ではない。

おそらく、今日の女性は、もはや彩子のごとき消極的受動性を、自らの自覺に於て一擲しよ

うとしてゐると言つていい。彼女達は、もつと強く獨自性をもち、その氣質には、深い知性への意欲がある。彼女達は、もつと責任をもち、もつと積極性を持たうとしてゐるのだ。

といふよりも、それは戦争といふ現實の重さそのものが、彼女達の生活を根本から揺り動かして、彼女達が、家庭に於てもまた職場に於ても、もつともつと確りした態度と意志とをもつて事に當ることを求めてゐるといふことなのだ。生活そのものが、全體として彼女達を覺醒させ、眠れる理性と才能とを呼び起してゐるのだ。現在のところ、いまだ女性の中に、そのやうな深い知性と強靱な意志と積極性ある實踐との統一を發見し得るのは極く稀であるかも知れぬ。とはいへ、生活の明日は、必ずやかかる人々の期待を満たし得る若き世代の系列を續いて進出させるにちがひない。その意味に於て、今日は女性の生活的自覺の成長發展にとつてもつとも重要な本質的轉機をなしてゐる、と言つても決して過言ではないであらう。

そしてこのことは、單にこれからの生活に進み出ようとする若い世代について言ひ得られるばかりではなく、既に生活を築いてゐる母達の世代についても同様に言ひ得られるところである。娘達がそれ程にも進歩し成長して行きつつある時、母達のみ徒らに無關心な冷淡の中に時代に取り殘されて行くことはあり得ない。事實のところ、今日の母達のなかには、おどろくば



かりの教養の高さ、もつとも聰明なる愛情の沈潜が見られることしばしばである。娘が成長すると同じく母達も亦成長しつつあるのである。

しからは現代文學は、かかる女性の本質的な傾向を認識することができないのであらうか。否である。確かに現代文學はかかる女性の本質的成長を認識せずにはゐられない。特に最近の小説のなかには、はつきりと一つの新しい女性の型が提出されてゐる。それはたとへば、丹羽文雄氏の「鬪魚」に於ける女主人笹子の性格を考へて見ても理解出来るであらう。石川達三氏の「母系家族」の葵といふ女主人公を見ても明白である。榊山潤氏の「春扇」に現はれてくる高子といふ女性についても同様だ。またこれは、内地の作家ではなく、半島文壇の指導的作家と言はれる李洸珠氏の長篇小説「愛」の女主人公石荀玉についても同様なことが言へるであらう。石坂洋次郎氏の「曉の合唱」に現はれてくる明子といふ女性を、これらの新しい女性グループに數へても決して誤謬ではないであらう。

これらの新しい型の女性は、それを創造した作家の個性が異るごとく、それぞれ、その境遇や性格や氣質や心情に、獨自な濃淡を浮べてゐることは言ふまでもない。彼女達の相貌が、相互にどのやうに異つてゐるかといふことは、ひいては、それを創造した作家についての作家論

的考察に發展せざるを得ないであらう。しかしそれはここでは問題となり得ない。したがつて、ここでは、これらの作家達によつて、研究され考察され表現されてゐる女性群の映像が、そもそもいかなる點に於て相互に共通し、そしてそのやうな共通性の背後に、いかなる生活の普遍的基礎原型が横たはつてゐるのであるかを、當面の批評的對象として考へてみなければならぬ。

それを一口に言へば、これら最近の文學作品に登場し來つた女性達は、あくまで強い意志と、するどい叡智と、逞しい情熱にみたされ、積極性を備へた、勤勞する若い世代であるといふことだ。たとへば「鬪魚」の女主人公笹子は「美しい囃」の彩子のやうに無氣力な生活意識の喪失者ではなかつた。彼女も、乃武子のやうに獨立した生活のなかに突き出される。父は繼母と結婚して神奈川在に引きこんでゐて、笹子やその弟清のことなど一向に構はないのである。彼女は何よりも日々を働いて食べなければならぬのだ。ところで彼女はタイプも打て速記もとれ事務も捌けるすぐれた才能である。その上、何よりもその性格が確かりしてゐて獨自の意志と判斷とを持つてゐるのだ。彼女には約婚の俊紀といふ青年がある。この俊紀は實にぐらぐらした男性で、誠實であらうとすればするだけ自己の立場を喪失し、他人の意志の間にあれ

これと動搖する。藝者と關係したり、笙子を斷念しようとしたり、奨められると又別の女性と見合ひをしたりする。このやうにぐらつく、意志強固さうでゐて實は動搖と矛盾に苦しみつづける男性の姿を追及することはもつとも重要な批評の仕事ではあるが、しかしここでは、このやうな男性を相手にして苦しまねばならぬ、笙子のごとき積極性と知性とを備へた女性の運命が問題だと思ふのである。

同じく、石川達三氏の「母系家族」に於ける葵も、すぐれた事務的な才能や、聰明な抑制や、溢れるやうな愛情にめぐまれながら、ひとりで生活を切り開くために勤勞しなければならぬ境遇に於て出發する。彼女の強く獨立しようとする生活の意欲は「鬪魚」の笙子と殆んど同じであると言つていい。「春扇」の高子が女子大學を出た最高の教養にめぐまれた女性でありながら、その家庭の没落のために、雜誌社に就職し、一かどのジャーナリストとして活動して行くその映像のなかには、笙子や葵の面影が重なり合つてゐる。更にも一つ、李沈珠氏の「愛」に於ける石荀玉は専門學校を卒業した英語教師であり乍ら病院の看護婦として勤勞しつつ、後には醫師試験にパスする程の才媛である。これらの、最近の小説中に登場し來つた女性達が、殆んど同一の積極的な知性と自覺に立つてゐることは、決して單なる偶然ではあり得ない。こ

のことに對する一つの解答は、おそらく彼女達が、家庭といふ基礎を喪失した地點に立たねばならなかつたといふところに見出されねばならぬ。彼女達は殆んど同じやうに、家庭といふものを喪失し、自分ひとりで世間の荒浪に對峙して行かねばならぬ立場に置かれてゐる。このことから、彼女達は愚かではあり得ない、消極的でも過せない、他力本願でもやつて行けないといふ自覺が生じたのだ。それが彼女達の内部に潜んでゐたあらゆる才能や能力を、云ひかへれば女性としての人間的可能性のすべてを一時に開花させるのである。

それにしても、このやうに家庭を喪失するといふ條件が、彼女達全部に共通して作用してゐるといふ事實は、そもそも何を物語つてゐるのか。おそらくそれは、女性全體の生活が、今日に於ては、その家庭的基礎を打ち碎かれてしまつてゐるといふこと、も早や家庭や母親の愛情の垣だけを以つてしては、彼女達にいかなる無爲もいかなる消極性をも許容し得なくなつて了つたといふこと、そのことを物語つてゐる以外の何ものでもないのである。更に今一步すすめて言へば、この戦争的現實そのものが、若い女性群の全般的な生産勤勞部面への進出を求めてゐるといふこと、缺乏する勤勞の人的資源を、家庭の中から解放し、それを全體的目的のために役立たせることを、もつとも緊急の課題としてゐること、かかる客觀的現實の動向そのもの

が、たとへどんなにか歪められた形に於てであるにせよ、とも角そこに反映されてゐるのである。

確かに戦争的現實は、女性群の生産部面に於ける進出をもつとも急激な速度をもつて押し進めてゐる。ある官廳統計によれば、戦前昭和十年六月の女性勤勞者總數一〇〇とすれば昭和十四年十二月には一二二・九の指數となり、生産部門の全勤勞者中三五%が女性によつて占められてゐるのだ。しかもこの増加は戦争資材生産にもつとも重要な重工業部門において特に著しい。機械工業では、昭和九年を一〇〇として、昭和十四年の増加率は男性三一・一に對して女性は四三・二の指數となつてゐる。従來男性でさへ特殊の智能と熟練を要するが如く見られて來た重要な職場、即ち旋盤、ターレット、フライス盤、研磨機などが、女性の織手によつて操られはじめたこともこれらの報告は忘れてゐないのである。更にこれらの職域に於ては、十六歳未満の女性が一五・四%、二十歳未満のものは實に四一%、二十五歳未満が二四%、二十五歳以上は僅かに一八%となり、壓倒的な數的優越を、もつとも若き女性の年齢が示してゐる事實を私は指摘しないではゐられない。

かくして、文學が、かかる現實への凝視を深めれば深めるほど、女性の勤勞場面への進出に

觸れずに済ませぬことは當然である。ある批評家が半ば嘲笑をこめて、最近の小説が勤勞する女性を捉へはじめたことを、單なる作家の時局適應の姿態だと看做したことは、私には到底首肯できぬところである。いふまでもなく、彼等の勤勞觀は幼稚である。だがしかし、彼等が若き女性の勤勞する側面に觸れたことは、それに觸れ得なかつた従來の世界觀を幾倍か超えたこととは確かである。

しかしここでまた問題が生れる。それは、このやうな新しい型の女性達が一樣に不幸な結末に突き落されてしまふといふことである。たとへば「鬪魚」の笙子は、あくまで積極的に自己の生活を建設しつつ婚約の俊紀に結びつかないでは已むまいとしてゐるにもかかはらず、遂に俊紀を失つて了ふ。「春扇」の高子も同様にしてその戀人に背かれる。石荀玉が、その夫許榮と離婚しなければならぬ運命も同様である。彼女達は、あのやうにも意志強く知性高いにもかかはらず、却つてこのやうな不幸に陥らねばならなかつたといふことは如何なる理由に基づくものであらうか。それは何も彼女達が聰明で積極的であつたからではない。さうではなく、それは、彼女達の相手となるべき男性が、あまりにも動搖しぐらつてゐるからであり、このやうな新しい性格の女性に相應すべき、新らしい性格や生活をもつた男性が、いまだ充分には

發展してゐないからである。これらの作家達は、いはばすぐれた女性像を透して、敗北しつつある男性の倫理を批判したのであつたのだ。

かやうにして、現代の女性を探索する作家達のなかには、二つの志向が発見されたのではなからうか。一つは中山義秀氏が「美しき囀」に於て試みたやうに、一定の生活層の女性を、そのもつとも時代遅れとなつた舊くさい面に沿つて映し出し、そのことによつて女性の中に潜む頑固な保守性、愚鈍な物慾、他力的な消極性に對するもつとも辛辣な批判を遂行する文學的方法である。それは、あくまで女性の骨髓にまで迫らずには已むまいとし、苛責なき冷酷さをもつて女性の缺陷をあげたてないではゐられないのだ。女性の中に深くこびりついてゐる、舊時代的生活意識の殘滓を、心の奥にまで探し當て、徹底的に指摘せずには措かぬ。多くの女性達が「美しき囀」のなかに、自己のもつとも醜惡なる一面、もつとも祕密なる弱點の暴露を認めないではゐられぬところに、この作品のすぐれた典型的價值が存在する。確かに「美しき囀」に描かれてゐるが如き、消極的な「蠟人形」は、現代女性の最も悲しむべき一面を形成する。彼女達が家をも生活をも情熱をも失つてしまふのは、かかる無教養な利己主義、狭くろしい正義感、道德の假面をかぶつた狡猾さ、愛を知らぬ媚態——要するに、女性の生活的文化的

未成熟に基因するところ決して尠しとしないのだ。かかる女性の否定的側面は、文學に於て一層理解し易い鮮明單純な形象のなかに統一され、ひとつの諷刺的戲畫としてするどく讀者の頭に訴へないではゐないであらう。

文學はかくして、ある時代の風俗のもつとも深刻な鑑となり、正にそのことによつてかかる風俗に對する容赦なき批判となり得るのだ。女性は「美しき囀」のなかに自己の缺點のもつとも誇張され擴大された一つの畫面を発見し、あるひは反省し、あるひは憤らずにはゐられない。反省するのは、彩子や乃武子の生き方考へ方が自己の内奥の片隅に残つてゐることへの省察を得たからである。憤るのは、現代の母や娘を、このやうな缺點にそつてのみ描き出すことに没頭し、女性のうちに芽生えつつある、新しい生活態度、素晴しき彼女達の可能性の、一切を捨象し無視してゐることへの抗議からである。

これに對して、現代女性の眞實を探索しようとする文學的努力の今一つの志向は、「鬪魚」や「母系家族」や「春扇」に於けるがごとき、女性のなかに成長しつつある積極性と眞實への熱情を、眞正面から追及し描寫しようとする態度である。それは、女性を、舊時代の生活環境から脱出させ、彼女達を直接社會の荒浪にぶつからせ、彼女達を、その努力奮闘の極限

にまでつき進める。更にそれは彼女達の内部に推移しつつある新しき可能性の展望を、思ひきり廣く文學形象のなかに擴大しつつ、彼女達の將來的な性格を描出しようとする。確かに、これらの文學に現はれ來つた積極的性格の形象は、現代女性の中に存在する、優れた側面の概括である。われわれは、かかる女性の諸能力の潑刺たる開花が、やがていつかは一層廣汎な全面的な文化の高さとなつて結實するであらうことを疑はない。

とは言へ、ここでもまた一つの疑問がわれわれをうづ。即ち、この優れた性格の提示は、只管それ自身に限定され、その限りに於てそれは完成されてはゐるけれども、まさにそれが完成された瞬間から、現實の女性の本質を遊離しはじめたのではないか、といふことだ。たとへば「鬮魚」の笙子などは、實に女性の可能性のあまりにも擴大された形象ではないだらうか。彼女は、速記、タイプ、編輯、事務總括の能力を一身に統一した、いはば女性中の萬能選手ではないのか。彼女は、二十歳そこそこで百二十圓の月收を得てゐるが、後には二百圓の月收ある輸出商のマネージャーにさへなつてゐる。もとより、かかる女性の存在を、私は否定するものではない。しかし、かかる女性が現實に於ける女性中のもつとも普遍性を缺いた異數な例外であることは確かである。實に多くの勤勞する女性群は、辛うじて五十圓程度の収入しか得ては

ゐないのだ。

私はある工場監督官の報文に載つてゐる次のやうな少女達の聲を忘れることができない。

「もつと物價高につれて昇給させて下さい。親をみなければならない責任上、生活にこまつてゐます。昇給することばかり祈つて居ます。」

「夜勤をしても収入をふやしたいと思ひます。」

「十年働いてゐても、新しい人と大して變らぬやうでは、あまり情けない。」

「入社して二三年の者と六七年の者とが餘り差別が無く安いので、年功がたてばたつたやうに上げていただきたい。」

「家の間代が高いので苦勞して居ります。」

「日給が安い上に貯蓄といふもので引かれ、取るところが少く生活にこまつてゐますから、もう少し何とかしてください。」

——私はこの工場監督官の報文から、かくまでも可憐な歎聲を、徒らに引用してゐる譯ではない。私が斷言できることは、これらの若き女性達の胸中の聲を、二百圓をとる笙子の聲では決して現はすことはできないといふことだ。笙子は、その二百圓の月收の故に俊紀の母から疑

はれ、つひに俊紀を失はねばならぬ。だが多くの勤勞女性はその三、四分の一の收入を得るに過ぎなくても、笙子と同じ不幸を運命としないと誰も言へはしない。要するに、丹羽文雄氏は、現代の女性のもつともすぐれた諸才能、それは現實にはばらばらに各個人へと分割され、分割されてゐるために殆んど才能とも看做され得ない諸能力を笙子の一身を以つて集約的に表現して見せてくれた譯なのだ。だがそのやうな集約の過程に於て、女性のなかに潜むあらゆる複雑な諸特徴、諸缺點の一切を捨て去り、ひたすら、彼女の美しく強く聰明な面のみを統一したために、笙子は、實に理想的な缺點の一つもない美しい性格になつてしまつたのだ。このやうな美しさは、理想として我々を惹きつけても、現實としてわれわれを感動させ、われわれを自覺めさせてくれるものではないであらう。これらの小説が、いはば一種の通俗小説にとどまるのは、かかる眞實性からの遊離のなかに見出されねばならぬのだ。

かくして、現代文學の一つの傾向は、女性をその醜い側面に於て統合し、他の一つは、それを、その美しい側面に於て集約しようとした。このことから、われわれの現代文學に對する批判と期待とは明白である。即ち現代文學は、女性の否定的側面のみを概括に止まるべきでもなく、またその積極的性格の形象化に自己を限定すべきでもない。それはかかる否定面と積極面との生きた統一、いはば、缺點に苦しみつつそれを克服しようとする意志に於て女性を把握しなければならぬ。いふならばそれは、女性の現實に對する苛責なき別袂批判と、女性の將來の可能に對する熱い期待との、もつとも緊密なる内的結合に於て、廣汎な普遍的基礎をもてる國民的女性像を描出することであらねばならぬのだ。

(十六年六月)

## 歴史文學の本質

小林秀雄氏の「歴史と文學」といふ講演の筆記は、最近讀んだ文章のなかで、最も興味深いものであつた。といつても、そこで興味深いといふことは、それがただちにそのまま、すぐれたものであるといふことではない。むしろそれは、この文章のなかに、現代知識人の一つの心的態度、頑固な獨斷主義の、もつとも光彩陸離たる開花が見られる、といふ意味で注目させられるといふことである。この獨斷主義は、現代文學の可成り多數のもの意識をとらへ、日々その枝をひろげ葉を茂らせてくる現状であるから、それだけ益々小林氏の批評活動に對する、詳細な追及と分析とが必要となつてくるといふ意味で、重要視されねばならない。またこの獨斷主義は、それ自身として一つの體系を持たうとつとめて居り、その努力は、特に歴史に向つて集中されてゐるために、まさにそのために、「歴史と文學」といふ風な文章が考へられ、書か

れてきたのであるから、この文章はいはば、獨斷主義の、歴史に對する、もつとも根本的な信條の羅列であるといふ意味でも、充分に省察し、觀照し、分析してみる價值があると思はれる。

小林秀雄氏は、この文章のなかで、第一に、合理主義的な從來の史觀を否定してゐられる。氏は次のやうに述べてゐる。

「歴史とは何か、といふことに就いて、いろいろ思案をめぐらす仕事は、通常歴史哲學といはれてゐるが、これは僕には一向不案内な職業で、歴史とは何か、といふ一見ささやかな質問に對し、現代がどんなに多種多様な史觀をもつて武装してゐるかを見て、感服の他はないのであります。併し、それはそれとしてさういふ事であつて、史觀にくはしい人が必ずしも歴史に精しいとは限らない、といふよりそんなうまい話は世間にはない、といつた方がいかも知れない」

「史觀はいよいよ精緻なものとなる。どんなに驚くべき歴史的事件も隈なく手入れの行きとどいた史觀の網目を破ることはできない。そんな心配はない。さういふことになると、史觀さへあれば本物の歴史はいらないと言つたことになるのである。どのやうな史觀であれ、本來史觀

といふものは實物の歴史に推參するための手段であり、道具である筈のものが、この手段や道具が精密になり萬能になると、手段や道具が常に歴史のやうな顔をし出す」

小林氏は、史觀、殊に合理的であらうとする一切の史觀が、精緻となり周到となればなるほど、實際の歴史そのものが去るものだと言はれる。私は、史觀といふものと歴史といふものが、氏の言ふが如く容易に分離し去るものだとは思はれない。氏は、史觀は歴史認識の手段であり道具であることを認めてゐる。私も、史觀は歴史認識の手段であり道具であることに同意する。しかしこの史觀は、歴史の外に立つもの、歴史そのものとは別個のもの、歴史と史觀とは無關係に離脱し、或ひは一者をもつて他に代へ得られるが如きものとは、どうしても考へられない。

史觀とは、歴史を認識しようとする形式、思惟の形式といつてもいいものであるから、そのやうな形式は、それによつて認識される歴史の不可分な表現であらう。即ち、いかなる歴史と雖も、一定の史觀を通じてでなしには把握されぬし、また逆に、いかなる史觀と雖も、歴史内容を離れては存在し得ないものであると言へるであらう。現に小林氏自身ですら、一方では合理的であらうとする一切の史觀を否定しながら、しかも、自らそこに氏獨得の史觀を提出され

てゐるのである。即ち、氏は言ふ。

「歴史とは、人類の巨大な恨みに外ならぬ。歴史を貫く筋金は、僕等の愛情の念といふものであつて、決して因果の鎖といふやうなものではないと思ひます。それは、例へば、子供に死なれた母親は、子供の死といふ歴史事實に對し、どういふ風な態度をとるか、を考へてみれば明らかかなこととせう。……母親にとつては、歴史事實とは、子供の死といふ出来事が、幾時、何處で、どういふ原因で、どんな條件の下に起つたかといふ、單にそれだけのものではあるまい。かけ代へのない命が、取返しがつかず失はれて了つたといふ感情がこれに伴はなければ、歴史事實は歴史事實としての意味を生じますまい。若しこの感情がなければ、子供の死といふ出来事の成り立ちが、どんなに精しく説明出来たところで、子供の面影が、今もなほ眼の前にチラつくといふわけには參るまい。」

即ち、氏にとつても、「母親の愛情」こそが歴史の筋金であり、歴史を具體的現實的なものとする前提条件である。氏にとつては、「母親の愛情」の眼鏡なしには、歴史は認識され得ないのだ。氏にとつては、かかる「母親の愛情」といふ眼鏡は、とり外すことのできない歴史認識の手段であり道具である。つまり、「母親の愛情」は、小林氏にとつては、のつびきならぬ史觀な



のである。小林氏は、かくて一切の合理的な史観を否定しながら、その代りに「母親の愛情」といふ立派な史観を提出された譯である。私は、この立派な史観と、それ以外の合理的であらうとする史観との、どちらがより眞實であるかをここで断定しないが、しかしすくなくとも、氏が史観一般を否定する態度は、自己矛盾を來してゐるといふことだけは否定出来ないところだと思ふ。氏の史観否定の態度が、このやうに獨斷的であることは、われわれをして、更に氏の提出した「母親の愛情」的史観そのものをさへも疑はしめずには置かないのみならず、氏の否定的態度は、先人の爲した一切の理性的活動の業績、一切の思索的努力の集積、一切の科學的認識水準へのたゆみなき獻身に對する冷笑から發したものがあると感じられる。われわれは、過去の文化的努力の歴史一切をこのやうに冷笑することが、果して、歴史に對する深い愛情から出たものであるかどうかを疑はざるを得ない。

われわれは、歴史そのものに、もつと深い愛情を持ちたいと思ふ。われわれは、われわれ自身、どのやうに高い認識水準に立ち得ようとも、そのことによつて、先人の達成を冷笑することはできない。いはんや、われわれの水準は、先人のそれには、及びもつかぬ低さでうごめてゐるのかもしれない。先人のひらいた人間生活發展の努力の集積の廣さに比べれば、われ

われの努力は、まことに砂の一粒にすぎないであらう。されば、砂の一粒をもつて大海を冷笑することは、われわれのよくなし得るところではないのである。

われわれは、かかる冷笑によつては、いかなる史観を否定することもできないと信じる。何故なら、如何なる史観と雖も、歴史そのものによつて生み出されないものはないからである。そして、歴史が、その内部にそれ自らを否定するものを生み出すことによつて前進するやうに、史観そのものも、かかる歴史の進行によつて、内的にも外的にも規定されつつ發展せざるを得ない。それ故、現實、それは歴史の集約的表現のだが、かかる現實そのものは、また、それにふさはしい史観を規定せざるを得ないのである。

かかる意味に於て、現實そのものは歴史認識の主體とならざるを得ない。現實のないところには史観がなく、史観がないところにはまた歴史がないからである。この逆もまた眞實と言へるであらう。即ち、歴史内容のないところにはいかなる史観も存在せず、いかなる史観も存在しないところに眞の現實認識はあり得ない、と。かくのごとく、歴史と現實とは、單なる過去と現在との因果關係的つながりではなくして、それ自身相互に否定しあひながら相互を肯定しあふ生きてきた世界なのである。

人間の歴史とは、かかる意味で、否定のモチーフと肯定のモチーフとの戦ひであり、現実とは、一面に於てあらゆる過去の内的集積であり、同時にそのやうな集積を否定して未來に轉化するものでもある。このやうな歴史に於ては、單なる過去だけの過去とはいかなるものでもあり、單なる現在だけの現在とはいかなるものであるかを問ふことは不可能である。何故なら、現在とは、その内部に未來を藏し、刻々としてそれを自己の媒介に於て過去に變形しつつあるところの、未來と過去の格闘の場面そのものであるからである。過去と現在と未來は、單なる時間的序列や因果關係の理解だけでとらへることはできないのである。

人間は、このやうな世界の主動者にしてまた同時に被動者なのである。そして、現実が歴史の集約的な表現であり、歴史がまた現実そのものによつて規定され表現されるといふところからして、文學が現實の奥底に浸透してゆかうとすればするほど、われわれは、不可避的に歴史につきあたらざるを得ない。むしろ、歴史と結びつかないところには、決して眞の現實は把握され得ないと言へるであらう。現實を、形象を通じて認識し把握しようとする文學の努力が、深く現實に向けられるほど、歴史そのものに對する熱意が湧き起つてくるのはむしろ當然である。又その逆に、歴史に對する情熱が、文學の中でいかに燃えさからうとも、それが單なる時

間的序列に於ける過去への執着に過ぎないものであるなら、それは現實からの逃避であるのみならず、また歴史そのものからの逃避でもあるのである。なぜなら、過去とか現在とかいふ時間的序列だけでは、歴史と現實との相互關係は認識出来ないものだからである。したがつて、文學は、人間形象を、かかる歴史と現實との相互關係のなかに於て認識するときに、もつとも深い眞實に到達するものであると言へるであらう。

ところで、ここで言ふ歴史と現實との相互關係は、決して過去と現在との相應（エント・シユプレツヒエン）ではない。高木卓氏は、この相應の理論を次のごとく説明される。

「歴史物は、過去から飛び出して現在にまで及ぶことが必要だと思ふ。場合によつては、未來にまで及び得るであらう。そのためには、過去の事象が、現在と何の縁もつながりもないものであつてはならず、たとひ事象そのものは過去のなかに孤立してゐても、事象の様相や要素は、現在の時代と何等かの關係をもつてゐなければならぬ。過去の現在への相應、ここに歴史小説の一つの大きな意義があると僕は思ふ。」

氏はここで、歴史とは過去であり、現實とは現在であるとしか考へてゐられない。かかる過去が、現在と何等かの關係を持つといふことは、それが單なる時間的序列に於て理解されてゐ

る限り、單なる因果關係の理解に墮してしまふにちがひない。ところが、歴史なるものは、さきへのべた通り、決して因果關係では理解し得ない。過去はいかにしても過去であつて再びかへすことはできない。それは歴史が否定構造の世界だからである。ひとたび歴史によつて否定され過去に追ひ込まれたものは、いかにしても現在のものにかへすことはできない。かかる過去を現在に相應させることは、それ自身不可能なことではなからうか。なぜなら、相應すべき現在はその本質に於て過去の否定のもとに現前しつつあるからである。かくて、高木氏の相應理論は、過去と現在とを單なる相應の點からのみ截斷することとなり、それは、現在に相似した場面のみを歴史のなかに求めるといふこととなる。ところで、相似なるものは、歴史に於ては決してあり得ない。歴史は、一あつて二なき瞬間の連續だからである。本質上相異なる兩時代の相似は、ただ現象形態に於てしか見出され得ないであらうからである。

さればわれわれは、過去と現在といふ風な時間的序列に於てだけで物を考へること自身から退かねばならぬ。歴史と現實との相互關係について考へることから初めなければならぬ。歴史と現實といふものの意味のなかに、時間的序列ではなく、人間生活の内容と意味とに依つて世界を理解するといふ考へ方が入つてゐるのである。それは恰もわれわれが、人間の生命

を、單なる過去と現在といふふうな時間的序列に於て考へずに、生命の眞の内容、その刻々たる死との戦ひに於ける生の意味を考へねばならぬのと同じ理由によつてである。

それ故、歴史と現實とのかかる相互關係のなかに於て、人間の生活を認識しようとする文學の努力は、先づ何よりもその人間を、特定の時代に於ける生活内容に従つて捉へねばならぬといふことになる。文學がとらへようとする人間が、たとへば今日の時代に生きてゐる人間である場合にも、また、先行する時代に於て生きた人間をとらへる場合にも、それは同じことである。即ち現代小説も歴史小説も、人間をその生活内容にしたがつてとらへねばならぬことは自明だ。その生活内容とは、その人間が置かれてゐる生活上の地位、その地位に基く思考形式、欲望、氣分、それら一切を、貫ぬく彼の「精神」的統一的存在、それらをその生活の諸條件との統一に於て描くことである。現代生活を描く場合も、これは同じことである。

歴史小説の、また従つて現代小説の課題は、その對象とする生活と精神の諸條件を、歴史の基礎に於て探求するといふことである。それ故、殊に歴史小説に於ては、そこでとらへようとする人間生活を、歴史によつて規定しつつとらへることではなければならない。ところで、生活内容は、生活それ自身の構造によつて支配されるものであるから、歴史小説は（また従つて現

代小説は、生活をその構造によつてとらへることである。歴史上に登場する人物は、一體いかなる生活をしてゐたか。いかなる生活資材を、いかなる諸制度によつて、いかにして得てゐたのであるか。それらの生活構造に於て、いかなる思考、気分、欲望、その統一物としての彼の「精神」によつて支配されざるを得なかつたか。それらの生活構造はいかにして造り上げられたか。それはいかにして後代に否定されざるを得なかつたか——凡そこれらのことを探求することなしにはいかなる歴史小説もあり得ないのである。

かかる生活構造の探求といふ立場からすれば、史實とか外装とかが持つ意味も自ら明白であらう。史實や外装は、文學がそれによつて生活構造を探求する手段にすぎない。しかもそれは甚だ頼りがたい手段であり、しばしばその手段たる史實そのものを分析再編せねばならぬ場合も尠くない。殊に單なる年代記的な事實の記録は、ただそれだけとしては、文學の素材としては極めて不十分なものである。何故ならそれらの記録は、偶然性の記述に充されてゐる場合が多いからである。文學はその當時の生活構造の探求のために、その史實のなから必然的關聯をさぐり出し、そのことによつて、その時代の生活の本質的な内的法則を導き出さねばならぬのである。

複雑な豊富な史實の含む偶然性と必然性の絡まり合ひのなかから、當時の歴史的現實の、眞に本質的な内的法則を發見し導き出すために、それらの必然性と偶然性とを藝術的形象のなかに統一的に集中し具體化すること。このことは、その時代に於ける諸事件をその成果に於て見ることの出来る、後の時代の藝術家に與へられた偉大な可能性の一つである。前時代人にとつては進行形のものとしてその本質的な成果をいまだ認識し得なかつたものを、後代の眞の藝術家は、その過程、その結實そのものに即して全體的に認識することの可能性が與へられてゐる。現代の藝術家が歴史に對して持つ強味の一つは、かかる認識のより眞實への可能性に存する。彼はかかる認識の深さ（それは現實が與へてくれるものであるが）に立つて、歴史的人物が經驗したよりもより深く且つ適確に事物の進行を把握し得る。その把握に立つて、歴史的人物よりもより眞實に事物の本質を経験し通過するがとき形象やシチュエーションを造立することが可能となる。一定の歴史的現實を、藝術家の構想を媒介として、その當時の人々が認識してゐたよりもより鮮明な、それだけにより明瞭な形象のなかに典型化すること、ここに歴史小説の本質的な仕事が存在するのである。

しかしこの場合、歴史的現實を、より一層眞實な藝術的リアリテにまで高めるためには、そ

れを藝術的形象にまで構想するところの藝術家そのものの歴史認識が、歴史の眞實にあくまで即して行かうとする立場に立つことが極めて重要な本質的問題とならざるを得ないであらう。もしもかかる藝術家そのものの歴史認識が、歴史的眞實そのものに沿はうとするものでなくして、何等かの先入的な藝術家自身の思想や觀念に沿うて建てられたものであるならば、歴史は、作家自身の思想や觀念に従つて割り切られて了ふであらう。即ちそこには歴史的眞實は副次的なものとなり、何よりもその藝術家自身の思想的立場に従つてそれに相應するが如き歴史の偶然性や特殊性のみが形象化されることとなるであらう。かくのごとき場合に於ては、歴史は問題ではなく、作家の表現せんと欲する思想や意圖のみが問題となる。かかる思想や意圖の表現のために歴史の素材や歴史的史實を借用するが如きものは歴史小説ではなくして、一種の思想的寓意小説にすぎないであらう。

わが國の作家殊に芥川龍之介の作品のなかには、この種の寓意的譬喩小説は甚だ豊富である。それは決して歴史小説ではない。彼は、單に彼自身の心境や諷刺や批判を、過去の史實や扮装を借りて表現したものに過ぎない。彼はおそらく、そのやうな裝飾としての素材を、必ずしも歴史にもとめる必要はなかつたであらう。むしろ、現代そのものに求めた方が、より切實

に彼の機智や諷刺を表現し得たにちがひない。してみれば、彼の歴史物は、假面をかぶつた現代物にすぎない。

歴史小説は、かかる假面的現實であつてはならぬ。歴史小説は、何よりも生活構造とその推移發展の場面に於て、人間の意識やその全的な存在の意味をとらへるところのものでなければならぬ。人間の道徳的な倫理的なまた生理的な肉體的な存在の意味を、一定の生活構造の歴史的發展の諸條件に於てとらへることではなければならない。

そのやうな生活構造の歴史的な推移を把握するにあつて、作家が、個々の史實に於ける偶然性を、その構想に於て藝術的形象のなかに集中的に再構造すると言ふ意味での、詩的虚構はもとより必然的である。作家が、その時代の生活構造發展の本質的な諸相を、現代の高みから見て、より眞實に（即ちより詩的に眞實に）表現するためには、かかる詩的虚構は當然であり不可避であるからである。

たとへば、ゲーテは、そのエグモントを決して史實通りには描かなかつたと言はれてゐる。エグモント伯は史實によれば、既に老年期に達せんとする重い家族的紐帯に悩んだ人物だつたと言はれてゐる。ゲーテは、かかる史實のなから、あのやうに若々しい魅力ある青春の壮美

にあふれた人物をつくりあげた。ゲーテは、史實を無視したために歴史を誤つて表現したと言へるであらうか。勿論、ゲーテは正しかつたのだ。事實この問題は既に論じつくされた問題でさへあつて、彼は個々の史實には忠實でなかつたが、しかし、ニーデルランドの自由を求める動搖といふ大きな生活構造轉換の歴史的な意味は、エグモントを、あのやうな若々しく敢爲な人物にまで虚構し、それを民衆の一人としてのクレールヒエンとの結合のなかにとらへるといふことによつて、より多く歴史的な眞實性をその作品形象に與へ得たのである。

このやうな史的情勢の全體的特徴をとらへるために、作者にあたへられてゐる虚構性、それはゲーテによつて「不可缺なアナクロニズム」と呼ばれたものであるが、この虚構性は、いはば史的情勢の本質的な傳達にとつて、不可缺な、といふよりも必要な詩的要請なのであるから、史的情勢には何等の關聯もない作家の主觀的思想や趣味や感懐によつて史實を改變する際の虚構性とは本質的に異なるものである。かかる後者に於ける虚構は、寓意小説の虚構ではあつても、歴史小説のそれでは決してあり得ない。

ところで、最近のわが國文壇に登場してきた歴史文學の中には、この兩種の虚構のもつとも有害な混同が、日に日に顯著になつて來つつあるやうに思はれる。それは、理論的には高木卓

氏の相應的歴史文學論に導かれ、作品的には高木卓氏の一連の照應物や、殊に今回の芥川賞作品「平賀源内」のなかに、もつとも明瞭なすがたに於て露出されてゐる。ことわつておきたいと思ふのは、私はここで、この作品を書いた作家櫻田常久氏の才能や修練について云々してゐるのではないといふことである。私はこの新人に多くの期待を持つてゐる。その才能を疑つてゐる譯でもない。ただ「平賀源内」といふ作品にあらはれた一つの危険、その中に、現代文學に於ける歴史小説ジャンルの發展を阻害する一つの危険の、もつとも鮮明な頂點を見ないわけにはゆかないといふことである。

私はその危険を、この作家が行つたところのフィクションの非歴史性のなかに感じる。この作家は、平賀源内を偽死させることのなかに、その主題、即ち生産に根を置く人間性の再發見、安藤昌益先生の所謂「直耕」の生活實踐に對する文學的モチーフを設定してゐる。この偽死のモチーフ設定が問題だと思ふのである。この作家は、この小説のなかで、いはば平賀源内といふ過去の人間を借りて、それを通じて作家自身の感懐や思想を寄託し表現してゐるのだと思ふ。平賀源内は杉田玄白の友情によつて偽死事件を通じて再生した後、何よりも自ら勞働して食ふこと、そのことのなかに生命の眞の意義を見出した。

「『出家、侍、犬、畜生』といふ文句は、不耕食の徒をにくむため、おのづと生れた言葉でせうな。耕さないものは國の虱です。……ただ百姓だけが、直耕、直織、安食、無亂、無盜の、眞の自然の赤兒ですぞ」

この言葉は、源内の行動や思想の導きの糸となつてゐた、といふよりも、むしろ、作家自身の思想や行動の導きの糸となつてゐるのである。この言葉は、單に作家の實踐的態度を露呈してゐるばかりでなく、實に、現代の世相に對する多くのもつとも良心的なインテリ達の感懐でもあるのだ。このやうな現代的な感懐を、時代の制御を通りこして、つまり高木卓流に言へば、丹那トンネル的に直接に表現しないで、箱根を越える歴史的な道筋を借りて（即ち平賀源内といふ歴史的な形象を借りて）表現しようと思つたものであると思ふ。

このやうな作家の現實的態度の歴史形象による表現が、現在と過去との照應であり、この照應のなかに歴史小説の意義がある——と高木卓氏は考へてゐられるが、それは繰りかへしてのべた通り、決して歴史小説ではなくて、趣向小説的寓意小説である。「平賀源内」は、このやうな趣向小説なのである。その趣向や寓意が、僞死といふフィクションを必然的なものとならしめた。趣向や寓意が主なために、源内といふ歴史的な人物それ自身の生活と、その生活をと

かこむ生活の構造との間の歴史的な葛藤の意味が、眞實には追及され得なかつた。源内のなかに反映されてゐた人間能力のルネッサンス的開花の萌芽が、眞實には追及され得なかつた。私は、僞死といふモチーフが、寓意小説として成功してゐればゐるほど、この作品は、眞の歴史小説としては失敗してゐると思ふ。

これを歴史小説として生かすためには、僞死といふフィクションそのものを、改めて考へなほす必要があらうと思ふ。私は、僞死事件が史實か否かを知らない。もしも僞死によつて源内が生きのびたことが歴史的事實であつたとしても、文學としては、そのままそれを取り上げる必要はない、むしろ源内を、フィクションによつて死なしめる方が、より詩的に眞實であつたと信ずる。

即ち源内は、近世初期の鎖國的な枠の中で、その鎖國的抑壓を内部から破壊するために、人間の内部のあらゆる才能や能力が、切つてはなたれようと身をもがいてゐた一つの時代の、伸び出で、萌え上らうとする人間的努力の典型として把握され、かかる人間的努力が、その生活構造に矛盾し葛藤し、その衝突のなかに身を滅すといふところに、より大きな歴史的眞實性が見出されると思ふ。したがつてこのやうな歴史的眞實性に沿つてのみ、個々の史實の、その史

實以上に歴史過程にとつて眞實なものへの虚構が許されると思ふ。源内のなかに集約的に表現されてゐた近代的人間意識の萌芽は、この作家のごとく、否定すべきではなくて、もつと詩的に擴大すべきであつたと思ふ。源内の生活は、僞死の直前から追及さるべきではなくて、もつと詩的と大きな意味で、歴史的に遡つて追及され、源内の諸科學に對する熱情は、もつと正面から追及さるべきであつたのである。

そのときはじめて、源内の中に、源内を通じて、封建末期の社會的葛藤の眞實の歴史の意味が把握されたであらう。もしも源内を、かかる葛藤の中に、死なねばならぬものとして描かれたとしたら、その運命は、遙かに深い感動のなかに、人間に於ける歴史の軋みの音を、われわれの耳のなかで大きくごとくに直接に感ぜしめ得たであらう。そのときはじめて「平賀源内」は、眞の歴史小説の諸條件をみたすことができたであらうと信じる。

(十六年四月)

## 抒情と寓意

世界はこの數年の中に數世紀の歴史を繰りひろげた。歴史はこの數ヶ月の間に數世代の變革を壓縮した。世界文化の中心的星座から巴里が失墜したのは、まだすべての人人の記憶に鮮かである。ユーゴースラビアの敗亡。ギリシヤの降伏。近東諸國の動搖。われわれの眼前に展開されつつあるのは、歴史そのものの進行の姿であらうか。否、それはわれわれの眼前に於てではなく、われわれ自身を含めて、歴史そのものの、息もつかせぬ急轉換であり、激烈な叙事詩的運命の世界史的な到達である。

かかる現實そのものの歴史的變革の激しいテンポが、何よりも、考へる頭腦を歴史へ向けて惹きつける。現代ほど歴史が生活的な力を帯びて來た時はないのである。人は、現實を歴史との生きたつながりに於て認知しようとする。あるひは、歴史を現實の深みに於て發掘しようとする。



意欲する。歴史は人類のつきぬ怨みである、とある批評家はのべた。また「歴史は傳統である」とある人はのべてゐる。歴史が怨みであり、歴史が傳統であるか否かはここでは問題ではないが、彼等がひとしく歴史そのものについて考へてゐることだけは問題である。なぜならば、彼等がかくも歴史を考へねばならないことは、逆に言つて、歴史が何よりも強く彼等を捉へてゐることの證明であるのだから。そしてまた、そのことなかに、現代文學に於ける歴史への關心と、それに結びついた歴史小説の新しい登場との、一般的心理的地盤が発見されねばならないから。

確かに、現代文學に於ける歴史小説の新しい擡頭は、その出發に於て、かかる現實そのものの歴史的進行を、藝術形式の上に反映したものである。それは何よりも、歴史を現實の流れに於て認識しようとする、一般的心理的基礎の上に立つてゐた。所謂系譜小説が、東洋に於ける歴史的事件のものとも激しい進行の最中に、即ちこの一、二年の間に、その独自の文學様式にまで近づかうとしたことなかに、この事情の片影をみとめ得るであらう。廣津和郎の「巷の歴史」や宇野浩二の「器用貧乏」や丹羽文雄の「人生案内」「或る女の半生」や野口富士男の「風の系譜」などの作品が、何よりも現實を歴史に沿つて探求し捕捉し、それによつ

て、いはば現代の風俗史に近づかうとしたところに、彼等の文學的意圖を汲みとらねばならぬことは、既に論じられたところである。

ところで、彼等は、彼等の意圖した現代史を描きあげることが出来たであらうか。この複雑多様な現代史を、せめて個々の人間の、世間の荒浪に於ける遍歴を通じてでも、生きてゐるものごとくわれわれにくりひろげて見せてくれたであらうか。もとより否である。彼等は、歴史の現象と現象とを無意味に連結した。その現象の底にひそむ、歴史の本質的な進行と、その進行のもとに生きつつある人間の抵抗と信従とを、はつきりと意識的に把握することは、遂に彼等のなし得るところではなかつた。彼等の描かうとした現代史の畫面は、どぎつい色彩によつて人を眩惑するけれども、その内部の空洞には寒々とした虚無が吹きながれてゐる。

その後につづく歴史小説の擡頭が、系譜小説のジャンルがなさうとした意圖と、その意圖を果し得なかつた齟齬とを、その極限に於て承けついで、といつてもさほど言ひすぎではないであらう。明かに、最近の歴史小説は、新しいいくつかの顯著な性格を帯びてきてゐる。しかもそれが、眞の歴史小説の發展にとつて、極めて危険な方向に傾かうとしてゐるのを否定できないであらう。

その危険の第一の様相は歴史の現代化である。第二はそれに必然的に相伴ふところの歴史の寓意化である。第三はこれらの何れにも達し得ざる歴史の抒情化である。およそこれらの傾向のすべては、多かれ少なかれ歴史の眞實から離れて、歴史の詩化、浪漫化に傾く態度を示すものである。それが歴史の眞實から遊離せんとすることから、必然的にそれはまた現實そのものからの逃避となる。しかも彼等の逃避は、その逃避そのものすらが、彼等の絶體絶命的立場を表現し得るほどの餘裕なきものではない。彼等は、歴史の浪漫化を、一定の距離ある積極性をもつて理論化してゐるのである。

歴史の浪漫的現代化は、凡そ次のごとき道をたどつてゐるやうに思はれる。それは第一に、歴史と現實との極めて素朴な機械的結合方法にもとづくものであつて、われわれは、ここで、高木卓氏の一連の歴史小説がその理論的基礎を探索し、それと結びついた創作活動が、同じ作家による「北方の星座」や「南海譚」や、また、芥川賞となつた「平賀源内」(櫻田常久氏)となつてゐること、しかもこれらの一連の歴史小説は、確かに一つの新しいジャンルを胎んでゐることを注意しない譯にはゆかないのだ。

高木卓氏はその歴史小説のなかで、「歴史物は過去から飛び出して現代にまで及ぶことが必

要だと思ふ。場合によつては未來にまで及び得るであらう。そのためには、過去の事象が、現代と何の縁りもつながりもないものであつてはならず、たとへば事象そのものは過去のなかに孤立してゐても、事象の様相や要素は、現代の時代と何等かの關係を持つてゐなければならぬ。過去の現在への相應、ここに歴史小説の一つの大きな意義がある。」とのべてゐる。この照應理論は「歴史は繰りかへす」といふ通俗的信仰と一脈通じてをり、歴史をその内的必然性と偶然性との結合によつて見ずに、只管偶然の羅列に於て見ようとする素朴な系譜小説の理解から、數歩を出ないばかりか、それは直ちに現實を歴史にとりかへ、歴史を現實にとりかへる。

たとへば、その創作「北方の星座」で、作家は、蝦夷あるひは浮囚とも呼ばれた邊境の民族が反亂と歸順とをくりかへしながら、遂に民族としては解消してゆく過程を物語りながら、同時に、現在大陸に於てしばしば行はれつつある情景を、暗黙のうちに物語つてゐるのだ。また、佛印進駐に伴ふ南方發展の政策的課題が上程された時、この同じ作家が、このやうな現實に照應するものを、歴史の偶然的現象の類似性の中に求めた結果として、「南海譚」を創作したことは、まさしく當然であつた。彼によつて描かれた歴史は、過去に於ける眞の現實の描破ではあり得なかつたし、またそこにつながる今日の現實は、決して、歴史の今日に於ける頂點

ではない。それは、過去を現代によつて割り切るばかりでなく、現在をも過去で合理化しようとする。歴史小説の現代化は、かくして、歴史の本質に背くばかりか、むしろそれが歴史の本質を拒否するところに成立する。彼等はいはば歴史を叙事詩的に描くことをやめて、それを抒情化せざるを得ない。

たとへば、最近かかれた「女騎士」や「小野小町」や「南海譚」を貫ぬくものは、あくまで歴史の奥底に迫り、そこに否應のない眞實の人生と生活構造を探索し、そこに生きる人間の、その當時の歴史によつて生み出され規制された生活意識と精神を形象化するものではない。それは、歴史の進行に翻弄される運命や行爲のなかに、現代の立場からする熱い同情、深い反省、人間的親近さを發見しようとする。しかもその同感や省察や親和の感情は、歴史をして歴史たらしめる法則に向けられたものではなくして、歴史の豊富な偶然性のなかから選び出された、現代人の生活に類似し得るものの、その偶然性のなかに傾けられたものである。

歴史の抒情化は、單に高木卓氏の理論や實踐に止り得ない。櫻田常久氏の「平賀源内」が、平賀源内を語るがごとくして然らず、むしろそれは、科學の社會性を信じることに挫折し、何よりも農耕生活自體のなかに新しい生活を探求しようとする三十年代知識人の、内的苦惱や希

望を象徴したものであつたこと、言ひかへれば、現代人の思想を、徳川時代の一人物の姿を借りて表現したものであることについては、既に幾人かが論じてゐる。またたとへば、室生犀星氏がこの數ヶ月に書いた「王朝もの」をも見なければならぬ。一人の女を二人の男が愛し、互に愛を争つて遂ひに二人とも決闘に倒れ、女もその後を追ふといふ傳説的物語の、どこに、王朝時代の人間生活の特徴や精神の姿を認めることができるであらうか。われわれは、むしろはるかに強く、作家自身の抒情的觀念をくみとるのだ。

また更に、橋本英吉氏の「天平」を見落してはならぬ。そこでは、王朝時代に於ける農村が、いまだ原始的な氏族制度の中に生きてゐながら、同時に、大寶令による班田收授によつて、かかる原始共同體が破壊され、未曾有の奴婢の發生、やがて莊園の成立となり封建制度が始まらうとする以前の情勢が背景に描かれてゐる。それはおそらくこの數年間の經濟史研究にとつてもつとも興味ある研究對象となつてゐるものであり、この作家は、これらの經濟史研究の成果をたくみに採り入れてゐるとは言へる。然し、寺院經濟や上代經濟史の知識を殆んどそのままの形で羅列し、そこに人間の生活を打ち建て得るほどの骨肉感を、歴史のなかに咀嚼し得てゐるどころではない。奴隸化された主人公荒魚の運命を、かつて鷗外が「山椒大夫」に於て追及

したほどにも眞實に追及することができないで、海賊と官船との争鬪に於ける荒魚の犠牲的獻身のヒロイズムの中に浪漫化した。まことに人はかかる美しくも勇ましい物語のなかに「人生に對する壯大な夢と決意」や「この光榮の時代のモニュメンタル」や、雄々しい「慟哭」を讀みとることが出来るかも知れぬ。

だが、それらの咏嘆、讚美、抒情は、歴史の内的眞實に近づき得ない作家の嘆きであり、その限りわれわれから祖先の生活内容とその精神のあり方を遮るものである。それは眞の生活の傳承を遮斷し、過去でもなければ現代でもない、朦朧たる抽象的な觀念の複合物のなかにわれわれを突き落す。それは更に一步をすすめて、一定の假設的な主題への積極性にまで到達せずには止まないのだ。何故なら、歴史をその内的構造の眞實から探求することを止めはじめると否や、かかる扮装と傀儡をあやつる作家の思想、作品の主題そのものが問題とならずにはゐないからである。即ち、歴史小説は寓意小説のなかに變質せざるを得ないからである。

ところで、小説が作家の世界觀の表現であり、思想の具象化である限り、あらゆる小説は、多かれ少なかれ寓意とならざるを得ない。その意味で、寓意小説一般を否定することはできない。寓意小説も藝術の中にその存在權を保有してゐると言ふべきである。しからは、問題は、

寓意小説としての歴史小説に於ける作家の主題そのものが、現代社會に對する如何なる關係に於て設定されてゐるかといふことであらう。いひかへれば、寓意的歴史小説の寓意する思想如何がその作品の存在と價值とを規定する。現代文學に於ける寓意的歴史小説の主題はいかなるものであらうか。その主題は、いかなる點に於て、その時代そのものの歴史的課題につながつてゐるのであらうか。

芥川龍之介の文學史に於ける登場は、いふまでもなく、その處女作「羅生門」をはじめとし、「鼻」「地獄變」等をもつて、わが國の寓意小説に新しいジャンルを提出したところにあつた。そして、それが、森鷗外の寓意小説「最後の一句」「高瀬舟」を承けつぎ、更にそれをより純粹な形にまで高めたものであることは言ふまでもない。そして、「高瀬舟」の主題が、人間の欲望の無限性に對して、諦念によるその克服にあつたと同じく、芥川の「鼻」が、人間の無限の欲望は、それを満すことよりも、それを諦念する方がより多く幸福であり、自ら足ることを知るのが人間の最大幸福である、といふ思想にあつたことも明白である。

この二人の作家は、期せずしてその寓意的歴史小説の主題を同じくした。彼等はいづれも、人類の不幸は物質的條件の不平等に起因するといふ、大正初年の唯物論に對する批判をその小

説形象のなかに寓意したのである。しかも、芥川にとつて、かかる批判、かかる思想は、單なる頭腦に於ける思考だけに止まるものではなかつた。彼の寓意的歴史小説の主題の、ほとんど全部は、人間の物質的欲望に對する批判であつた。人生のための藝術の否定であつた。藝術のための藝術といふ思想であつた。これによつて彼は、益々擡頭しつつある勞働運動、マルクス主義の流れに對して、その最初から最後まで文學的活動の全部を賭して相争ひ、その争ひのなかに自己の生命そのものをすら、滅ぼして悔いなかつたのだ。彼の寓意小説が、單なるメルヘンを脱して何等かの價值をもつとすれば、それはひとへに、彼の主題に對する彼自身の人生的態度の不可分性にあつたのだ。文學的主题が、そのまま彼の人生上の全體的信念であり、態度であつて、彼の人生に於ける敗北は、逆に彼自身にとつて、彼の理想の人生に對する勝利であつたといふ點にあるのだ。

そして、現代の寓意的な歴史的小説ジャンルが、芥川に於ける主題と生活の直接的必然性をそのまま承けついではないといふところに、その寓意そのものの墮落が存在する。たとへば、石坂洋次郎氏の「小さな獨裁者」に於ける強力への讚美は、多分にヒットラー的獨裁者の現實に對する追隨的な適應に近い。暴力禮讚の主題は、この作家自身の人生觀にとつてどれほ

ど切實なものであつたのだらうか。そこに寓意されてゐる思想は、どれ程作家の内部から必然的に湧き出たものであらうか。それは實に思ひつき以外の何ものでもないのではなからうか。

「小さな獨裁者」が、寓意としてよりも、より多く浪漫的抒情に陥つてゐるのは、またここから理解されねばならぬ。現代の歴史小説の寓意的ジャンルは、芥川に於けるがごとく、生死を賭けた生活批判にまで到達し得てはゐないのだ。

それにしても、芥川が、その寓意的歴史小説ジャンルの、文學史的ともいはるべき廣汎な展開を示してゐた一時期に、森鷗外が、その一群の史傳小説をもつて、維新前夜に於ける一群の科學者たちの運命を、そのあらゆる市民的家族的紐帶に於ける社會的深みと、全日本の廣がり、その具體的デテイルとに沿つて追及し、それを追及しつつ、同時に、その追及方法自體をも絶えず追及してゆくといふ、歴史小説の眞に本格的な且つ稀有に獨立的な形式を創造しつつあつたことを想ひ及ばずにはゐられない。その現代化によつて歴史を抒情し、その寓意化によつて現代を批判せずに追隨しつつある今日の歴史小説は、これらの古典的作品から、いまだ多くのものを學びつくしてゐるとは思へない。

## 世代の登場

(1)

凡そ今日ほど歴史が實體として我々を支配してゐる時はないであらう。この數年來、我々の眼前に展開された事件は、恐らく今後數百年の生活にその痕跡を残すであらう。山西の山岳戦、南支の攻略、ギリシヤの降伏、クレータ島の攻撃、近東の動搖、——人は、いかなる時にもまして、現實が歴史であり歴史が現實であることを痛感せずにはゐられないであらう。

このやうな展望は、人々を驅つて、現實の歴史による認識、歴史の現實に因る探求への熱情を呼び醒さないではゐないのだ。そしてこのことが、一般に今日の歴史小説盛行の心理的基礎をなしてゐることは殆んど確實である。

作家達が歴史に歸らうとするのは、單なる現代からの逃避ではない。彼等は、現實を歴史の

連なりに於て認知し、生活を傳統の力に於て確めんとする、一般的には正しい決意のもとに歴史小説を考へてゐるのだ。讀書社會もまた、現實の根柢に歴史の地盤を見、歴史のなかに己が血を自覺しようとする。

たとへば、最近の歴史小説に一つの理論的體系を與へようとしてゐる高木卓氏が、歴史を現實との相應に於て把握せんとし、小林秀雄氏が、歴史を「人類の怨み」に於て理解せんとするのは、彼等がひとしく、歴史と現實との生きたつながりに於て人生に迫らうとするが故であつたのだ。しかしながら、彼等の理論そのものには、歴史を現代化するもの、あるひは逆に現實を過去の歴史化せんとする精神がひそんでゐる。そのことが、現在の歴史小説に、歴史の現代化による抒情と寓意の新性格を特徴づけないではゐなかつた。

たとへば高木卓氏の「小野小町」は、如何なる意味で歴史小説であらうか。「下ぶくれの美しいかほにふかい憂愁をたゞへて、牛車にゆられながら、小野小町よ、お前がさとに歸つていつたのは……」といふ書き出しの一句からして、それは歴史といふよりも咏嘆であり、眞實といふよりも抒情に近いのだ。

そこに描かれたものは、決して平安貴族の眞實の生活意識ではない。といふのが言ひすぎで

あるとしても、すくなくとも、それが、現代女性の虚しき誇りに對する、この作家の諷刺の詩化であつたと観るべきなのは確かであらう。

また橋本英吉氏の「天平」は、大寶令による班田收授の結果、氏族制の元始共同體が緩み、奴婢が増大し、やがてそれが莊園の成立を促すといふ、經濟史上もつとも興味ある一時期に材をとりながら、主人公たる荒魚の奴隸化してゆく運命を、かつて森鷗外が「山椒大夫」のなかで追及したほどにも追及することをなし得ず、海上に於ける官船と海賊船との戦ひに於ける犠牲的ヒロイズムの中に浪漫化し、それによつて、現在、大陸の岸邊に於ける兵士達の獻身を彷彿たらしめようと意圖してゐるのを見る。

さらに歴史の現代化は、歴史の眞實に對する肉迫から作家をひきもどし、我々の祖先の精神生活探求を、現代人の生活意識探求にすりかへる。かくて歴史小説は、歴史の衣を装ほへる現代人の表現とならざるを得ない。歴史は裝飾となり傀儡となる。それを動かし、作品を内部から支配するものは、歴史の主題ではなくして、作家そのものの主題であり思想である。ここに歴史の寓意小説のジャンルが発生する。ここで、石坂洋次郎氏の「小さな獨裁者」が、伊達政宗の歴史的事業と性格の追及であるよりも、より多く強力と決斷の讚美となり現代に於ける獨

裁者への空想的な信仰告白となつてゐることを見落してはならぬ。また橋本英吉氏の「寵兒の生涯」が、伊豆の長八に素材を借りながら、幕末から維新にかけての歴史的變革に於ける市民生活の本質的推移について、一切捨象し去り、ひたすら「技」と「道」との統一、あるひは藝術と倫理との統一といふ主題に沿つて性格を展開してゐるのを見忘れてはならぬ。これらの作品は明らかに歴史でなくて寓意である。

しかし、あらゆる作品が、作家の思想、作家の人生的立場の表現であるといふ意味からすれば、これらの作品が寓意であるからと言つて非難することはできないであらう。むしろそれがいかなる寓意であるか、その寓意が作家にとつて、いかにのつびきならぬ絶對的な自己主張であり、またそれがいかなる意味で現代そのものの歴史的課題に沿ひ得てゐるかが問題とされねばならぬのだ。

「小さな獨裁者」に於ける力の讚美は、この作家にとつて、どれほどぎりぎりの生活を懸け得たものであらうか。すくなくともこれらの寓意小説が、寓意小説ジャンルの偉大な先達であつた芥川龍之介に於ける（たとへそれが敗北に志向するものとは云へ）生活を賭けた思想的格闘とは、遙かに遠く人生から遊離し、あまりにも安全な地點に自己を甘やかしてゐることは確だ

と思はれる。

(2)

われわれは歴史の現代化に於ける抒情と寓意に強い不満を感じる。われわれは歴史をありのままの姿に於て知らんことを欲する。われわれの祖先がどのやうな生活と精神でゐたか、その時代の精神の本質を、現代人の觀念で解釋することなく、直接に蔽はれざる姿に於て認知せんことを求める。たとへ彼等がどのやうな暗黒を藏してゐようとも、それを白日に曝すことでわれわれは動揺しないであらう。むしろ、そこに己が精神の強弱を試みないではゐられぬのだ。

われわれは祖先の缺點と祖先の優越とを、言ひかへれば祖先のあるがままの本質的全體を、直接に且必然的な肉體の關係として、歴史のうちに確認し、その確認によつて、われわれ自身の本質そのものを認識しようとする。歴史小説はその現代化による抒情を止めて歴史の全的眞實への把握に赴かねばならぬ。またそれは現實の寓意形態による追及から、現實そのものの歴史的认识に移らねばならぬ。歴史小説が過去の時代に於ける現實の繪畫である如く、現代小説は現代史の描寫とならねばならぬのだ。

現代小説が歴史としての現代の描寫に移行する努力は、事實のところ既に所謂系譜小説のなかにも現れてゐると言へる。系譜小説については幾度か論じられた通り、ひたすらそれが偶然から偶然へ人間と事件を運び、現代史の内包する本質的な必然的普遍法則を排除してゐるところに、その藝術的成長性を拒まれてしまつたのだ。だがそれが、廣津和郎氏の「歴史と歴史との間」や「若い人達」のごとき風俗的作品となつて發展しつつあることは後にのべることにして、ここでは、現實の歴史的描述に向ふ文學の努力が、これらの風俗史とは別個に、一つの新しい形態、いはば一種の生産勤勞史とも言ふべき新しい小説ジャンルを創造しつつあることを指摘しなければならぬのだ。

たとへば徳永直氏の「二階借り」や「はたらく歴史」は、單なる體驗的な回顧ではない。それはこの數年來この作家によつて書かれたもつともすぐれた作品、即ち「最初の記憶」「他人の中」「長男」などにつながるものであつて、作家はこれらすべてを一貫して、一つの勤勞史を、それを通じて生産の發展史を、それを通じて現代の生活構造の歴史を描かうと意圖し念願してゐるのだ。「最初の記憶」の後書でこの作家は率直にも書いてゐる。

「私たちはもつと勞働について語らなければならぬ。勞働のもつ内容は、現在語られてゐる



多くの戀愛よりも、インテリゲンチヤのある種の悩みよりも、乃至は消費生活の絢爛さよりも、はるかに豊富で、人類を益するものである」と。

作家はこの確信をしつかと胸にたたんで、彼が通つて來た「勞働生活」の歴史を描かうとしてゐるのだ。

K市郊外の馬車挽の息子は明治四十三年の十二月、恰度十二歳の時K市の印刷工場の徒弟となつた。徒弟生活の苦痛、その勞苦のうちに萌してくる生活の智慧の確さ、彼をとりまく職工達の性格の複雑さ、幼稚な生産技術と、その技術や方法の地方性、これらすべてはヴィヴィツ下な表現のなかに具象化され、われわれは主人公の勞働生活の歴史を生き生きと感覺するばかりでなく、生産機構や技術や、そこから出てくる地方文化の傳統的色彩そのものまでも、手にとる如く、はつきりと理解できるのだ。

「私の勞働生活は、印刷工や、米屋の小僧や、煙草職工や、新聞記者、電氣職工や、三十一歳まで續いた」とこの作者は自ら書いてゐる。われわれは、この作家が二十年に渉る勤勞史に於て、現代の生活構造のうちでもつとも本質的な側面、もつとも廣汎な文化の基底を、つきつきに歴史的に追及してゆかうとする意圖と努力に、強い支持を捧げないではゐられぬのだ。

## (3)

だが、勤勞の場面を描くことに依つて現代史の最重要な側面に迫らうとする努力は、單に徳永氏に止まるものではない。われわれは上田廣氏の「歲月」と島木健作氏の「運命の人」がなし企てつつある文學的事業を見逃してはならないであらう。

上田廣氏の「歲月」は、「指導物語」や「扇の屋根」等に示された技術面に於ける人間探求の、より集約的な表現であり、最近の氏の作品中もつとも注目さるべきものである。

息子を山西戦線の鐵道爆破に喪つた草加といふ機關庫の技術者が、軌條探傷器の發明に苦心しつつ、その特異な性格の故に他をも自らも傷つけ苦しむ姿は、氏の刻明な照射のうちに浮び上つてくるが、しかしここでは「はたらく歴史」に於ける技術のごとく、技術自身が全體性に於て我々に傳へられない憾みがある。我々は、草加の性格ばかりでなく、その性格がその中に生き、傾けられてゐる發明の苦心の内容、また彼が働く機關庫の技術の作用する場面そのものを、もつと的確に傳へられることを望むのだ。つまり、勤勞の内容自體によつて、技術的創造の進行、それこそが一般的文化の進展基礎であるのだが、そのやうな創造事業の歴史を知りた

なのだ。

上田氏は、技術者の性格を、その技術的場面から遮断し捨象したところに追及しようとする。そこにこの作品が眞の現實となり得ない理由がかくされてゐる。そこに技術的創造に於ける歴史的全體性の不足が現れてゐる。「歲月」が單なる歲月となつて、技術生活史となり得ない不幸がそこにあるのではなからうか。

島木健作氏の「運命の人」も、それが東北農村に於ける冷害といふ自然的條件に對する農業技術の闘ひを素材とし、その中に生きる人間の、屈折に生きようとする悲痛な運命を描かうとする意圖に於て、現代史の一つの側面にせまつてゐるとは言へるであらう。しかし、この長篇は強い感動を與へはしないし、強い思想をもつて我々にせまつてくるものでもない。それがこの作家のアイデアリスチックな方法の所以だと説明することは容易である。

恐らくこの作品の缺陷は、農業技術の生きて働く場面や、かかる技術を取りまくこの農場の經濟的條件が人と人とのつながりの生き生きとした具體性に於て捉へられてゐないだけではない。即ち、それがリアリズムでないからだけではなく、むしろそれが熱情を缺いてゐること、燃えるがごとき理想の確信と、その憤ろしい破滅の中に作家の思想的燃焼がとかしこめられて

ゐないところにもあるのではないか。

あの單純な「生活の探求」の感動が、働くこと、勤勞し、農耕する描寫自體のなかに生れて來ること、そしてそれが、勞働のなかに生活を探求しなければならぬといふ、この作家の熱い確信と思想（それが眞實であるか否かは問題であるが）を物語つてゐる點から生じてくることを、沈靜せる、無氣力なこの長篇は、改めてはつきりと我々に告げてくれるのである。

それにしても、現代史の繪畫的表現は、かかる勤勞と技術の側面だけに限られるものではない。また、かかる現代に生てゐる人間の探求は、勤勞の場面だけで盡せるものでもない。生活は複雑であり、人間の存在する場面は無數である。我々は時代の本質的な基礎が、生産と勤勞の部面にあることを確信するけれども、それに到る道や方法が、單に勤勞の歴史的把握に限られてゐるとは信しない。

たしかに、現代史はいろいろな方法と道程にしたがつて成立し得るのだ。逆説的に言へば、時代の本質的推移を典型的に代表する生活關係と性格特徴とを、その成長と乗り超えにおいて「客觀化」するところに風俗小説が成立し、それを作家の熱烈な自我のなかに溶融し、いはばかかる客觀を「主觀化」するところに、眞の現代史の精神の描寫が成立する。このやうな現代

史の本質的表現を缺い、いかなる風俗史も、決して眞の生活認識とはなり得ない。したがつていかなる意味でも、そこに生活的自己革新の熱情が存在しないことは明らかである。

(4)

かくして、たとへば深田久彌氏の「才覺」や「ある親子」が、庶民生活の現代史的把握であるかの如く見えながら實はしからず、一種の風俗描寫にすぎないのは、そこに描かれた生活やそれを描かうとする態度そのものが、氏によつて、どれほどにも必然的な、抜きさしならぬ直接の精神的つながりに於て設定され造型されてゐないからである。

織田作之助氏の「雪の夜」が、八卦見に落魄した男の意地と悲しい虚勢を描くとき、我々はこの作家の烈しい自己否定を讀みとるだらうか。作家は自己とは何等かかほりのないところに一つの運命を設定し、その運命を追及することにどれほどの自己追及の苦惱をも感じはしなかつた。作家は、主人公に假設した逆境に甘い同情を與へたが、その逆境に激しい憤怒と嘲笑とを籠めはしなかつた。それは作家にとつて、自らを慰撫する「藝術」に外ならなかつたのだ。したがつてそれが一つの風俗畫を突き出ることが出来なかつたのは當然である。

これに比べて、太宰治氏の「千代女」には、すくなくともこの作家に切實な自己否定と自己肯定の苦痛がこめられてゐる。そこに客觀化された少女の生活は、作家にとつて無意味なものではあり得なかつた。作家はこれによつて、一つの風俗的傾向に對する憤ろしい抗議と激しい否定を試みてゐるのだ。

岡田三郎氏の「盛衰記」や「動物の世界」、それから淺見淵氏の「三等船客」が、自己をしつかと凝視しつゝ、これを社會に向つてつきつけ、そのつきつけた接觸點を通じて、時代の繊細な生活感情の動きや、生活機構の微妙な推移をつかみとり、そこに深い歴史の断面ともいふべき現實を發掘してゆく新しい私小説方法の發展であることについては、又別の機會で考へて見なければならぬ。

それにして廣津和郎氏が、かつて、市井の庶民生活に錯綜する人生に眼をとめて、「巷の歴史」を書いた時、彼は確に、彼のみに獨自な形で現代史を描いたのだ。その主人公の性格はどぎつく誇張され前後の統一は失はれてゐたにせよ、ともかくそこでは、明治社會の上昇期と、大正社會の澁結が強く庶民世界を支配してゐるのを見た。しかし、そこに描かれたものは人間の魂の發展であつたといふよりも、むしろ風俗習慣のなかに表現されるモラルの推移であつ

た。それはより多く風俗史であつたのだ。かかる風俗史への志向は、最近の氏の一聯の作品、「流るゝ時代」「歴史と歴史との間」を一貫し、更に今月の「若い人達」につながり、益々深い生活の脈絡をつきとめる。

とはいへ、この作家は「流るゝ時代」や「歴史と歴史との間」に於て「二つの時代の中間に生きて来た典型」あるひは藝術と生活の二律背反性に苦惱する性格破産者の肖像を、果して全的な生活認識に於て描寫し得てゐるか否かは疑はしい。殊にダンサーとの關係の場面や主人公の急死する場面は、今までいくつかの氏の作品に安易にくりかへされてゐるのを見た。主人公牛島五郎に表現されてゐる如き自由主義的性格が、その自然死のうちに「結末」してゐるのは何故であらうか。それが世紀末知識人の破産だとしたら、何といふ容易な破産であらう。我々にかかる性格が容易に終末しないことを信じる。それは、いはば、何ものかによつて乗り越えられながら、しかも今日執拗に生き残つて我々の意識をかきみだしてゐるのだ。さらに、かかる性格を乗り越えるものが、新進作家瀬川のごとき根のない性格に假設されてゐることも、主人公達をいよいよ時代の典型的なものから遠ざける。

作家は、そこではいまだ自由主義的・中間性の時代的性格を乗り越え得る、眞の新しい積極的

形象を發見することが出来なかつた。いはば牛島の生活を批判し得るが如き作家的立場に於て描くことができなかったのだ。作家はその性格を自己にかかはりのないところで客觀化した。したがつて、かかる性格はそれ自身として完結してゐると思はれた。作家がそこに「終末」を感じたのは當然であるが、まさにそのことが、この作品を眞實から遠ざける。なぜなら、それはかかる性格の空想的な完成であつて、それが他の新しい世代に抵抗する形に於ける、眞の終末では決してあり得なかつたから。世評がこれらの作品に反撥したのは、たしかに一半の理由があつたのだ。

## (5)

しかしながら、作家廣津氏は「若い人達」のなかで、確かに、叙上の作品では未だ把握し得なかつた一つの時代的性格の萌芽を、發見した。それは未だ一つの性格には達してゐないが、しかしその萌芽であることは確かである。

なぜならば「若い人達」の主人公堀川順三も、それと同棲するダンサーすず子も、また同じ下宿にゐる得體の知れぬ街の女も、夫々に時代の暗黒に喘ぎながら、生活し格闘し焦慮し懊惱

し、滅びによる自己抉剔を怖れないからである。殊に堀川順三は事變前の都會生活を濃密に彩つた頽廢に鈍重な嫌惡と憂鬱を以つて反撥し、其處から脱出しようとする一脈の意欲を喪失してはゐないのだ。彼はそれを己れの勤勞と技術に向つて注ぐ自らの愛情のなかに發見しようとした。彼はラジオの修繕を單なる糊口の技術とは考へられなくなつた。人間の愛情が技術を超えて新しい人生を啓示するものであることを自覺した。彼にとつては今や「音階ひとつ考へても、人生はそんなに狭く見切りをつけるものではない」と思はれだしたのだ。いはば彼は、仕事と技術への愛情のなかに、新しい生活を探求しようと試みてゐるのだ。――

これこそ、一時代の混亂に打ち碎かれた知識人の生活を、勤勞と技術そのものの中に再建しようとした、かの「生活の探求」に於ける駿介の時代の一般的性格につながるものではなかつたか。この一般的性格は、いはば「仕事」と「技術」の神聖化、「勤勞」の理想化の基礎の上に築かれたものである。だが、かかる「勤勞」と「技術」の神聖化こそ、現代の一つの特徴的側面であることは確かである。

かかる意味に於て「若い人達」に於ける堀川順三の性格は「流るゝ時代」の流行作家瀨川よりも、はるかに深く時代的傾向を反映せる新しき世代のものである。かかる新しき世代の登場

を、この作家は自己と無關係な地位に於て客觀化したものでは決してない。むしろ反對に、かかる客觀的存在を、作家にとつて、己が内心に全的に關聯する血肉的存在として主我化し得たところに、その「神經病時代」を超え、それに決定的な「終末」を興へる一步を踏み出した所以が存在する。すくなくともこの作品に於てはじめて、古い時代の殼を背負へる惱めるハムレットを、明敏の氣質的悲劇を、澁結期の典型的運命を、あくまで追及しないでは止まぬ此の作家が、自己の文學的宿命の扉を開いて、新しき世界へ踏み込まうとしたことは確かである。

主人公堀川順三が「意氣銷沈した、いら立たしい、希望のない氣持で生きてゐる間に、ほのかなながらも新しい興味、希望の萌芽といふやうなもの」を感じとつたことの中には、いふならばこの作家自身の新しき自己發見――風俗を超克する若き意欲の、作家自身に於ける心理的映像があつたのだ。

――だが、廣津氏は果して十全な意味で、來るべき時代の眞の告知者となり得たであらうか。葛藤する推移の眞の把握者、現代史の本質的畫面の構成者となり得たであらうか。おそらく、この作家にとつて一つの不幸があるとすれば、それは漸く今日となつて「若い人達」に於けるが如き「技術」と「勤勞」崇拜の時代的側面にふれなければならなかつたと言ふところに

〇君  
 僕は嘗つて、「踊り子を可愛がつたり、少女と一緒にあるアパートに同棲してみたり、そのやうな日常性のなかにモラルを探索すること云々」と書いたことがあります。僕はその文章のなかで、文學に於ける素材をどのやうな點に求めるかに従つて、その作者の人生に對した文學に對する態度が異なることを指摘しました。そして、踊り子的素材を選ぶといふことよりも「滿洲移民」の實情、殊に内地農民生活の實情との聯關に於てそれを素材に選ぶといふことが、はるかに時代に對し、またしたがつて文學に對して眞實であるとのべたつもりです。この考へ方については、僕は今日でも大して間違つてゐると思ひません。僕は今日でもなほ、素材の選擇、あるひは對象の選び方のなかには、作家の持つ生活態度なり、作家の置かれた客觀

## 形 象 に つ い て

あるだらう。またもしも、この作家にとつて一つの幸福があるとすれば、それも亦、今日に於て「若い人達」を書き得たといふところにあるのであらう。いづれにせよわれわれは、猶しはらく、「若い人達」に於ける「技術」と「勤勞」の理想がいかに成長して行くかを凝視しなければならぬ。

さて私は、以上をもつて今日の文學に一つの眺望を持ち得たか否かを自問する。私の觀照し得た風景は決して完璧なものではあり得なかつた。私自身のもつ内的規制は言ふまでもないとして、文學自體にも多くの盲點が散在する。私は優れた農民文學作品を渴望してゐる。だがこの飢渴は何處でも癒し得なかつた。歴史小説への翹望は滿されぬままに素朴な批判に終つた。現代のもつとも深き「風俗史家」を廣津和郎氏や丹羽文雄氏のなかに見なければならぬとすれば、それは批評家にとつて一つの悲哀であらう。だが、批評家にとつて今日最大の苦痛は、むしろ批評精神そのものの怠惰である。私は何より先きにこのことを斷言しておくべきだつたのだ。

(十六年五月)

的地位なりが、つよく支配してゐると考へてゐます。しかし、そのことについてはしばらく措きませう。

君は、僕が「花柳界やカフェの女性を描くことを非難した」といわれます。僕は描くことを非難したとは思ひませんが、現代文學に於けるそれらのものの描き方には強い非難を今日でも感じて居ります。しかし、それはともかくとして、君は、素材、あるひは對象の間に於ては、それ自身として優劣がない。どんな素材を選んでも、素材自體として優劣はない。優劣があるのは、「それはその作品の世界にあるのではなくて、その世界を追及する世界觀や方法にある」と信じてゐられることは大いに注意を惹きました。最近でもありませんが、丹羽文雄が、法律で許可されてゐる職場のなかでどれは書いていい、どれは書いてはいかん、といふことはない筈だ、といつたことがあります。なるほど作家の主觀ではどんな職場にある人間を写してもいい自由は與へられてゐると思ひはするでせう。しかし、現實には、その作家の置かれた地位や自分自らの世界に對する態度に制限されてゐるのが作家の運命であり、又法律そのものでさへもどんな職場を描いてもいいほどの自由を與へてゐると思はれません。客觀的に見たら、作家の自由なるものは實は作家の束縛の表現でさへあるからです。

作家がどんな人間を描いてもいいといふことがすぐに、どんな對象でもかまはぬ、どんな素材でもいいと言ふ譯にはゆかないでせう。また對象が無差別的に同一の價値を持つてゐるとも言へないでせう。君は、「對象それ自身には優劣がないやうな氣がするのです」といはれます。だが果してさうでせうか。もしも優劣といふことを、對象、即ち、作品に於て捕へられた生活場面そのものもつ現實的重要性の程度といふことに解すれば、明らかに、對象のなかには、それ自身のなかに優劣が存在すると言はなければならぬでせう。對象價値が同一であるとは、どうしても考へられません。どれもこれもみな構成部分になつてゐることは同一でせうが、しかし、その部分部分の全體に對する關係と機能はそれぞれ相異した位置と重要性を持つてゐます。ある生活關係は次の時代を導き出すために非常に重要な位置を占め、他の生活關係はそれほど重要でもありません。むしろ邪魔にさへなつてゐることがあります。歴史發展にとつて、本質的に重要なものと、偶然的な一時的現象にすぎない生活關係もあります。世界は歴史發展の立場から見ると、本質的なものと偶然的なもの、普遍的意義をもつたものとさうでないものの複雑な絡まり合ひのなかに動いてゐると思ひます。

してみれば、そのなかからどんな素材を選びとるか、といふことは、全く重要な問題ではな

いでせうか。どんな素材を選ばうと、「その対象そのものには優劣がない」といふことは、僕には全く理解が出来ません。實に、対象そのものな中には、歴史發展の立場、現實創造の立場からするならば、非常に著しい價値の相違があると思ふのです、君の、対象價値の無差別の理論のなかには、このやうな歴史發展の立場が重要に顧慮されてゐないやうに思はれます。もつとも現實性ある形象を創造するためには、すなはち歴史發展の立場から見て、もつとも本質的、重要性をもつた対象を選定造立することが必要であると思ひます。

もし單純に「花柳界の女を描くこと」と「たとへば紡績の女工さんを描くこと」とどちらが重要か、言はれるならば、僕ははつきりと「紡績の女工さん」を描くことが歴史創造の立場から見てより重要であると答へます。もちろん「花柳界の女」を描くことはいけな——と非難しはしません。僕自身次のやうにのべてゐます。

「この作家の『青春』の主人公は、女性を情慾の対象として以外には見る事ができなかつた。それは娼婦のなかに眞に尊敬するに足るべき人間性の苦惱の擔ひ手をみたドストイエフスキーやゴーリキーの態度とくらべるまでもなく、女性一般にたいする無恥な侮蔑にみたされてゐる」と。

要は、これらの生活場面のどちらが、歴史發展の立場から見て、より重要性を帯びてゐるかといふ問題なのです。僕は、この重要性の差異といふことが根本的に重要であると思ふのです。

しかしながら、対象それ自らの價値の相異の他に、それが作品として形成される迄には、作家自身の世界観とか創作方法とかがその間に介存してゐることは自明です。

「花柳界の女」と「紡績女工」とが、歴史の立場から見るとどちらが重要かなどといふのは、あまりに判りきつた馬鹿げた質問かも知れませんが、しかし、そのまま笑つて済ますことの出来ないものが、いくらかそこにひそんでゐるのです。それは、「花柳界の女」の世界は否定的なものであり、「紡績女工」の世界は肯定的なものである——といふ風な考へ方そのものことです。これを今少し言ひ直せば、頹廢的な生活を描いたものは否定的な形象であり、眞面目な誠實な生活を描いたものが肯定的な形象である、といふ考へ方です。このやうな考へ方を僕がしてゐる——とお考へになつてゐられる様ですが、それは少々違つてゐると思ひます。

一體否定といひ肯定といふが、それはだれが言ふことなのでせうか。そのやうな否定といひ肯定といふ——その主體はいつたい何でせうか。それが批評家や作家の個人的な否定や肯定で



あつたら、それは恣意的な根據のない好悪感にすぎないでせう。作家が否定したい現實を否定的に描くことが、否定的形象となるでせうか。それともその反對のことは肯定的形象となるでせうか。いづれもそれは誤りであることは、君自身すでに認められてゐるところです。彼等の否定や肯定には客觀的根據がなければならぬからです。その場合の客觀的社會的根據とは、現實そのものの歴史的發展といふ立場に外ならないからでせう。つまり、現實そのものの歴史的發展の過程に於て、本質的に否定さるべきもの、そのやうな否定を行ひ得るもの、この二つのものなかに否定的現實と積極的現實との關聯が生じると思ひます。この場合これらの關聯は、作家の好悪や、批評家の正義感ではいかんともしがたい歴史的合則性によつて支配されてゐるのです。作家の態度によつて否定となり肯定となるものではなく、言はば與へられた事實として我々の前に横たはつてゐる客觀的現實です。

このやうな客觀的現實の否定的側面を、作家が描くことを、何故に非難することができません。またそれと同様に、そのやうな否定さるべき側面の存在理由として、それを本質的に否定し得る肯定的側面を作家が描くことも、もちろん非難することは出来ません。これはただ一般的な論理にすぎません。この二つの側面の關聯（それだけで現實が成り立つてゐるのではな

く、むしろその間に非常に多くの世界が入り混つてゐるのですが）の、いかなる點が文學の素材としてすぐれてゐるか、といふことは、全く君の言はれる通り優劣がないのです。といふのは、この二つの側面は現實にはどちらも切り離されたものではないからです。否定的側面は、肯定的側面の故に否定されるのですし、その逆も眞なのであつて、單なる否定的現實、單なる肯定的現實は存在しないからです。

それ故、現實の否定的部分を描くことは、もちろん排撃さるべき筋合のものではありません。それはもつともつと描かれねばなりません。現代文學のなかでは、眞に否定的な世界を否定してゐない作品の汎濫に惱まされてゐる現状からではなほ更のこととせう。「文學も否定的現實の否定を行はねばならない。だが文學による否定は徒らに高邁な理想の中にこの否定的現實を解消することではなくして、即ち、默殺とか無視とか歪曲とかに依るものではなくして、逆にそれをあます所なく描きつくすことによつてこの否定的現實の深い根を斷ち切る」といつた方法をとるべきであると言つてゐられることは、そのこと自身としては、まつたく正しいことと思ひます。が、しかし、「否定的現實をあますところなく描きつくす」ことが、いかにして可能であるか、またそのことによつて「この否定的現實の深い根を斷ち切る」といふことはい

かなることを意味するかは考へてみなければならぬと思ひます。

否定的現實の「あますところなき描寫」とはいかなることとせう。否定的現實とはさきに考へてみましたとほり、肯定的現實と複雑ではあるが渾然と組み合わせられた現實です。たとへばイギリスの現實の客觀的基礎は、印度や埃及やアラビア等の肯定的現實の上に立てられてゐるのです。大詐僞漢の現實は、その詐僞の被害を受ける「善良」なる人達と全く直接に組み合わせられた現實です。「花柳界の生活」を耽溺的に經驗し報告し得る社會層の現實は、彼の生活基礎の依つて立つ勤勞民衆との直接的な關係を抜きにしては存在し得ないのであります。したがつて、かかる否定的現實の「あますところなき描寫」は、必然的に、その客觀的基礎をなすもののがたそのものに及ばざるを得ないものでせうか。即ち否定的現實をあますところなく描寫しようとするほど、それは肯定的な現實の把握に赴かざるを得なくなります。逆に、かかる肯定的現實を捨象したところには、いかなる否定的現實の描寫もあり得ないといふこととなります。兩者の相互否定に於ける統一、ここに現實の全體性が存するのではないでせうか。

現代文學に於ける否定的現實の追及の不充分さは、その追及が否定的現實の範圍を出ることができないところにあるのではないでせうか。頽廢生活の内部をどれだけ描きつくしても、そ

れだけでは、頽廢生活の深い根を、即ち頽廢意識のよつて生じる生活的根據をつきとめることは決してできないのではないでせうか。むしろ反對に、頽廢生活をあますところなく描けば描くほど、即ちその氣分、その思考方法、その生活感情の綱目を分け入れれば入るほど、(作家の世界觀を別にして)その作品は頽廢生活意識そのものの表現に化してしまふ危険があるのです。

たとへば、さきごろ新聞などにものつたやうな因業家主があるとしませう。この因業家主をあますところなく描かうとすればするほど、彼の考へ方、彼の見方、彼の感じ方を把へようとすればするほど、作家自身が、彼の考へ方、彼の見方、彼の感じ方そのものに捕へられてしまふのです。さう言へば、そのやうな思考方法を批判的にとらへることはできる、と言はれるかも知れない。しかし、もしそれを批判的にとらへた場合には、必ずそこに積極的形象が入つてきます。即ち、あのやうな因業家主が、どんなに因業なことを考へてゐるかを完全に描き出すためには、この家主の因業な思考の對象となつてゐる、借家人達の生活との關係を持ち出さなければゐられないでせう。そしてこの借家人の立場に立つて因業家主を見るときのみ、はじめつと深くさぐつてゆけば、必ずそこに積極的な現實を發見するでせう。そのやうな積極的現實

を認識し、(それを形象化し)そのやうな現實に立たずには、いかなる否定的現實も、その否定的側面を眞實には認識し得ないし、又それを形象化することも出来ない、といふことになるのではないでせうか。

かやうにして、僕は否定的現實の眞の姿を求めて、却つて、その反對物の姿を得なければならなくなつた譯です。要するに、現實の全體性の形象化、これが問題であつたのです。

さて、このやうな否定面と肯定面との確執摩擦のなかに動いてゐる現實の全體性を作家がとらへるのに、その現實のどこをとらへてもいい、と君は考へてゐられるやうに思ひます。現實のどこを捕へても、その作家の世界観や創作方法が積極的ならば、その主題は積極性を得ると考へてゐられますが、このところは、單に論理的に考へてみただけでも矛盾してゐるやうに思はれますがどうでせうか。

第一に、その作家の世界観(といふことは結局現實に對する作家の位置と態度のこととなりますが)それが眞に積極性をもつてゐるならば、現實のどの部分をとらへてもいい——などは決して考へないで、彼が持つ積極的な志向にとつてもつとも本質的に必要な素材、もつとも

歴史的必然性をもつた素材へと注意が向けられずにはゐないでせう。即ち彼は、現實の發展契機の中からは、必然的なものと偶然的なものとを區別し、本質的なものを非本質的なものより選別し、そして、それらのものから、新しい、より必然的本質的な高度の現實をつくり上げることに努力するでせう。してみれば、世界観が積極的であればある程、その素材選擇、對象の評價は、より一層きびしいものとならざるを得ないでせう。この意味では、對象それ自身の優劣といふこと、即ち、現實發展に關してもつ役割の相違といふ點に於ける、現實の不均等性は無視することができません。

以上は、世界観と對象との關係を思辯的に考へてみただけです。しかし、文學史的事實は、こんな具合にゆかないことは自明です。なぜなら、フローベルの世界観は彼の生存してゐた當時のフランスの歴史的現實によつて規定されざるを得なかつたからです。彼は、そのやうな歴史的規定のもとにある世界観の下に、當時の現實に對しました。そのとき、彼が、マダム・ボヴァリーのなかで撰んだ現實は、優劣のない、行きあたりばつたりなものではなかつたのです。彼は、當時のフランス中流階級のもつ生活上の虚偽や腐敗や無氣力や、何よりもその俗人的形式主義が、人間生活の發展にとつて強い束縛となつてゐることを感じたのでせう。つまり

彼は、フランス中流階級のエゴイズムのなかに強い否定的現實を見たのです。彼はこれを否定したいと考へたのであらうと信じます。彼は、そのためにエンマといふ形象を創造しました。エンマは、いはば當時の俗習的思考の束縛に對する、人間性情の解放と自由とのための代表者であつたのです。フローベルは、エンマのいふ人間を通じて、俗習の束縛に對する鋭い批判を行ひ、否定的現實に對する具體的否定を行はうと努力したのです。

しかし君は、エンマの形象が眞にそのやうな否定を爲しとげたとお考へになりますか。あるひは、エンマを含めて、否定的現實をあますところなく描きつくすことによつて、その否定的現實の深い根を斷ち切ることができたとお考へになりますか。否です。大いに否です。決して、フローベルは、その否定を貫徹しませんでした。フローベルは、そのリアリズムの方法のするどさにもかかはらず、また主觀的にはあくまで否定しようとしてゐながら、その世界觀の歴史性の故に、その否定を完全にはなし得なかつたのです。何故でせう。

僕は、それをエンマの形象の歴史的不完全さに認めます。もしもエンマが、もつと近代的な、叡智ある積極的な女性（我々の言ふ意味での自意識ある）であつたとしたら、彼女の俗習に對する反抗は、もつと異つた形をとつたららうと信じます。そのとき彼女は、その愛情の自

然な發露を、もつと意識性あるものにまで高めたでせう。彼女は、できたらもつと叡智と自覺ある相手を見出し、それとの姦通ではなしに、それとの新しい公然たる結合によつて、俗習に向つて反抗し得たし、批判し得たでせう。そのやうな場合にこそ、眞の意味で、否定的現實が否定され得るでせう。もちろん、マダム・ボヴァリイに於けるフローベルは、その否定をこのやうな眞實の姿にまで高めることはできませんでした。彼は、エンマを自殺させるより他には否定の形式を見出すことが出来ませんでした。エンマの自殺は、フローベルのもつ世界觀に規定されたところの、現實否定の形式でした。そのなかに、フローベルの高さと、その限界が示されてゐます。われわれはフローベルの高さを認めるのみでその限界に眼をふさぐことによつては、眞に彼を超えることは、到底出来ないのであらうと信じます。

それ故たとへば現代の作家が、フローベルと同じやうな主題、即ち俗習的虚偽とエゴイズムに對する否定を行はうとする意圖に立つた時、彼はフローベル的限界を忠實に守つて、否定的現實のエンマ的否定の描寫に自己を限定するとしたら、それこそ歴史に逆行することもあり得るでせう。エンマを選ぶことはいいのですが、しかしそのエンマは、單に感情や肉體の必然に従ふことによつて、俗習の束縛に衝突敗北してゆくのであつてはならないでせう。彼女は、す

くなくとも、もつと我々の言ふが如き高い意識を持ち、叡智をもち、もつと積極的な生活意欲をもつて、この困難な時代の現實に對抗し、それに衝突し、あるひはその重壓に耐へて、より新しい人間の生活關係、より高い人間と人間との接觸と結合とを探索する女性として表現され得た時にのみ、フローベルののではない、より高い立場に立つての俗習批判が爲され、否定的現實の否定が完成されるであらうと思ひます。このやうな女性は現在の社會にとつて、現實的ではないでせうか。我々の眼にふれるところで、このやうな女性がゐないのでせうか。ゐても我がそれを認めることをしてゐないのでせうか。それとも、そのやうな女性を作り出す努力をしてゐないのでせうか。

僕は、このやうな女性が、必ず現實に存在してゐると思ひます。農村や職場のなかで、營々として彼女たちは働き、苦しみ、人生のためにたたかつてゐると思ひます。何故なら、生活の否定的方面が重たくなればなるほど、それを否定し得る客觀的基礎は擴大されてゐる譯ですから。よしんば彼女たちが現象的に華かな現はれ方をしてゐないとしても、彼女達の存在が本質的に現實的意味を持たないとは言へないでせう。現象としては、彼女たちはもつと不幸な意識の遅れによるエンマ的敗北の形であらはれてゐるかもしれませんが。しかし、作家は、歴史的發

展に於ける可能的現實、即ち、客觀的可能性に於て、彼女達を形象化することは許されます。作家はエンマ的敗北を克服した、もつと高い意識を、彼女達に抱かせることによつて、現實に立ち乍らしかも現實よりより高い文學的典型を創造する權利をもつてゐます。このやうな創造によつて、作家は、眞に歴史の立場に立つた腐敗と墮落との批判を、はじめて貫徹し得るでせう。このやうな積極的形象の創造によつて、はじめて作家は、いままでかくされてゐた女性の心理のなかに、腐敗との戦ひと生活建設の熱情を呼びさまし、また同時にそのことによつて、その形象は、より高い現實性を得ることとなるでせう。

このやうな積極的形象の創造を、僕は、偉大な世界的文豪の言葉に従つて積極的ロマンチズムと呼びたいと思ひます。僕は現代文學の發展を阻害してゐるものの一つが、フローベルのリアリズムの氾濫と、この種の積極的ロマンチズムの缺除であると信じてゐます。この缺除は、ただに作家が、このやうな創造を行ひ得るだけの主題設定力を喪失してゐることに起因するばかりでなしに、實に、批評家自身のなかに、この種の積極性を否定しようとする保守的リアリズムが頑固に根をはつてゐるところに起因してゐると思ひます。

ところで君達はいはれるかもしれませんが。僕ののべたやうな理論は「原則的には正論です

が、現在壓倒的な傾向、支配的な傾向の比重を考へてみると、原則論だけではかたづけられないものがあります。舊體制的なもろもろの否定的なものが充滿してゐます。そして悲しいことには、多數の條件は多數の惡徳を生んでゐます。だから、眞實を描くといふアクセントも自づと決定されざるを得ません」と。僕は、現在「舊體制的なもろもろの否定的なものが充滿してゐること」を否定は致しません。しかし、そのやうな否定的現實の充滿だけを見て、その充滿自身、實はそのなかにそれ自らを否定し得る、物質的客觀的基礎をも同時に充滿させてゐるといふ事實に目をふさぐことが、果して眞實のアクセントに従つた態度であるかどうかを疑ひます。疑ひもなく、この種の地盤も亦客觀的には同時に充滿してゐます。ただし、そこには地盤があるだけで、その地盤にしっかりと立ち得る積極的な生活建設の意欲が缺けてゐるだけであるかもしれません。

もしもそのやうな生活建設の熱意が、現象的に缺けてゐるとしても、本質的に、又歴史的に、そのやうな熱意なしに人間は過せる譯でもないだらうと信じます。して見れば、そのやうな地盤をさし示し、そこに生活建設の熱意をかき立てるやうな積極的能動的な主題を設定することは決して間違つたことではありません。ただこのやうな積極的能動性は、同時に（正に同

時にであり且つ必然的にですが）その反面的存在たる否定的現實の腐敗力とのたたかひの中にその全存在を營むものとして把握されねばならないのです。

僕が、「リアリズムと積極的ロマンチズムの結合」といひ「現實把握の勇氣ある認識に立ちながら、同時に、人間の可能性を信じ、生活の積極的建設のための没我的情熱をかき立てる積極的浪漫精神によつて自分を強くよみがへらせることが、今日特に必要である」と言ふのは、このやうな意味に於てであるのです。僕には、この二つのものは、本來不可分のものですが、どうしても同時に結合してゐなければならぬと思ひます。僕は積極的浪漫主義の再興については、今日特にそれが必要であることを痛感してゐます。このことは、作家及び批評家に於ける積極的主題性の恢復と關聯して、特に重要なことだと思ふのです。

では、積極的主題性とは、どういふことを意味してゐるのでせうか。

ここでは、歴史といふことが非常に重要な意味をもつてくると思ひます。僕達人間生活は、それをとりかこむ環境のために完全に支配され切つてしまつてゐて、人間的な意識的な一切の努力といふものは無用なことである、とは考へられません。人間といふものは、生活の重苦し

い腐敗や障害のために苦しめられてゐます。しかし、苦しめられてゐながら、矢張りその腐敗や障害を、あるひは耐へたり、迂廻したり、または本氣になつて對抗したりしながら、一步一步とより高い生活を築いてゆかうと努力してゐるものだと思ひます。つまり人間は、歴史によつて支配されるものであると同時に、また積極的に歴史を創造する力を與へられたものだと思ひます。歴史の構造によつて規定されながら、また同時にその構造の規定力そのものを進歩發展させてゆくものだと思ひます。物質的にさうであると同時に精神的にもさうであると思ひます。生活の諸條件によつて人間が支配されるものであると同時に、人間はその生活條件そのものに向つても進歩と發展を求めてやまないものであると思ふのです。もちろんそのやうな進歩發展の努力は、たえず現實にぶつかつて崩れてゆくかもしれません。しかし又、崩されながら他面では現實を崩してゆくかもしれません。

僕は、人間が生活の明日の建設に向つて進んでゆく意識的努力の形は種々様々にあると思ひます。そのやうな努力の本質的な現はれは、政治や經濟の中にあることは勿論のことです。しかし、それが政治や經濟以外のところには絶対に無いとも言へないと思ひます。例へば横光利一の「紋章」にあらはれてきたやうな科學や技術の努力はどうでせうか。科學による人間向上

の努力は、直接的な形では政治による生活發展の努力とは異つてゐるかもしれません。しかし、政治や經濟による生活發展の努力とは、たとへ異つてゐるにせよ、それが人間生活の發展にとつて、實に巨大な推進力となつてゐるものであることは否定できません。また科學に於ける人間の努力が、今日、全然喪失してしまつたとは思はれません。否、若い世代のなかには、科學に對する熱情と、獻身への決意が、深く胸のなかで燃え上らうと思ひます。科學がその本領を喪失するやうな危機に面しながら、しかも、眞に科學のために一切の私利私慾をなげうつて、その危機から科學を救出しようとする積極的な意欲が失はれてゐるとは思はれませんが、そして、科學を阻害する力と、それを打開しようとする人間の意識的努力とのせめぎ合ひこそが現實であると思ひます。このやうな科學の發展が、現實の政治や經濟と絡まり合ふと、そこにはいろいろな腐敗や墮落や我利我慾が発生するかも知れませんが、しかし又同時にそのことが、そのやうな腐敗そのものを、より一層高いところから不可能にする力をも生じさせると思ひます。

かかる意味で、眞の科學のもつ「高邁な理想」のための努力を我々は否定すべきでせうか。それとも、そのやうな努力は現實的でないとでも言へるでせうか。又その場合、そのやうな努

力と、その妨害力とのせめぎの形態を、單に傍觀してゐる立場で、あくまで冷靜に客觀的に描寫するだけでいいのでせうか。そのやうな傍觀者の立場に立つての描寫といふことは、果して可能なのでせうか。

僕は、この點に於て、實に「客觀描寫」といふものの本質的な限界にも衝突せざるを得ません。僕は、この科學の積極的建設の努力とその妨害力との間の闘争を「客觀的にあくまで客觀的に」描き出すといふことは、實際のところ不可能でもあるし、又間違つてゐると思ひます。僕はその場合、科學なら科學の、積極的建設への努力を肯定した立場に立つた時に於てのみ、眞の歴史的現實性ある創造力があらはれてくると思ひます。このやうな積極的建設の熱意のないところには、そのやうな努力を妨害する力、即ち否定的現實そのものも眞實性を得てくることはできないと思ひます。してみれば、このやうな熱意から出るあらゆる人間的努力を、我々はまづ第一に肯定してゆくべきであらうと思ひます。文學はこのやうな人間的努力を單に形象するばかりでは足りないと思ひます。文學自身がこのやうな努力そのものにまで高まらなくてはならないと思ひます。單に積極的な形象を通じて現實の否定を行ふばかりでなしに、文學そのものが、このやうな積極的な形象のもつ内容に、全的に没入したものでなければならな

いと信じます。

横光利一は、「紋章」の主人公雁金を、單に描く、客觀的に描くだけでは終らなかつたと思ひます。雁金がその没我的な情熱を應用科學の一部門、水産學に傾けてゐる時に、彼の積極的建設の熱意は、いかばかり學閥や官僚機構や、それ自ら利害關係によつて全生活的につながつてゐる層の人間的支配網、即ち所謂否定的現實に衝突し、葛藤し、傷つき合はねばならなかつたこととせう。そのことを、作家は傍觀的に報告してゐるのでせうか。さうではありません。横光利一は、はつきりと、雁金の持つ博大な人間向上への愛、またそのあくことを知らぬ高邁な理想への積極的な努力、それを支持し、それを同感し、むしろ雁金自身の熱情を横光自身の熱情とするまでに、雁金のなかに没入してゆくことができたからこそ、あれほどまでに雁金の形象が生きてきたのです。單に雁金が人間的生命を得たばかりでなしに、同時に、雁金といふ積極的形象を通じてのみ、科學への積極的努力を窒息させようとする否定的現實が、あくことなき窒息的な現實として、我々にまで、實に鮮明に且つ眞實に迫つてきたのです。即ち、作家横光は、積極的形象のもつ主題的思想を肯定し、その中に没入してゆくことによつて却つて眞に否定的現實の曝露と否定とを行ふことができたのだと思ひます。



してみれば我々は、生活の積極的建設への努力を支持し肯定し、それに我々自ら積極的に努力すること以外には、いかなる現實の客觀的全體性を得ることもできないと信じます。もつと普遍的に説明するならば、文學創造に於ては、あくまで客觀的な現實の追及といふことはあり得ない。現實の追及は、歴史發展の諸法則の客觀的な追及に限定されるものではない。それは、歴史過程に沿つて、能動的に、積極的に生活を切り拓いてゆく、その道程に於ける主觀それ自身の變革であり、また客觀それ自らの變革であると思ひます。

このやうに、客觀を發展させながら、主觀それ自らも發展するといふ統一的事業のなかに、認識の本質が存在してゐるのではないでせうか。文學は、かかる統一的事業による現實發展そのもののなかに、その積極的主題を設定し得るし、また設定すべきではないでせうか。文學に於ける主題とは、歴史過程の認識に基づく積極的な歴史創造事業への参加にあると思ひます。文學の主題は、かかる創造の積極的な構成物とならうとする全人間的な努力ではないでせうか。過去の文學作品の主題は、その世界觀やその創作方法の制限によつて、そのやうな主題の意識性にまでは決して到達することができませんでした。しかし、現代文學は、その主題を、かかる自立的な意識性にまで高めることによつて、過去の文學を自分自身のなかに喰ひつく

し、新しい自己の性格にまで到達しなければならぬと信じます。

實に主題の純客觀的停止性、主題設定に於ける現實凝固的保守性の故に、否定的現實の範圍内に限定された否定の形式や、現實それ自らが文學對象として無差別的である理論が生じ、積極的形象の否認の理論が生れて來たのではないでせうか。しかしこのことは又反面に、主題設定に於ける積極性の故に、そのあらゆる現實からの逃亡を合理化することであつてはならないことは自明です。

(十六年四月)

## 市井への思慕

さきごろある必要から、私は、島木健作氏のほとんど總ての勞作に目を通して見た。その際つよく私の注意を惹くものが一つあつた。それは、この強い抗議の精神にみたされた作家の心情の片隅で、傷つき痛む心の疚きを慰めんがためとも思はれる切なさをもつて、市井人の生活への郷愁といふべきものが流れてゐるといふことである。

彼の作品のなかからそれを取り出すことはきはめて容易である。たとへば「人間の復活」のなかで、當代のインテリの苦惱の擔ひ手とも見られる主人公健吉が、出獄後さまざまな省察と抑制とを経たのちに、つひに「彼は、出来れば明日からでも、自分も亦このちまたの雑沓の人となることに心をきめてゐたのであつた。平凡な市井の一人として生きること心に心をきめてゐたのであつた」とのべてゐるところにもそれを讀みとることができる。また短篇集「三十年

代」のなかの「三十年代一面」で、桶屋上田が「出て来て間もなくのことであつたが、ぶらぶら散歩して××の細民街まで行つたことがあつた。六年前も今も少しも變らずあの通りゴミゴミしてゐる。相變らずだな、と思つて立ち止つてぢつと見てゐるうちに涙がにじんで來た。あすこの一廓の人間共の生活の姿そのものがなんともいへず懐しいものに思へて來たんだ。あれらはあれなりに飲食し、生殖し、明日に何かを期待し、夢を描き、眞黒な不満を底深く湛へ、おしつぶされさうでゐながらおしつぶされずに逞しく生きてゐる、——おれは人間て奴は素晴らしい、人生は結局美しい、と眞から感じ得る人間だと思つてゐる。」と物語つてゐる件りにもそれを見出すことができるであらう。

さらにそれは「ある作家の手記」のなかで、一層明瞭に次のやうに言ひ現はされてゐる。「その思想を棄て去らねばならなくなつたので、型に慣されてゐた彼の精神は途方に暮れてしまつたのではないか。彼はこの自分の心臓に活を入れることを思つた。彼はそのため先づ、自分の身を起して出来るだけ遠くまで行かうと思つた。さまざま人間の生活のなかへ。中へでなく、その表面だけにしかふれることができなくても、そこへ行かうと思つた。」

このやうな生活への思慕そのものが、同時に「ある作家の手記」の全く特異な形式を生み出

した。ここでは、この作家が這入つて行つた内地農村の生活や、滿洲の開拓農民達の生活は、その生活の具體的な諸條件の全體的な關聯に於て追及されてはゐない。けれども同時に、これらの外的な生活は、外的世界のままで放任されてゐない。と言つても、かかる外的世界を、自己自身の文學の上で生活し直して、その世界も自分のものであると叫び得る程のものとはなつてゐない。作家は、自分の生活とこれらの外的世界とを、直接に結合することによつて、自らの内部風景を物語らうとしてゐる。しかし、その際、その現實も、自己の生活も、藝術の對象に對する作家の態度をもつては對ひ合はされてゐない。いはば、作家生活も一般社會生活も、藝術的仕上げを蒙らない生々しさをもつて、讀者の前に投げ出されてゐるのだ。そして、そのやうな生活の生々しさが、その生々しさの故に讀者を感動させるところにこの作品の一つの祕密がある。

もしもこの作品は私小説であるかと問はれたならば一寸答へ難いであらう。なるほどそこには作家の私生活が語られてゐるわけではない。その限りでは形式的には私小説とも言へるであらう。しかし、そこに語られてゐる作家の私生活は、個人生活の微細なデテイルや、個人的感情の濃淡や、草木蟲魚的自然への感懐に依つて表現される孤立的人間生活ではない。それは作家

の個人生活と廣い社會的事象との交叉であり並存である。この双方がばらばらに獨立して居りながら、しかもそれが互ひに交叉し合ひ並存し合つてゐるところに特徴がある。滿洲開拓農民の生活と、「ある作家の手記」を執筆する作家の個人生活とは、どうしてもつながらないではゐられぬ程の、必然的なつながりの中に營まれてゐる譯ではない。だからと言つて、この両者が全然獨立した無關係なものとも言へない。作家の旅行といふ事實がこの二つのものを交叉させてゐるところから兩者の關聯が生じる。かくて、作家は自らの私生活を物語りながら、同時に多くの社會生活の斷面について物語ることができたのだ。

かくしてここでは、私小説の形式の中で、その内容はすでにその枠の外にあふれでてゐるのだ。もしくは、あふれ出ようとして身をあがいてゐるのだ。しかも、不思議なことには、それはいまだ完全には私小説の衣裳を脱ぎさつてはゐない。私小説の殻がまだ彼の背中にくつついてゐる。

私は最近の文學のなかに、この種の作品が可成り澤山あると思ふ。たとへば徳永直氏の「東京の片隅」もこれらの作品の一つに數へられるであらう。この小説の主人公は「流行らない小説家である。註文がないばかりでなく書けもしないのである。」その主人公一田福次のノートに

は次の言葉がかきつけられてゐる。  
どこかへ出てゆきたい。

のびやかな晴々とした場所へゆきたい。

あたたい人と人との間にゆきたい。

ここでも一田福次が作家徳永直の別名であることは言ふまでもない。一田福次と書くかはりに私と書いたところで、この小説には一分の狂ひも出てはこないであらう。つまりこの小説は私小説の形式なのだ。しかし、この小説家の生活は、決して私的な個人的な側面に沿つてのみとらへられてゐる譯ではない。

そこには、所謂轉向者の心理的苦悶も描かれて居れば、消費組合や隣り組や木炭配給のこともある。防空演習のこともある。戦争景氣のこともある。小工場の重役になつた左翼理論家の轉落の姿もかかれてゐる。凡そこれらすべては生活の私的側面ではない。しかもそれが、作家といふ私生活を通じて取りあげられてゐるところにこの小説の特徴がある。形式から見れば立派な私小説でありながら、その内容は生々しい社會的事象にみたまされてゐる。ここでも亦小説の内容が、その形式の枠を打ち壊して外へ出ようとしながら、しかもその枠を丁寧に背負つて

ゐるのだ。

さてまた、ここで岡田三郎氏の「伸六行状記」を憶ひ起さない譯には行かないであらう。周知の如く三田伸六は歸還兵である。しかし同時に彼は出版社の編輯員でもある。彼はしばしば泥酔するが、その泥酔には意味がなくもないのである。

たとへば、一田福次も同じ知識人である。だが、一田福次の登場は、知識人であることすべての本領をもつて始められてゐるのではない。知識人としてもつ本來の任務から離れ一市民、一庶民としての生活のなかに融けこまうとする意欲から彼等の出現が始まつてゐるのだ。いはば知性が知性であらうとする本來の立場を捨象してゐるところからこれらの作品が出發してゐるのだ。このことが三田伸六にとつても必要である。そこで三田伸六は一切の知性的な抑制をかなぐり捨てて泥酔の快さに身を任せる。それは、同時に市井生活のなかに身を投じてゐることを意味してゐるのだ。そして、まさにこのやうな泥酔こそがこの小説の面白さを形成してゐるのだ。泥酔しなければ三田伸六は木炭不足の現實にもぶつからなかつたであらう。酔つばらはなければ彼は日支事變の悠久な解決などを考へもしなかつたであらう。彼は編輯者としての知性的な仕事を捨てたところに、それとは全然かかはりのない社會的事象たる木炭不足や日支

事變の解決問題などに就いて考へる場面を築いてゐるのだ。

そして、この三田伸六が、殆んどそのまま作家岡田三郎であることはもはや事新らしく断定するまでもない。いはば伸六シリーズは新しい私小説の型の一つなのだ。ここでも亦、ふしぎなほどの一致をもつて内容が私小説的形式を脱け出さうと身構へてゐる事實におどろかされる。

ここまで来れば、伊藤整氏の「得能五郎の生活と意見」をあげない譯にも行かないであらう。得能五郎もまた小説の書けない小説家である。またしても、さきにあげた様に、小説家が小説を書くといふ本来の仕事捨て去つたところから、これらの小説が生きはじめてゐるのである。

「得能は新聞をひろげるや否や、忽ち頭がはつきりとし、政治外交面の大見出しに眼を走らせる。支那事變が四年續いてゐる上に、ヨーロッパ戦争がノルウェイからオランダ、ベルギー、フランスと次々に戦鬪區域をひろげて行つてゐるので、朝ごとに、次はどうなつてゐるかといふ期待でもつて新聞をひろげるのだ」

かやうにして、小説家得能五郎の生活的興味の焦點は、どうして小説を書くか、と言ふこと

にはない。また彼がどのやうな現実生活の煩はしさにしぼりつけられてゐるかも問題ではない。ここで只管問題とされてゐるのは、作家の私生活とは一見無關係な社會的歴史的事象である。それはヨーロッパやアジアに於ける戦争ばかりではない。戦争の影響による食糧問題、空地利用の問題が、單に論じられてゐるばかりでなしに實踐されてさへゐるのだ。馬鈴薯を作ることは得能家の生活のどの足し前にもなりはしない。けれどもそれは作家得能五郎にとつては、もつとも重要な關心事とならざるを得ない。

最後に中野重治氏の「空想家とシナリオ」を付け加へることはもはや蛇足であるかも知れない。この作家は、自らこの作品を稱して「私でなければ書けぬ」と言つてゐるが、そして、それに反對するものは一人もゐないであらうが、不幸にして「空想家とシナリオ」もこれらの新しい知識的市井人文學の一つであることを否定し得ないであらう。

この小説のなかに現はれる主人公車善六が、全く一筋縄ではいかない鋭利燃犀な思考の持主であることは、それがそのまま作家中野重治の肖像であることを益々簡單に納得させる。平野謙氏も言つてゐられる通り、この作家は、車善六といふインテリの個性やその生活をとりまく諸條件の綿密な具體的な追及などといふことは、最初から問題としてゐないのである。即ち車

善六のなかに、當代のインテリの一つの典型を創造しようとは、はじめから、この作家は考へてゐないのだ。

作家が考へてゐるところはもつと直接的なものである。作家は車善六を創作の對象とは考へてゐない。作家は自ら車善六の中に這入りこんでしまつてゐる。作家の思考はそのまま車善六の思考であつて、作家の思考が藝術的な加工を受けることなしに直接にあらはれてゐるところに、この作品の魅力があつたのだ。そして、この作家は車善六の思考するところは、決して日常生活の細々としたデテイルのなかに表現されるが如き現實ではない。彼にとつての現實はもつと大きい。むしろ些末な日常的現實を一切捨て去るところから、車善六のふしぎに生々しい現實が歩き出す。

たとへば彼は家のことを考へるが、しかしそれは啄木が歌つた様な非市井人的な閑雅な棲居ではない。もともと彼は啄木の氣持には同情できるのであるが、「何にしてもあれは退嬰的である。あれは生活に疲れたものの若年寄りの自慰である。あの詩のなだらかな調子そのものがさうである。おれはバシマチキンの一人かも知れないが、しかしバシマチキンそのものではない。なぜ啄木は、ニエクラーソフの如く裸足で歩かなかつたのか？」と考へる。

彼はさらに「本と人生」といふシナリオを考へる。しかもそれは「日本でつかふパルプの量は年八十萬トンである。そのうち輸入は二十萬トンである。日本のパルプは樺太で出来る。北海道で出来る。朝鮮でもできる。樺太半分が日本のものとならなかつたら、現在日本産パルプ量の七十八パーセント以上はマイナスになつた譯である」と言ふ風である。また「だが活字はいかにして造られるか？ 鑛山から鉛が採られアンチモンが採られ、錫が採られる。それらの合金が活字地金である。また銅が採られてこれが母型になるのである。母型が地金に移されて活字が出来る」といふ風である。こんな馬鹿々々しい子供騙しの空想が何故にわれわれを惹きつけるのか。「問題は折屋である。何とあの女工達が踏みこんでゐることであらう。ある日善六が芝口の通りを歩いてゐると、珍しくさつぱりとした折屋があるのに出會した。ふいに一人のおばさんが折臺の前から起つた。そしてふくれた上つぱりのまま、お一二お一二と兩腕を縮めたり伸ばしたりしはじめた。どんな體操があれ以上に體操だつたらうか？ ふしぶしのポキンといふ音が善六には聞えるやうであつた」——これなのだ。ここに、この作家の市井の生活に對するもつとも熱い感動がある。その感動がそのまま讀者を感動させるのだ。

要するに作家は、出版といふ社會的事象について没頭的に思考しながら、しかもその思考

は、出版文化そのものの具體的條件とその現在の位相についてではない。作家はこれらの社會的事象のあらゆる市井的場面に自由自在に出没する。彼の出没の箇所にしたがつて印せられる現實の映像は、生きた全體の構成に内部から融け込んでゐるものではない。生きた社會がその凡ての組織と條件のもとに現はれてくるのではなくて、その斷片と部分とが、作者の空想のなかで自由奔放な羅列のなかに置かれることに依つて作家自身の内的世界の生き生きとした調和を生み出してゐるのだ。

かくて「空想家とシナリオ」も依然私小説ではあり乍ら、しかも在來のそれとは遙かに遠い世界へまで來てゐるのだ。

さて私は、これらの小説群をあまりにくだくだしく分析したかも知れない。私はここでそれらのもついろいろな特徴を、覺書風にまとめて見ることが必要だと感じる。

もちろんこれらの小説は、夫々作家の個性が異なると同じく獨自的な面をもつてゐる。しかし、それにもかかはらず彼等は幾つかの共通點をもつてゐる。第一に彼等の小説中の主人公である。得能五郎も一田福次も小説の書けない小説家である。車善六と言へば「善六自身文學青年を以て自ら任じてゐる」のだ。ある作家の「手記」は言ふまでもない。三田伸六は編輯者であ

る。彼等は要するに、もつとも良心的な知識人なのだ。所謂系譜作品の主人公達が待合や飲食店や旅館や小商店の世界の人間であることに比べて、これらの小説で、もつとも知識人らしい知識人が正面から現はれてゐる事實は見逃せない基本的な特徴であらう。これを、もつと素朴な言葉で言ひかへれば、前者が小金持の世界を描いたものだとするれば、後者は所謂インテリの世界を描かうとしたものなのだ。

次に、これらの小説はほとんど故意なまでに私小説的形式をとつてゐる。系譜的作品などは之に反して故意に作家自身の陰影を打ち消さうと努めてゐるのに、ここではもつとも露骨に且つ意識的に作家が顔を出し、作家が自己を語るに忙しい。

にもかかはらず、そこに盛られる内容は生々しい社會的事象であり、現象性にみちた問題である。系譜的作品が客觀小説の形式をとりながら、その内容が案外に私小説的世界に陥まつてゐることとの、鋭い對照がここにあらはれる。

そして、私生活と社會的事象とのこのやうな自由勝手な結びつきのために、これらの作品が「手記」的あるひは「日記」的體裁をとつてゐることも注目し價する。それはたとへば岩倉政治氏の「村長日記」などといふ作品をとつて分析して見ても言へることである。系譜的作品が

年代記的體裁をとつてゐることと、これらの作品が日記的な體裁をとつてゐることの間には、單なる對比以上の問題が含まれてゐる。

それにしても、これらの著しい共通點の故に、これらの小説群が一個の様式として獨立してゐるものであるとは言へないであらう。それは様式として自己を定立するには、あまりに形式と内容との背反が著しい。彼等の新しい内容が、それに相應しい新たな形式を生み出すまでには、しかし單なる技法の發展の問題以外に、作家達の生活態度全體にかかはるものがあるやうに思はれる。

もしも、彼等の私小説的形式への意欲が、もつとも知性的な知識人の自意識を文學に依つて解放するためのものであつたとするならば、彼等の内容を一貫する社會的關心は、このやうな知識人が、市井人の生活にたいして抱く切實な望郷の念から生れて來たとも言へるであらう。

彼等は一方では眞に知性人たるに相應しい自意識を確立しようと念願しながら、同時に他方では強く市井人の生活に融けこむことを望んでゐる。彼等の文學が、このやうな二律背反のなかに營まれたものであることは殆んど確かであらうと思ふ。それと同時に、このやうな二重性の基礎が現在の知性作家達の生活そのもののなかにあることも亦眞實であらう。

たしかに今日作家達の生活は、昔私小説の大家達が營んでゐたやうな超脱と孤高とを許容し得るものではない。

彼等は書齋に坐つてゐても、天下國家風雲のざわめきを刻々ラジオを通じて耳にし得るであらう。彼等がどのやうな超俗的思索のうちに孤坐しようとも、社會生活そのものが彼等をゆり動かさずにはゐないであらう。彼等が對つてゐる原稿紙一枚でさへも、また彼等が手をあたためる一塊の木炭でさへも、今日ではそのまま紙不足や木炭配給といふ風な全國民的問題の一つなのだ。いはば私生活そのものが斷ちがたく國民生活と結び合はされてゐるのだ。作家は昔の私小説家ほど容易に國民生活から脱出することができなくなつて來てゐる。しかも個人生活は依然として個人の責任に委ねられてゐる。個人生活が、たとへば兵營内に於けるが如く、そのまま全的に國民生活ではない。このやうな現實生活の二律背反そのものが、強くこれらの小説群の形式と内容の矛盾のなかに反映されてゐると見られなくはないであらう。

しかし、それよりもつと重要なことは、島木、徳永、中野等の作家達に共通なる時代的經驗の特殊性であらう。これらの作家達は、自ら知識人でありながら書齋派であることを強く否定する精神から出發した人達である。



彼等は知性的であることの全幅的な努力をささげて実践のなかに身を投じ、しかも現實の炎にその膚を焦して退いたものである。彼等の心にはまだ政治の火傷が疚いてゐるのだ。しかも彼等の知性には、書齋に立てこもることを許さない何ものかが強くひそんでゐる。それが彼等の心をかり立てる。あたたかい生活のなかへ、市民生活のなかへ、國民生活のなかへ、己が知性の全幅的な思慕を懸けざるを得ないのだ。彼等はもちろん完全な一市井人となり切ることができない。それができないからこそ彼等の市井生活への思慕が生れるのだ。彼等は、かかる満たされざる思郷の念を彼等の小説のなかに吐露したのだと言つても、さほど言ひ過しではないであらう。

しかし、それでは伊藤整氏や岡田三郎氏等の生活への態度には、果してこれら思想経験者と同じものが流れてゐると言へるであらうか。明らかにそれは同じではない。しかし、それにもかかはらず、彼等のなかにもまた深く市井人への思慕が流れてゐることは否定できないであらう。

岡田三郎氏がある文章のなかで、「生活戦線に刻苦する一兵士の庶民の、生活環境についての経験、見聞、批判、感傷等々を、文學の上になまなましくたたきつけることが、文學の上にと思はれる。」

さてまた私は、伊藤整氏が、「文藝作品は、各頁の、各所の、各句が、その生の味ひを讀者に傳へることで存在してゐるのが本當であつて、それは人間が生き、食ひ、喋つて存在してゐることに意味があるのと同様なのではあるまいか。」と述べてゐられることを憶ひ出す。得能五郎の生活と意見は、一定の思想的結論を求めものではない。彼は知性的な思惟の本來的な使命に殉じてはゐない。彼は知性本來的結論から遠ざかつて、生活の生々しい味得のなかに文學の生命を見出さうとする。それがふしぎな一致をもつて市井への思慕となつてゐることには、島木氏や徳永氏が自らそれを意識してゐる程には氣付いてゐない。

いづれにしてもこれらの小説群が知性作家達の市井生活への満たされざる思慕の表現であることは殆んど確實である。それはいはばこれらの作家達の全生活を賭けた努力であつた。従つて、これらの小説群がその二重性格を克服して自己の様式にまで到達するのは容易ではないで

あらう。

作家達が完全に市井人になり切つた暁には、彼等の文學はもつと新しい形式をもつて装はれ得るであらう。また彼等の知識性が完全に知性的であることを貫徹した際には、もつと異なつた文學内容が生れてくるであらう。それをなし得ない條件にある現在のところ、彼等はかかる二重性のなかに、彼等自身の存在を懸ける外はないのである。

(十六年二月)

## 主體の喪失

最近に於ける私小説の再興を、一概に現實の激流からの逃亡であるといふのは恐らく言ひすぎであらう。所謂客觀小説の自己放棄による適應から、自己の眞實な赤裸な姿の認識への復歸といふ一般的傾向には、確かに一定の心理的基礎があるからである。それは明らかに今日の知識人の全體的地位が益々片隅に追ひつめられて行きつつあること、彼等の全体的存在そのものが日に日に危険な破滅の深淵に近づきつつあるといふこと、かかる客觀的現實の心理的表白であるからである。今や知識人にとつて、國民的な廣大な生活の全體的運命に對する關心が昂まれば昂まるほど、同時により強く切實な直接性をもつて、知識人自體の全体的存在がその關心の中心となつて行かざるを得ないのだ。彼等は他の運命を語る前に、まづ自らの運命について熟考しなければならぬ瀬戸際に立たされてゐるのだ。

それ故、現實生活の荒浪の中で刻々翻轉されつつある知識層の自畫像こそが、今日もつとも痛切に求めらるべきものであることをのべて、岡田三郎氏が次のごとく書かれたことを私は忘れ得ない。「こんにちの現實的現象のなかで、こねくりかへされてゐる作家の、その状態から生み出される小説にこそ、ほんたうの文學的意義があることを強調したい。現代の作家がみんな一度だけでも現實に即した私小説を書いて見せてくれたら面白いだらうと思ふ。時代に對する各作家の認識がどの程度のものか、時代と共にする作家の悩みがどれほど深いものか、といったやうなことが、それで大體解るやうな氣がする」——まことにこれらの言葉のなかには知識人の動搖不安についての痛ましい自己告白がある。かかる混亂と動搖そのものを文學の對象として設定することが、作家なる知識人にとつて今日もつとも直接に必要であるといふこと、いはば作家は自己の全存在を文學對象の實驗臺にのせることによつて、廣くインテリ階級全體の、今日に於ける本質と方向とを認知しようとする、一般的にはより誠實な態度がそこに認められるが故である。私小説への要請に、かかる知識層の自己批判の要求が深く根ざしてゐることは否定できない。今日の私小説は、追ひつめられた知識人の最終の心理的據點であり、絶體絶命の泣訴であり、宿命への捨身な自己追及であつたのである。

このことは、たとへば近代文學に於ける私小説の端緒について考へてみても言へることではなからうか。多くの批評家は、田山花袋の「蒲團」を中心とする三部作をもつて、リアリズムの私小説形式への變貌の萌芽を認めるのが常である。島崎藤村の「破戒」をもつて、個人生活の現實から廣汎な國民生活の現實探求に向ふ努力であり、花袋の「蒲團」をもつて、國民生活の客觀的探求から、ひたすらそれとは切離された個人生活、特に作家個人の實感や心境に向ふ努力であると批評されるのが常である。けれども、花袋の「蒲團」は、單なる作家個人生活の實感や心境へ向ふ努力では決してないのである。

花袋が「蒲團」三部作で描いたものは、明治末期に於ける國民生活の激しい發展と沸騰と動搖のなかに形成されつつあつた一定の知識層が、舊時代の觀念と意識とを變革するかはりに自己を破滅させて行つた歴史生活の葛藤であつた。花袋にとつてのアンナ・マールは決して彼のみ存在したのではない。當時の所謂「新しい女性」が、新しい世代の特權を實踐し、家族制のきびしい掟に反抗しつつ、自らを解放しようとするその努力が、自他の精神的社會的條件の未成熟の故に破滅して行く姿を描くことによつて、花袋は確かに當時の生活の歴史的進行の姿を捕へてゐるのである。それはその限り、充分に客觀小説となり得てゐると言はねばならぬ。

しかしまた彼は、かかる生活の歴史的葛藤を自己と無關係に客観化したものではない。むしろかかる新しい世代の擡頭に面して、心理的に追いつめられた知識人の全存在の動搖と不安を自己の中に檢照せずには措かなかつた。それは二葉亭の諸作品と並んで、知識層の動搖と不安の最も眞實なる告白となつたのである。その動搖と不安の背後には、日露戦争に伴ふ急激な生活構造の變質があつたことは確かである。

私小説の其後の發展に於て、たとへば葛西善藏、芥川龍之介、志賀直哉の文學に於て、彼等の小説的探求が個人生活の内部に限定され、それを内包する國民生活の現實にまで到達し得なかつたと言つて非難するのは當らない。何故ならば、たとへば葛西善藏の文學は、藝術家の生活の痛苦を描いて、確かに個を通じる普遍の高さに到達してゐるからだ。「子をつれて」「姉」「蠢く者」等々の中には、打ち碎かれた知識層の、胸を打つ破滅の姿があつた。それは最も高い意味で時代の現實に近づいてゐるものである。それは個人生活のなかに、時代の最も特徴的な眞實が表現されてゐたからである。生活と藝術との相剋を、彼ほど眞剣な主題として設定したものはなかつた。彼は彼自身の生活を賭けて、かかる相剋の眞實を追及しようとした。このことが當時の知識層にとつて、最も重要な人生上の問題であつたからである。そして彼以後、

このやうな問題は創作上の主題として設定されることは愈々稀となつた。所謂マルクス主義運動も、この問題を實際的に解決するどころではなかつた。

これにして、最近に於ける私小説の再興は、果して眞實に知識層の自己追及、自己解剖となつてゐるであらうか。作家達は自己の動搖と不安を告白はするが、しかしそれを、花袋や葛西に於けるが如き眞摯な自己追及、自己批評にまで高めてゐるであらうか。作家達は、彼等が意欲する十分の一程も、自己に對する眞實の苛責なき追及と批判とを行つてゐるとは思へない。たとへば「得能五郎氏」は確かに批評する。彼は批評する。空地耕作について、それに纏れ合ふ市民達の我慾について批評する。交通機關と市民道德の未成熟について、日本人の能力について、日本の作家と外國の作家の本質的な相異について、北京から持つて來た靴について、オデッセイについて、ポパイの鬼ヶ島征伐について批評する。ドイツのノルウェイ作戰から、オランダ、ベルギーへの侵入、マジノ要塞からレイノウ首相の演説にいたるまで批評する。チャーチル英首相の施政方針からヒットラーの戰術までも批評する。遂には自分の翻譯した「サンルイス・レイの橋」まで批評する。一言でいへば彼は全世界を批評する。この新聞記者的萬能批評家の饒舌の飛沫を受けない何者があるだらうか。——遺憾ながら一つあるのだ。

それは彼自身について批判することを忘れてゐるといふことだ。自分自身の生活の痛苦や藝術上の煩悶を切開き、自己内奥の最も痛ましい危機と弱點とを告白してはゐないと言ふことだ。自己の生活の周圍を總撫でに批評はするけれども、それを批評せずには居れぬ自己の切實な内的要求そのものを追及してはゐないと言ふことだ。

再興しつつある今日の私小説が、自己そのものを語らずして自己の見聞する日常雑多な現象を語り批評するといふこと、私を追及し私を抉らずして却つて私に接觸する日常生活の瑣末事について意見をのべ批評を下すといふこと、——このことは決して「得能五郎の生活と意見」に限られたことではない。一群の知性作家達、たとへば島木健作氏の「或る作家の手記」や中野重治氏の「空想家とシナリオ」や徳永直氏の「東京の片隅」や岡田三郎氏の「伸六行狀記」——これら最近の主要な私小説が、多くはその内部に批評をもつてゐること、しかしその批評は自己を批判するよりも自己を肯定し、自己を追及するよりも自己の周圍を批評しつつあるといふこと、これらの風景は今日の知識層の身構へと態度とを最も見事に表現してゐると言はなければならぬ。それをインテリの怯懦と言ふならば、かかる怯懦を自らは告白しなかつたところが怯懦なのであり、それを動搖と言ふならば、自己を衝かず他を顧るところが動搖なのだ。

要するに知性人の絶體絶命の關頭に立つた泣訴としての私小説は、今日いまだ完全に自己の生活内奥の痛手を衝き得てゐないのだ。自己を抉り、自己の凡ゆる思想感情の根本を解剖臺上にのせ、自己のもつあらゆる醜惡、怯懦、弱點、動搖を告白し得てはゐないのだ。況んや、そのやうな自己の動搖、不安、痛恨、弱身の内容となり機縁となつてゐるこの時代の國民生活の全體的な動搖と不安と弱點と暗黒との生きたつながりに於て自己を捉へることなどは到底彼等の關心にはないのだ。個に徹することによつて同時に全體であり、特殊であることによつても普遍である、そのやうな個人生活の奥深いメカニズムは決して彼等のものではなかつた。一言で言へば、彼等は自己を除外するあらゆるものを批評したが、しかしそのことによつて實は何事も身を以つて批判はしなかつたのだ。彼等の批評は、現實に對する作家の立場そのものへの自己批評によつて基礎づけられはしなかつた。かかる自己批評こそがあらゆる批評の礎石となるべきであるのに、實にかかる根本的な基準を彼等は捨て去つてゐるのである。

それ故、私小説の形に於ける知識層の自己省察は、何よりも先づ作家を含めた知識人の全體的な生活内容に對する自己追及から始めなければならぬであらう。しかし作家が自己の文學生活に對する省察を深めるといふことは、單に文學に對する以外は何事も關知しないと言ふこ

とであつてはならないのだ。なぜなら、文學者の文學に於ける仕事そのものが、いはば生活の認識であり表現であつて、それ以外のものではないからである。しかも生活とは個であると同時に全體であり、私生活であると同時に公生活であり、特殊と普遍とを調和統一せる生ける世界であり、その内部では客觀と歴史に充填されてゐるものであつて、決して空漠たる思想や心境や感想だけのものではないからである。作家の個人的私生活と雖も、文學者であると同時に市民であり、市民生活を通じて深く國民的運命に結びつけられてゐることを否定できない事實は、今更ここで力説するまでもないであらう。

かくて作家が作家としての自己追及に復歸すればするだけ、ますます深く自己と外部世界との全體的な關聯の認識に赴かざるを得ないことも亦自明である。作家の自己批評は、必然的にかかる國民生活の現實に對する自己の立場の、反省と省察に結びつかざるを得ないであらう。それは一方では、かかる自己の立場への批判をもつて裏づけられてゐない所謂「客觀的」批評を否定すると同時に、他方では、人間のかかる客觀的意味を無視し否定し、文學をひたすら主觀と心境の表現であると爲す主觀主義の哲學をも否定せずには措かぬ。何故なら文學は或る論者の思惟するごとく、決して單なる主觀と心境と悟りの表現ではなかつたし、またそのやうな

ものではあり得ないからである。主觀も心境も悟入も、何等かの對象や「事柄」に即せずには發し動くものではないからである。それは客觀的に存在し働きかけてくる生活事實に對し且つ即してなされる作家の判斷や思考や感動の統一的な活動であつて、そのやうな生活事實なしに、いかなる主觀や心境も存在し得ないからである。むしろ主觀や心境は、かかる生活現實に對し且つ即して發動される作家の批判であり、批判的立場の追及であつて、かかる現實と作家との全身的格闘の表現でなければならぬのだ。してみれば主觀主義の眞の徹底的實現とは、生活の深淵、人間の祕密に對するもつとも苛責なき批判、そのやうな客觀對象に對する自己の立場の、もつとも非妥協的な非情の追及とならざるを得ないであらう。痛烈なる主觀の復活とは、かかる冷酷なまでの自己批判の回復の謂でなければならぬ。

このことを言ひかへて、文學に於ける批評性の復活とは、作家、批評家自身の現實追及に於ける積極的主體性の恢復を意味する、と言つても決して誤りではないであらう。作家、批評家は、今日の私小説家のごとく徒らに周邊の事象を語る前に、まづ自己の立場を顧ることから始めなければならぬ。自己の置かれた生活の眞實の内容と位相とを突きとめなければならぬであらう。それは必然的に自己の全體に對する關係の認識にすまざるを得ないであらう。しか

も、全體への關係の認識とは、國民生活の全體的構造に於ける自己の位相についてばかりでなく、かかる構造をもたらした歴史の進行に於ける、自己の立場と機能の追及であらねばならぬ。かかる自己追及は必然の論理を以つて、客觀的運命に對する作家、批評家の一定の態度の決定、それへの實踐的な行爲にまで導かざるを得ないであらう。(しかし行爲とか實踐とかは徒らに右往左往することなく、むしろ右往左往に對して沈黙し孤坐することが最も本質的な實踐でさへあるのだ)かくて、作家、批評家の、自己の運命を投じてする生活態度の自己追及こそが、文學活動一般にとつて不可欠な前提條件であり、かかる自己批判の徹底に於て、はじめ、作家、批評家の文學活動に於ける主體性が恢復され確立されるのであらう。

だが、この意味に於ける主體性の確立——即ち作家及び批評家の現實に對する文學的責任の自覺は、彼等をして「何を何のために」描き且つ物語るかの問題、即ち小説及び批評に於ける對象の評價選定、主題の設定に對する自己批評を必然的なものとせざるを得ないであらう。いかなる生活を自己の文學的追及の對象として選定し評價するかの問題は、その對象と自己の歴史の進行に對する態度との關係上決して無視することはできないであらう。森山啓氏の私小説に於て、小説家と小説家が溫泉宿で出會し、文壇樂屋噺に類する事を得々として述べたてゐる

るが、このやうな對象の設定が、果して眞劍な文學的責任の自覺においてなされたとは思へない。彼は、文學者が、市民の聲であり人民の良心であり知性の端緒であることを、これらの私小説に於て、責任ある言葉をもつて語つたとは思へない。一般に、小説家が小説家自身の生活を文學對象とすることだけで、小説による自己追及をなしとげ得ると考へる考へ方ほど、私小説を毒するものはないのである。それは彼にとつて「何を、何のために」描くかといふ問題を、問題たらしめないで凌辱するからである。生活の歴史的推移に對する文學者の責任ある自覺は、「私のために、私の生活を」描くといふ風な遁辭を許すとは思へない。現在の私小説家は作品對象の評價選定に於て、殊に私生活の評價選定に於て、最も深い自責の念に基き乍らそれをしてゐると言ひ切れるであらうか。

だが、作家及び批評家の主體性の恢復は、彼の歴史的位位置と使命の認識に基いて「何を」即ちいかなる生活對象を、その創作や批評の對象として設定するかの問題の追及だけによつて恢復されるとは言へないであらう。それは必然的に、それと結びついて、それらの對象を「何のために」いかなる理由と目的とのために設定するかの問題、即ちその作品の主題的思想について、作家の自己認識にもとづく責任ある自己批判を必須なものとせざるを得ないであらう。實

に現在の私小説的傾向の作品は、「何のために」何人のために、何人のいかなることのために、それらの作品を書くかの問題を、眞剣な自己自身にとつてのつびきならぬ問題としてはるないやうに思はれる。

私小説再興の形に於ける知性の自己追及の恢復は、世界をいかに描きいかに表現するか、いかに虚構し構成するか、創作方法の問題と結びついて、いよいよ痛切に、世界に對する自己の態度の問題、歴史に對する自己の立場の問題を、作家及び批評家の眼前に提示しないではゐないであらう。

(十六年七月)

附

録



昭和十五年

十一月

☆中央公論 眞船豊(十三夜の明月) 岩倉政治(村長日記) ☆改造 火野葦平(幻燈部屋) 石坂洋次郎(二重生活者) ☆日本評論 宮本百合子(朝の風) 島木健作(嵐のなか) 岡本かの子(女體開顯) ☆公論 野澤富美子(凝視) 宇野浩二(人間往來) ☆文藝春秋 窪川稻子(視力) 尾崎一雄(長い井戸) 壺井榮(無花果) ☆新潮 新田潤(妻の叔父) 稻垣足穂(彌勒) 太宰治(きりぎりす) 北原武夫(湖畔にて) 島木健作(運命の人) ☆文藝 芹澤光治良(稻をつくるの詩) 火野葦平(魚眼記) 菊岡久利(北國にて) 龍瑛宗(黄家) 岡本かの子(富士) ☆文學界 林房雄(よみがへり) 笹田魚次郎(商魂記) 阿部知二(巡禮) 舟橋聖一(北村透谷) 中山義秀(美

十二月

しき罔) ☆文學者 牧屋善三(鶴の眞似できぬ鴉) 小曾戸彌一(常談) 田村忠博(海) 三上秀吉(村家帖) ☆中央公論 富澤有爲男(ふるさと) 寒川光太郎(嶺) ☆改造 林美美子(魚介) 芹澤光治良(鎮魂歌) ☆日本評論 岡本かの子(女體開顯) ☆公論 川端康成(雪中火事) 古木鐵也(かまど) 岡田三郎(熊の傳説) ☆新潮 半田義之(はずみ) 島村利正(老骨) 井上友一郎(南京の胡弓) 野口富士男(河からの風) 一瀬直行(怒りの町) 長谷健(於家郷) 島木健作(運命の人) ☆文藝 池田源尙(運・不運) 高木卓(南國譚) 岡本かの子(富士) ☆文學界 川上喜久子(光る魚族) 笹田魚次郎(商魂記) 舟橋聖一(北村透谷) ☆知性 中村地平(長耳國漂流記) 岩倉政治(新しき道義) 田畑修一郎(毛むじやらな

文の學主體

手) 縮貫六助(人間の記録)

昭和十六年

一月

☆中央公論 徳田秋聲(喰はれた藝術) 横光利一  
(終點の上で) 井伏鱒二(小間物屋) 石坂洋次郎  
(文學會) 久保田万太郎(霧のふかい夜) 武田麟太  
郎(心境) 野上彌生子(山姥) 里見淳(時) ☆改造  
横光利一(天城) 阿部知二(孤愁) 宮内寒彌(琴)  
尾崎士郎(篝火) ☆日本評論 川端康成(寒風) 眞  
船豊(田園) 豊島與志雄(立札) 武者小路實篤(七  
福神) ☆文藝春秋 志賀直哉(早春の旅) 堀辰雄  
(朴の咲く頃) 室生犀星(春菜野) 川端康成(義眼)  
☆新潮 中野重治(娘分の心) 太宰治(清貧譚) 中  
里恒子(良心) 徳永直(見舞) 上田廣(少女工から)  
榊山潤(老人) 和田傳(涙と汗) 壺井榮(歸郷) 丹

羽文雄(九年目の土) 中山義秀(風霜) 高見順(午  
後) 火野葦平(山峽にて) 島木健作(運命の人)  
☆文藝 横光利一(三つの記憶) 宮本百合子(紙の  
小旗) 室生犀星(雛子) 深田久彌(弓) 高見順(香  
港の黒死病) 窪川稻子(氣組) 尾崎一雄(病馬廠ス  
ケツケ) 榊山潤(舊山河) 日比野士朗(並木の冬)  
岡本かの子(富士) ☆文學界 太宰治(東京八景)  
田畑修一郎(あやつり人形) 日比野士朗(貧しい人  
生) 舟橋聖一(北村透谷) ☆文學者 松本頼樹(若  
山船長) 野口富士男(歲月) 宮内寒彌(女子留學  
生) 徳田一穂(寢臺車) ☆知性 太宰治(みみづく  
通信) 小山いと子(墓標) 中村地平(長耳國標流  
記) 伊藤整(得能五郎の生活と意見) 岩倉政治(新  
しき道義) 久保田万太郎(萩すゝき)  
二月  
☆中央公論 塙政盈(アルカリ地帯) 新権光子(南

文藝の主體

の湖) 木村不二男(古譚の唄) ☆改造 川端康成  
(冬の事) 矢田津世子(茶粥の記) 立野信之(旅の  
あひま) 井伏鱒二(黒い表紙の日記帳) 葉山嘉樹  
(子を護る) ☆日本評論 丹羽文雄(本となる日)  
榊山潤(明け暮れ) 眞船豊(田園) ☆公論 木山捷  
平(侏儒の友) 千家元曆(雲) 富澤有爲男(凍土)  
☆文藝春秋 中山義秀(祕書) 太宰治(服装に就い  
て) 志賀直哉(早春の旅) ☆新潮 舟橋聖一(篠  
笛) 伊藤整(櫻谷多助のノオト) 徳田一穂(わき  
道) 上林曉(悲歌) 島木健作(運命の人) ☆文藝  
上田廣(民族の海) 丹羽文雄(書翰の人) 岡本かの  
子(富士) ☆文學界 金史良(光冥) 長谷健(風の  
ない日) 丸岡明(北の海) 舟橋聖一(北村透谷)  
立野信之(流れ) ☆知性 丹羽文雄(九年目の土)  
壺井榮(大黒柱) 横山美智子(據點) 中村地平(長  
耳國漂流記) 伊藤整(得能五郎の生活と意見) 岩

倉政治(新しき道義)  
三月  
☆中央公論 堀辰雄(菜穂子) 北原武夫(獻身) 武  
者小路實篤(獨語) ☆改造 廣津和郎(流るゝ時代)  
火野葦平(兵隊) 深田久彌(病室勤務) 中野重治  
(鶴の宿) ☆日本評論 室生犀星(娘たちはな) 古  
木鐵也(雲) 久保田万太郎(いてどけ) ☆公論 小  
田嶽夫(曠野) 富澤有爲男(凍土) ☆文藝春秋 櫻  
田常久(平賀源内) 牛島春子(祝といふ男) ☆新潮  
室生犀星(伊賀専女) 丸岡明(夜祭) 田畑修一郎  
(蜥蜴の歌) 伊藤永之介(保健婦) 島木健作(運命  
の人) ☆文藝 大谷藤子(雛祭まで) 眞杉静枝(町  
の入口) 中里恒子(卵の花抄) 吉川江子(貧乏籤)  
岡本かの子(富士) ☆文學界 横光利一(將棋) 火  
野葦平(吉田山) 中山義秀(生涯) 森山啓(小さな  
世界) 上田廣(歲月) 立野信之(流れ) 舟橋聖一

(北村透谷) 阿部知二(巡禮) ☆文學者 伊藤整  
(座談) 山本和夫(再婚) 壺井榮種 木曾戸彌一  
(ある兄弟) 室生犀星(漂泊) ☆知性 岩倉政治  
(新しき道義) 大田洋子(野分立ち) 中村地平(長  
耳國漂流記)

四月

☆中央公論 正宗白鳥(一日の苦勞) 森三千代(蔓  
の花) 島木健作(出發まで) ☆改造 横光利一(恢  
復期) 藤澤恒夫(落葉) 徳永直(宿の一夜) 武田  
麟太郎(分別) ☆日本評論 岩倉政治(生くる限り)  
徳永直(風) 幸田露伴(連環記) ☆公論 富澤有爲  
男(凍土) 野澤富美子(中止した風) 舟橋聖一(悉  
皆屋康吉) ☆文藝春秋 里見弴(紙一重) 火野葦  
平(春日) 志賀直哉(早春の旅) 榊山潤(企業家)  
☆新潮 眞杉静枝(幸福の旗) 澁川曉(鳩) 鍋島道  
子(小波) 平川虎臣(光る田園) 島木健作(運命の

人) ☆文藝 阿部知二(海) 佐野順一郎(羊) 矢  
野朗(矮人の居る物情) 池田源尚(傳記) 岡本かの  
子(富士) ☆文學界 三木澄子(手巾の歌) 阿部光  
子(猫柳) 牛島春子(張鳳山) 藤島まき(あめつち)  
矢野朗(神童傳) ☆知性 火野葦平(梅の園まで)  
中村地平(長耳國漂流記) 岩倉政治(新しき道義)

五月

☆中央公論 室生犀星(蝶) 大鹿卓(墓表) 阿部知  
二(煙雨) ☆改造 眞船豊(青葉の頃) 中里恒子  
(墓地の春) 廣津和郎(歴史と歴史との間) ☆日本  
評論 立野信之(黄塵と葱) 日比野士朗(煩瑣) ☆  
公論 室生犀星(故山) 富澤有爲男(凍土) 緒方久  
(別離) ☆文藝春秋 白川渥(村梅記) 長與善郎  
(先祖孝行) 榊山潤(企業家) ☆新潮 石上玄一郎  
(罅裂) 榊山潤(好日好夜) 庄司總一(牧師の妻)  
島木健作(運命の人) ☆文藝 芹澤光治良(林檎と

ビスケット) 間宮茂輔(丘の上の家) 金史良(泥  
棒) ☆文學界 森山啓(遠方の人) 芹澤光治良(老  
年) 中里恒子(自然兒) 上田廣(歲月) 舟橋聖一  
(北村透谷) 矢野朗(神童傳) ☆知性 岩倉政治  
(新しき道義) 中村地平(長耳國漂流記) 大江賢次  
(砂丘を愛した男) 上林曉(筐底原稿) 荒木巍(近  
頃の話題)

六月

☆中央公論 廣津和郎(若い人達) 徳永直(はたら  
く歴史) ☆改造 石坂洋次郎(小さな獨裁者) 太  
宰治(千代女) 丹羽文雄(怒濤) ☆日本評論 長與  
善郎(伊乃翁の祝辭) 岡田三郎(盛衰記) ☆公論  
大鹿卓(鳥の一夜) 富澤有爲男(凍土) 淺見淵(三  
等船室) 橋本英吉(天平) 宇野浩二(二つの道)  
☆新潮 高木卓(小野小町) 岡田三郎(動物の世界)  
宮内寒彌(弟の手紙) 島木健作(運命の人) ☆文藝

窪川稻子(一枚の繪葉書) 富澤有爲男(壺) 上林曉  
(玄關抄) 寒川光太郎(樹木誌) 織田作之助(雪の  
夜) 丸岡明(青春) 徳永直(二階借り) ☆文學界  
深田久彌(才覺) 森山啓(誰にささげん) 橋本英吉  
(寵兒の生涯) 田中英光(雲白く草青し) 立野信之  
(流れ) 上田廣(歲月) 舟橋聖一(北村透谷) ☆知  
性 里村欣二(悔恨) 深田久彌(ある親子) 日下典  
子(黒潮)

七月

☆中央公論 火野葦平(土鈴) 上田廣(或日の水間  
部隊長) 志賀直哉(淋しき生涯) 島木健作(關の白  
河) ☆改造 里見弴(向日葵) 織田作之助(立志  
傳) 高見順(諸民族) 火野葦平(神話) 正宗白鳥  
(讀後の疑惑) ☆日本評論 高見順(バリーの犬)  
幸田露伴(連環記) ☆公論 尾崎士郎(青春) 富澤  
有爲男(凍土) ☆文藝春秋 金史良(郷愁) 上田廣

☆中央公論 石川達三(航海日誌) 川上喜久子(大塊老人) 加能作次郎(心境) 芹澤光治良(高原)  
 ☆改造 井伏鱒二(西金の渡船番) 橋本英吉(餘りに弱すぎる) 室生犀星(甚吉記) ☆日本評論 岩倉政治(菜草記) 阿部知二(見えざるもの) 久保田万太郎(砂の上) ☆公論 鶴田知也(ナンマツカの大男) 高木卓(術策譚) ☆文藝春秋 相野田敏之(山彦) 芹澤光治良(秘蹟) ☆新潮 島村利正(草の中) 井上弘介(心の歌) 緒方久(佛弟子) 白川渥(椽の庭) ☆文藝 石坂洋次郎(熊の皮に坐りて) 神山潤(家) 矢田津世子(鴻ノ集女房) 壺井榮(三界一心) ☆文學界 石一郎(ツンドラの種族) 立野信之(流れ) ☆知性 伊藤整(温泉療養所) 尾崎一雄(虎) 金史良(鼻)  
 十一月  
 ☆中央公論 宇野浩二(身の秋) 岩倉政治(地のは

らから) ☆改造 深田久彌(命短し) 火野葦平(新市街) ☆日本評論 石川達三(群島日誌) 橋本英吉(成長) ☆公論 上田廣(叢) 牧野吉晴(女同志) ☆文藝春秋 舟橋聖一(捨石) ☆新潮 金史良(嫁) 石原文雄(土俗) 船山馨(旅の果) 荒木精之(故園記) 西川滿(元宵記) 日向伸夫(寒驛) ☆文藝 眞船豊(山參道) 太宰治(秋) 大鹿卓(神樂歌) ☆文學界 太宰治(風の便り) 森山啓(女人譜) ☆知性 丹羽文雄(實歴史) 矢田津世子(橋) 西川芳野(おりき)

(廻轉) ☆新潮 金史良(蟲) 小田嶽夫(愛の曲) 長見義三(セコンボ) 森山啓(暮春) ☆文藝 宇野浩二(人の身) 中山義秀(囚人) 井上友一郎(青丹よし) 田宮虎彦(山川草木) ☆文學界 寺崎浩(代償) 上林曉(村夫子) 那須辰造(次郎兵衛物語) 外村繁(四十歳の日記) 上田廣(歲月) ☆知性 神山潤(夜) 小田嶽夫(夜ざくらと雪) 南川潤(昔の世界)  
 八月

☆中央公論 丹羽文雄(曉闇) 葉山嘉樹(義侠) ☆改造 島木健作(雨期) 阿部知二(鳥影) ☆日本評論 野上彌生子(アジまうで) 眞船豊(夏蔭) ☆公論 喜多壯一郎(北條時宗) 富澤有爲男(凍土) ☆文藝春秋 川端康成(天の河) 壺井榮(女傑の村) 伊藤永之介(醫者のふる村) ☆新潮 伊藤整(人間の類) 森三千代(國違ひ) 豊田三郎(林檎畑) ☆

文藝 火野葦平(鯉) 林芙美子(旅人) 葉山嘉樹(颯風) 中村地平(かしのきや靴店) ☆文學界(森山啓(逸脱と倫理) 長見義三(シシヤムの教へ)  
 九月

☆中央公論 細田源吉(異本木工政談) 尾崎一雄(狸々) 窪川稻子(旅情) ☆改造 林芙美子(秋果) 宇野浩二(青春期) ☆日本評論 大田洋子(野の子) ☆公論 伊藤永之介(肥料工場) 石坂玄一郎(漁火) ☆文藝春秋 多田裕計(長江デルタ) 室生犀星(庭) ☆新潮 徳永直(面白い町) 中里恒子(夕顔) 船橋聖一(夏瘦) 中山義秀(落胤) ☆文藝 島木健作(煙) 宇野千代(女の手紙) 寺崎浩(好意) 森三千代(公園) ☆文學界 堀辰雄(目覺め) 中村地平(慰霊祭の頃) ☆知性 中山義秀(秋晴) 壺井榮(霧の街) 伊藤永之介(恙蟲病)  
 十月

〔文藝評論集〕

昭和十五年

- |       |                   |        |     |                |        |
|-------|-------------------|--------|-----|----------------|--------|
| 十月    | 文學と精神 (青野季吉)      | 河出書房   | 六月  | 作家の肖像 (稻垣達郎)   | 大觀堂    |
| 十一月   | 文學と倫理 (北原武夫)      | 中央公論社  | 七月  | 地靈の類 (阿部六郎)    | 中央公論社  |
|       | 藝術の構想 (大井廣介)      | 竹村書房   |     | 民族的優越感 (保田與重郎) | 實業之日本社 |
| 十二月   | 文學の思考 (窪川鶴次郎)     | 河出書房   |     | 哲學的文學 (谷川徹三)   | 三笠書房   |
|       |                   |        |     | 意志と情熱 (十返一)    | 通文閣    |
| 昭和十六年 |                   |        | 八月  | 作家論 (一) (正宗白鳥) | 創元社    |
| 一月    | 作家論 (中村光夫)        | 中央公論社  |     | 小説の構成 (川端康成)   | 三笠書房   |
|       | 文學の饗宴 (岩上順一)      | 大觀堂    |     | 伊藤左千夫 (山本英吉)   | 東京堂    |
| 二月    | 文藝の日本的形成 (矢崎彈)    | 山雅房    |     | 生活の文學 (岡田三郎)   | 萬里閣    |
|       | 經堂襟記 (青野季吉)       | 筑摩書房   | 九月  | 歴史と文學 (小林秀雄)   | 創元社    |
| 三月    | 展望・現代日本文學 (吉田精一編) | 修文館    |     | 作家と生活 (徳永直)    | 桃蹊書房   |
| 四月    | 藝術の運命 (龜井勝一郎)     | 實業之日本社 |     | 現代文學の理想 (市川爲雄) | 赤塚書房   |
|       | 文學の眞實 (青柳優)       | 赤塚書房   | 十月  | 美の擁護 (保田與重郎)   | 實業之日本社 |
| 五月    | 事變下の文學 (板垣直子)     | 第一書房   |     | 明治の作家 (内田魯庵)   | 筑摩書房   |
|       |                   |        | 十一月 | 作家論 (中島健蔵)     | 河出書房   |
|       |                   |        |     | 文學的人性論 (河上徹太郎) | 實業之日本社 |

あとがき

批評的思惟にとつてその活動を止めていいといふ瞬間は決して無い。  
 私はさきに評論集「文學の饗宴」を編んだ。それは私自身意外なほど多くの  
 讀者を得た。私は、自分の著書がどうだつたと言ふのではない。さうではなく  
 て、文藝評論がそんなにも廣く讀まれてゐるといふ事實——ただこの事を力強  
 く感じるのだ。私は知的世代の豊かな登場を豫感する。批判的精神は決して地  
 に墮ちてはゐないのだ。それは黙々として考へる人々の胸に生きてゐる。  
 このことを信ずれば信ずるだけ、益々私は自分自身の文藝批評に對する省察  
 を強めないではゐられない。過ぐる一年間、私の批評的努力は、言ふならば自  
 己不満、自己反逆の連続であつた。しかしその痛苦は、何といふ文學の悦びと

楽しみに満たされてゐたことであらう。一つの結論を書き終つた瞬間から、それに對する自己剔抉が始まるのだ。一つの分析。一つの解明。一つの概括。それをするのは何といふ批評の悦びであらう。しかもその分析、解明、概括が完成した瞬間から、それを再分析し、再解明し、再概括し、より高い思想的完成をめざして思惟せよといふ内心の言葉を聽かねばならぬのだ。まさしく、批評的思惟にとつて休止の時は寸刻もないことを、本書に於けるほど痛切に感じさせられたことはないのである。

その意味で本書は、私にとつていはば性格的な文學への愛執と格闘とのなかから生れたものである。私は文學に執着する。その中に含まれてゐるものであるならば、それが寶石であらうと砂礫であらうと區別はない。ひとしく文學の悦ばしき微光を帯びて私には見える。それを崇めるのではない。むしろその美しき混亂の中にわれとわが身を投じ、思惟の限りをつくしてもその光芒を突きとめようとする緊張と意欲に冷靜なのだ。創痕は尠くないであらう。だが、自

己超克をめざす批判的知性にとつて、かかる創こそはむしろ主體の證である。我々は高くとまつてはゐられぬのだ。

そのやうな私にとつて、ここに集められた論文を、嘗つて発表した時のままの形で集録することは苦痛に堪へぬことであつた。私は可能な限りそれに手を加へた。論旨や結論を一層明白にすべく改稿したところも多い。私は本書をもつて、私の本年度に於ける文藝批評の活動を綜合したと考へる。

性來、才菲く知足らざる私である。もとより過誤なきを保しがたい。然し、若く、考へる世代への信賴が私に勇氣を與へる。彼等とともに我々は自己を乗り越えて進み得るであらう。私は強くそのことを信ずる。

本書の出版に當つて、私に與へられた桃蹊書房山本平八郎氏と大木滋氏遠藤徳世氏の御厚情に熱い感謝を捧げたい。

昭和十六年十二月

著 者

評論文集  
文學の主体

昭和十七年二月十日印刷  
昭和十七年二月十三日發行

定價二圓三十錢

東京市牛込區加賀町一丁目三番地

著者 岩上順一

東京市日本橋區本石町三丁目二番地

發行者 山本平八郎

東京市牛込區櫻町七番地

印刷者 堀修造

東京市日本橋區本石町三丁目二番地

發行所 桃蹊書房

振替東京一七三四一九番  
文協會員二〇五四六番

東京市神田區渡路町二丁目九番地

配給元 日本出版配給株式會社

東京市牛込區櫻町七番地

印刷所 大日本印刷株式會社  
板町工場

東京市 振替 桃蹊書房 東京市  
 九一四三七一 町石本橋本日

德永直著  
 上林曉著  
 澤村勉著  
 窪田空穂著  
 立野信之著  
 日夏耿之介著  
 小寺融吉著  
 尾崎士郎著  
 平林たい子著  
 立野信之著

作家と生活  
 悲歌  
 現代映画論  
 短歌をめぐるて  
 連翹  
 黄眠文學隨筆  
 郷土舞踊と盆踊  
 日本英雄論  
 眠れぬ褥  
 流

定價二圓三〇錢送一二頁美裝  
 定價二圓三六二錢送一二頁美裝  
 定價二圓三八四錢送一二頁美裝  
 定價二圓四八〇錢送一二頁美裝  
 定價二圓四一二錢送一二頁美裝  
 定價二圓四九〇錢送一二頁美裝  
 定價三圓二〇錢送一二頁美裝  
 定價二圓三五〇錢送一二頁美裝  
 進行中  
 進行中  
 進行中  
 進行中  
 進行中



925
53

終